

茨城県教育財団文化財調査報告第126集

一般国道118号道路改築事業
地内埋蔵文化財調査報告書

番城内遺跡

平成9年6月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第126集

一般国道118号道路改築事業 地内埋蔵文化財調査報告書

ばんじょううち
番城内遺跡

平成9年6月

茨城県
財団法人 茨城県教育財団



番城内遺跡遠景 (南から)

序

大子町は、茨城県の北部に位置し、八溝山地と久慈山地に挟まれた地域です。そのため、一般国道118号は、町の中央部を久慈川に沿って山間部を通る道路であるため、狭く屈曲しており危険箇所も多くありました。また、観光シーズンには、訪れる観光客の車で交通渋滞も発生していました。それらを解消することを目的として、一般国道118号道路改築事業が茨城県によって計画されました。しかし、その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である番城内遺跡が所在しております。

このたび、財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成7年10月から平成7年12月にかけて発掘調査を実施してまいりました。

本書は、番城内遺跡の調査成果を収録したものであり、本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、大子町教育委員会をはじめ、関係機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成9年6月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋本 昌

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成7年10月から平成7年12月まで発掘調査を実施した、久慈郡大子町大字下津原446番地ほかに所在する番城内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 番城内遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	橋 本 昌	平成7年4月～	
副 理 事 長	小 林 秀 文	平成6年4月～平成8年3月	
	中 島 弘 光	平成7年4月～	
	齋 藤 佳 郎	平成8年4月～	
常 務 理 事	一 木 邦 彦	平成7年4月～平成8年3月	
	齋 藤 紀 彦	平成9年4月～	
事 務 局 長	齋 藤 紀 彦	平成7年4月～平成8年3月	
	西 村 敏 一	平成9年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重	平成5年4月～平成8年3月	
	沼 田 文 夫	平成8年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～平成8年3月
	課 長	河 崎 孝 典	平成9年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月係長)
	課 長 代 理	清 水 薫	平成9年4月～
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔	平成6年4月～平成8年3月
	主 任 調 査 員	小 高 五 十 二	平成8年4月～
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～平成8年3月
	課 長	河 崎 孝 典	平成8年4月～平成9年3月
	課 長	鈴 木 三 郎	平成9年4月～(平成7年4月～平成8年3月主査)
	主 査	田 所 多 佳 男	平成8年4月～
	課 長 代 理	大 高 春 夫	平成7年4月～平成9年3月
	主 任	小 池 孝	平成7年4月～
	主 任	宮 本 勉	平成9年4月～
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～平成8年3月
	主 事	小 西 孝 典	平成9年4月～
調 査 第 一 課	課長(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～平成8年3月
	課長(部長兼務)	沼 田 文 夫	平成8年4月～
	調査第二班長	萩野谷 悟	平成7年4月～平成8年3月
	主 任 調 査 員	小 島 敏	平成7年10月～平成7年12月調査
	主 任 調 査 員	柴 田 博 行	平成7年10月～平成7年12月調査
整 理 課	課 長	小 泉 光 正	平成9年4月～
	主 任 調 査 員	柴 田 博 行	平成9年4月～平成9年6月整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 炭化材及び種実遺体の種類についての自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。分析結果は付章として報告する。
- 5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 6 遺跡の概略

ふりがな	いっばんこくどう ごうどうろかいちくじぎょうちないまいぞうぶんかざいちようさほうこくしよ						
書名	一般国道118号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	番城内遺跡						
巻次							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第126集						
編著者名	柴田博行						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587						
発行機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587						
発行年月日	1997(平成9)年 6月 30日						

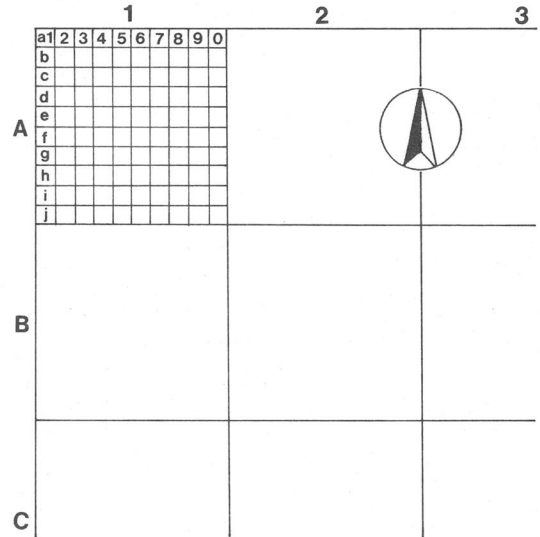
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ばんじょうち 番城内遺跡	いばらきけんくじくん 茨城県久慈郡 だいてまおおあさしもつほら 大子町大字下津原 446番地ほか	08364-0025	36度 44分 32秒	140度 23分 6秒	19951001～ 19951231	2,865㎡	一般国道118号 道路改築事業に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
番城内遺跡	集落跡	縄文時代			縄文土器, 石錘		<ul style="list-style-type: none"> • 標高90～91m • 内外面黒色処理された土器や墨書土器が出土
		弥生時代			弥生土器, 石鏃		
		平安時代	竪穴住居跡	13軒	土師器, 須恵器, 土製品 鉄製品, 石製品, 石鏃 石器, 灰釉陶器		
				土坑	2基	土師器	
時期不明		土坑	12基	土師器, 須恵器, 土製品			

凡 例

- 1 番城内遺跡の発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。
調査区は日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画し、X軸=82,600m、Y軸=49,160mの交点を基準点(A1a1)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、その組み合わせで「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに、小調査区も同様に北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。



第1図 調査区呼称方法概念図

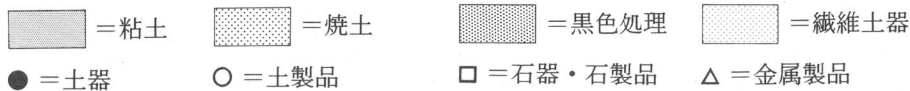
- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 土坑-S K ピット-P

遺物 土器-P 土製品-D P 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本土器-T P

土層 攪乱-K

- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については、以下のとおりである。

(1) 遺跡全体図は縮尺約400分の1とし、各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に $S = 1 / \bigcirc$ と表示した。

(3) 「主軸方向」は、炉・竈を通る軸線を主軸あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N-10°-E, N-10°-W)

なお、[]を付したものは推定である。

(4) 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径 E-高台高とし、単位はcmである。

なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

(5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測(P)番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 番城内遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 竪穴住居跡	10
2 土坑	43
3 遺構外出土遺物	47
(1) 縄文土器	47
(2) 弥生土器	48
(3) その他の遺物	49
第4節 まとめ	52
付章 番城内遺跡自然科学分析報告 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	53

插图目次

第1图 調査区呼称方法概念图	第21图 第8号住居跡実測图29
第2图 番城内遺跡調査区設定图 2	第22图 第9号住居跡実測图30
第3图 番城内遺跡周辺遺跡分布图 5	第23图 第9号住居跡出土遺物実測图(1).....32
第4图 番城内遺跡遺構全体图7~8	第24图 第9号住居跡出土遺物実測图(2).....33
第5图 番城内遺跡基本土層图 9	第25图 第10号住居跡実測图34
第6图 第1号住居跡実測图10	第26图 第10号住居跡出土遺物実測图35
第7图 第1号住居跡出土遺物実測图11	第27图 第11号住居跡実測图36
第8图 第2号住居跡実測图13	第28图 第11号住居跡出土遺物実測图37
第9图 第2号住居跡出土遺物実測图14	第29图 第12号住居跡実測图39
第10图 第3号住居跡実測图16	第30图 第12号住居跡出土遺物実測图40
第11图 第3号住居跡出土遺物実測图18	第31图 第13号住居跡実測图41
第12图 第4号住居跡実測图20	第32图 第13号住居跡出土遺物実測图42
第13图 第4号住居跡出土遺物実測图20	第33图 第9号土坑・出土遺物実測图43
第14图 第5号住居跡実測图22	第34图 第15号土坑・出土遺物実測图44
第15图 第5号住居跡出土遺物実測图22	第35图 第23号土坑・出土遺物実測图45
第16图 第6号住居跡実測图23	第36图 土坑実測图46
第17图 第6号住居跡出土遺物実測图24	第37图 遺構外出土縄文土器拓影图48
第18图 第7号住居跡実測图26	第38图 遺構外出土弥生土器拓影图49
第19图 第7号住居跡出土遺物実測图(1).....27	第39图 遺構外出土遺物実測图(1).....50
第20图 第7号住居跡出土遺物実測图(2).....28	第40图 遺構外出土遺物実測图(2).....51

表目次

表1 番城内遺跡周辺遺跡一覧表 6	表3 番城内遺跡土坑一覧表45
表2 番城内遺跡住居跡一覧表42	

写真図版目次

- | | | | |
|-------|--|--------|--|
| 卷頭 | 番城内遺跡遠景（南から） | P L 10 | 第11・12号住居跡遺物出土状況，第12号住居跡完掘状況 |
| P L 1 | 番城内遺跡全景 | P L 11 | 第12号住居跡P ₂ ・P ₃ 遺物出土状況，第13号住居跡完掘状況 |
| P L 2 | 調査前風景，調査終了全景，第1号住居跡完掘状況 | P L 12 | 第1・9・15号土坑完掘状況，第9・10・13・14・23号土坑遺物出土状況 |
| P L 3 | 第1・2号住居跡遺物出土状況，第2号住居跡完掘状況 | P L 13 | 第1・2・3号住居跡出土遺物 |
| P L 4 | 第3号住居跡完掘状況，第3・4号住居跡遺物出土状況 | P L 14 | 第3・4号住居跡出土遺物 |
| P L 5 | 第4号住居跡P ₁ 遺物出土状況，第5・6号住居跡完掘状況 | P L 15 | 第5・6・7号住居跡出土遺物 |
| P L 6 | 第6・7号住居跡遺物出土状況，第7号住居跡完掘状況 | P L 16 | 第7・9号住居跡出土遺物 |
| P L 7 | 第8・9号住居跡完掘状況，第9号住居跡遺物出土状況 | P L 17 | 第9・10号住居跡出土遺物 |
| P L 8 | 第9号住居跡北竈遺物出土状況，第10号住居跡完掘状況，第10号住居跡遺物出土状況 | P L 18 | 第11・12・13号住居跡出土遺物，第9・23号土坑出土遺物，遺構外出土遺物 |
| P L 9 | 第10・11号住居跡遺物出土状況，第11号住居跡完掘状況 | P L 19 | 第6・9号住居跡出土遺物，遺構外出土遺物（縄文土器・弥生土器・須恵器） |
| | | P L 20 | 各遺構・遺構外出土遺物（土製品，石器，石製品，鉄製品，古銭） |

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

一般国道118号は、大子町を久慈川に沿って縦断する重要な生活道路であるが、狭く屈曲しており、危険箇所も多くある。また、近年産業・経済の発展、車社会の発達により本国道の交通量の増加は著しく、特に、観光シーズンともなると交通渋滞がみられ、早急な対策が待たれる現状にある。この様な状況の中で、茨城県は、危険箇所の解消と交通渋滞の緩和を図るために、一般国道118号道路改築事業を計画した。

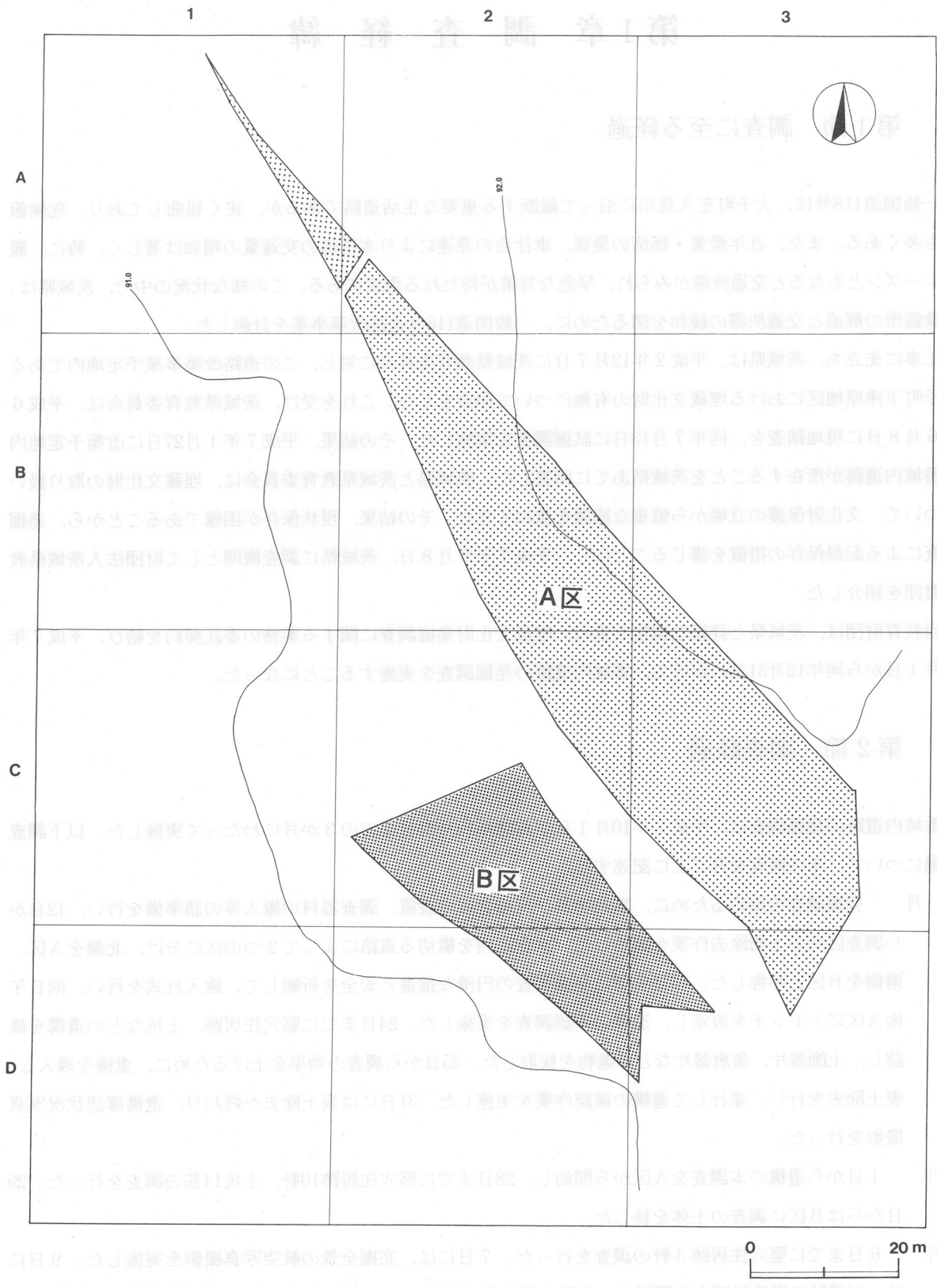
工事に先立ち、茨城県は、平成2年12月7日に茨城県教育委員会に対し、この道路改築事業予定地内である大子町下津原地区における埋蔵文化財の有無について照会をした。これを受け、茨城県教育委員会は、平成6年6月8日に現地踏査を、同年7月13日に試掘調査を実施した。その結果、平成7年1月27日に改築予定地内に番城内遺跡が所在することを茨城県あてに回答した。茨城県と茨城県教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を重ねてきた。その結果、現状保存が困難であることから、発掘調査による記録保存の措置を講じることにし、平成7年8月8日、茨城県に調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

当教育財団は、茨城県と詳細な調整を重ね、埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成7年10月1日から同年12月31日にかけて、番城内遺跡の発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

番城内遺跡の発掘調査は、平成7年10月1日から同年12月31日までの3か月にわたって実施した。以下調査経過について、その概要を月ごとに記述する。

- 10月 発掘調査を始めるために、事務所及び現場倉庫の設置、調査器材の搬入等の諸準備を行い、12日から調査区内の上物除去作業を開始した。調査区内を横切る道路によって2つの区に分け、北側をA区、南側をB区と呼称した。16日午前に発掘調査の円滑な推進と安全を祈願して、鍬入れ式を行い、同日午後A区にトレンチを設定し、遺構の確認調査を実施した。24日までに竪穴住居跡、土坑などの遺構を確認し、土師器片、須恵器片などの遺物を採取した。25日から調査の効率を上げるために、重機を導入し、表土除去を行い、並行して遺構の確認作業を実施した。31日には表土除去が終わり、遺構確認状況写真撮影を行った。
- 11月 1日から遺構の本調査をA区から開始し、28日までに竪穴住居跡10軒、土坑14基の調査を行った。29日からはB区に調査の主体を移した。
- 12月 6日までに竪穴住居跡3軒の調査を行った。7日には、完掘全景の航空写真撮影を実施した。9日には、当遺跡の現地説明会を開催し、多数の見学者が来跡した。これまでに作成した図面類の点検、修正、遺物の洗浄及び注記等を行い、15日に全ての現地調査を終了した。18日からは、撤収準備に入り、26日には撤収作業も完了した。



第2図 番城内遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

番城内（通称 ばんじょうぢ）遺跡は、茨城県久慈郡大子町大字下津原446番地ほかに所在し、大子町役場から南東へ2.5kmほどに位置している。

大子町は、県都水戸市より北へ約55kmの距離に位置し、茨城県の北西端の町である。隣接する町村は、東部で里美村と水府村、西部で栃木県の馬頭町、黒羽町、那須町、南部で山方町と美和村、北部で福島県の棚倉町、塙町、矢祭町の10か町村である。町域は、東西約19km、南北約28kmで南北にやや長いひし形を示し、面積は約325km²である。町の面積を地形的に区分すると、山地が約70%、平地が約20%、河川その他が10%である。

地形的には、久慈川が町の中央部を南に流れ、北西部には県内最高峰の八溝山（1022.2m）があり、山地が南北にのび、東部には生瀬盆地と久慈山地の断崖地形が形成されている。久慈川の流域地形は、北部から八溝川、押川、滝川の合流によって作り出された氾濫原や河岸段丘が広く発達し、大子盆地を造っている。盆地南端の袋田から川下間の穿入蛇行区域には、河岸段丘が両岸に発達し、川下以南はほぼ直線的な峡谷地形となる。久慈川の河岸段丘は、大きく分けて上、中、下の三段に区分できる。上位段丘は、山方町盛金西の入山付近に広くみられ、西金橋本、山造、南田気、北田気、矢田などの山の中腹に平坦な丘陵地形を形成している。中位段丘は、久慈川の段丘では最も広く発達しており、大子、池田などで形成され、上小川の宮平面に対比される。また、この段丘は久慈川の各支流にも発達している。下位段丘は、久慈川流路に沿って発達し、袋田などのある平坦地がこれにあたり、川床から5～10mで表面に関東ローム層のないことが特徴となっている。その河岸段丘面上が人間の生活面であり、畑と人家が点在している。町は八溝山や男体山（654m）などの名山、袋田の滝、久慈川の溪流などの美しい自然に恵まれ、奥久慈県立自然公園の中心地として、さらに、茶、こんにゃく、りんごなどの特産品もあり観光面でも発展してきた。

番城内遺跡は、久慈川と滝川の合流する右岸の河岸下位段丘に位置し、標高は約90～91mである。調査前の現況は、畑地である。

参考文献

- ・大子町史編さん委員会 『大子町史 通史編 上巻』 1988年3月
- ・大子町史編さん委員会 『大子町史 写真集』 1980年12月
- ・大森昌衛 蜂須紀夫 『茨城の地質をめぐって』 1987年8月

第2節 歴史的環境

大子町には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在するが、特に、縄文時代と奈良・平安時代の遺跡が多く確認されている。当町は、久慈川とその支流の広がりにより、水利に恵まれていることから、古代より人々が生活を営む場として絶好の舞台となってきた。ここでは、番城内遺跡周辺の主な遺跡を中心に、時代を追って述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、確認されていないが、昭和58年に仲山古墳群^{なかやま}(17)⁽¹⁾の調査をしている時、この古墳を造るために削った関東ローム層から剥片が出土しているので、旧石器時代にここに人が生活していたことがわかる。

縄文時代の遺跡は、約60か所ある。時期ごとに遺跡分布を見てみると、早期から前期の遺跡は久慈川本流に沿った丘陵上に分布するものが多く、中期から後期の遺跡は久慈川支流の押川流域に多く見られる。縄文時代早期の遺跡は、堂平遺跡^{どうだいら}、内久根遺跡^{うちくね}〈6〉、埴平A遺跡^{はなわだいら}〈3〉などで、茅山式の土器片が出土している。縄文時代前期の遺跡は、塩の平遺跡^{しお だいら}で、関山式・黒浜式の土器片が出土している。縄文時代中期の遺跡は、古館遺跡^{ふるだて}〈2〉、川西遺跡^{かわにし}〈7〉、磯部平遺跡^{いそべだいら}〈10〉、諏訪台遺跡^{すわだい}〈12〉、西境田遺跡^{にしきかいだ}〈55〉、大門遺跡^{だいもん}、日の上遺跡^{ひ うえ}、町付B遺跡^{まちづき}などがある。西境田遺跡は、大野川とその支流に挟まれた丘陵上に立地し、標高260mである。遺物は、阿玉台式、加曾利E I 式・E II 式の土器片と打製石斧が出土している。また、日の上遺跡は、押川の河岸段丘上に立地し、鯉節形の硬玉製大珠が出土している。縄文時代後期の遺跡は、勝田遺跡^{かつた}〈4〉、後谷津遺跡^{うしろやつ}〈5〉、川西遺跡〈7〉などがある。後谷津遺跡からは、土偶の右脚部、石棒、石皿、磨石や堀之内式・加曾利B式の土器片などが出土している。川西遺跡からは、石鏃、石皿、石錘、蛇身形装飾付土器の破片が出土している。

弥生時代の遺跡は、猪鼻峠遺跡^{いのなとうげ}で、東中根式系の壺形土器が出土している。また、奥久慈憩いの森の入り口辺りから、弥生時代後期の壺形土器が単独出土している。

古墳時代の遺跡は、古館遺跡〈2〉、下の内A遺跡^{しも うち}〈11〉、下野宮宿遺跡^{しものみやしゅく}、上岡古墳群^{うわおか}〈14〉、仲山古墳群^{なかつの}〈17〉、中田野遺跡^{なかつの}〈21〉、上の台遺跡^{うえ だい}〈22〉、岡の内A遺跡^{おか うち}〈44〉、大門遺跡などがある。上岡古墳群は、2基の古墳からなる。また、仲山古墳群は、6基の古墳からなり、内1基は前方後円墳である。仲山古墳からの出土遺物は、直刀、刀子、鉄製鎌である。

奈良・平安時代の遺跡は、埴平A遺跡〈3〉、後谷津遺跡〈5〉、埴平B遺跡⁽²⁾〈15〉、埴平C遺跡⁽²⁾〈16〉、中田野遺跡^{なかつの}〈21〉、中村平A遺跡^{なかつの}〈23〉、立下遺跡^{たてした}〈24〉、原の平B遺跡^{はら たいら}〈25〉、原の平A遺跡^{たかき}〈26〉、高久遺跡^{たかき}〈27〉、大草遺跡^{おおくさ}〈28〉、山根遺跡^{やまね}、高内遺跡^{たかうち}、鎮ヶ内遺跡^{ちんごうち}、大縄遺跡^{おおなわ}、新屋遺跡^{しんや}、下上沢遺跡^{しもうわざわ}〈29〉、打野遺跡^{うちの}、幡福沢遺跡^{まんぶくざわ}〈37〉、初神遺跡^{はつかみ}〈39〉、境明神遺跡^{さかいのみょうじん}、寺内遺跡^{てらうち}、広町遺跡^{ひろまち}〈52〉、弥平土地遺跡^{やへいどち}〈54〉などがある。前述した遺跡は、押川流域だけのものであるが、このほかにも当時代の遺跡は多い。埴平A遺跡からは、竪穴住居跡1軒と内黒の坏・高台付坏が出土している。

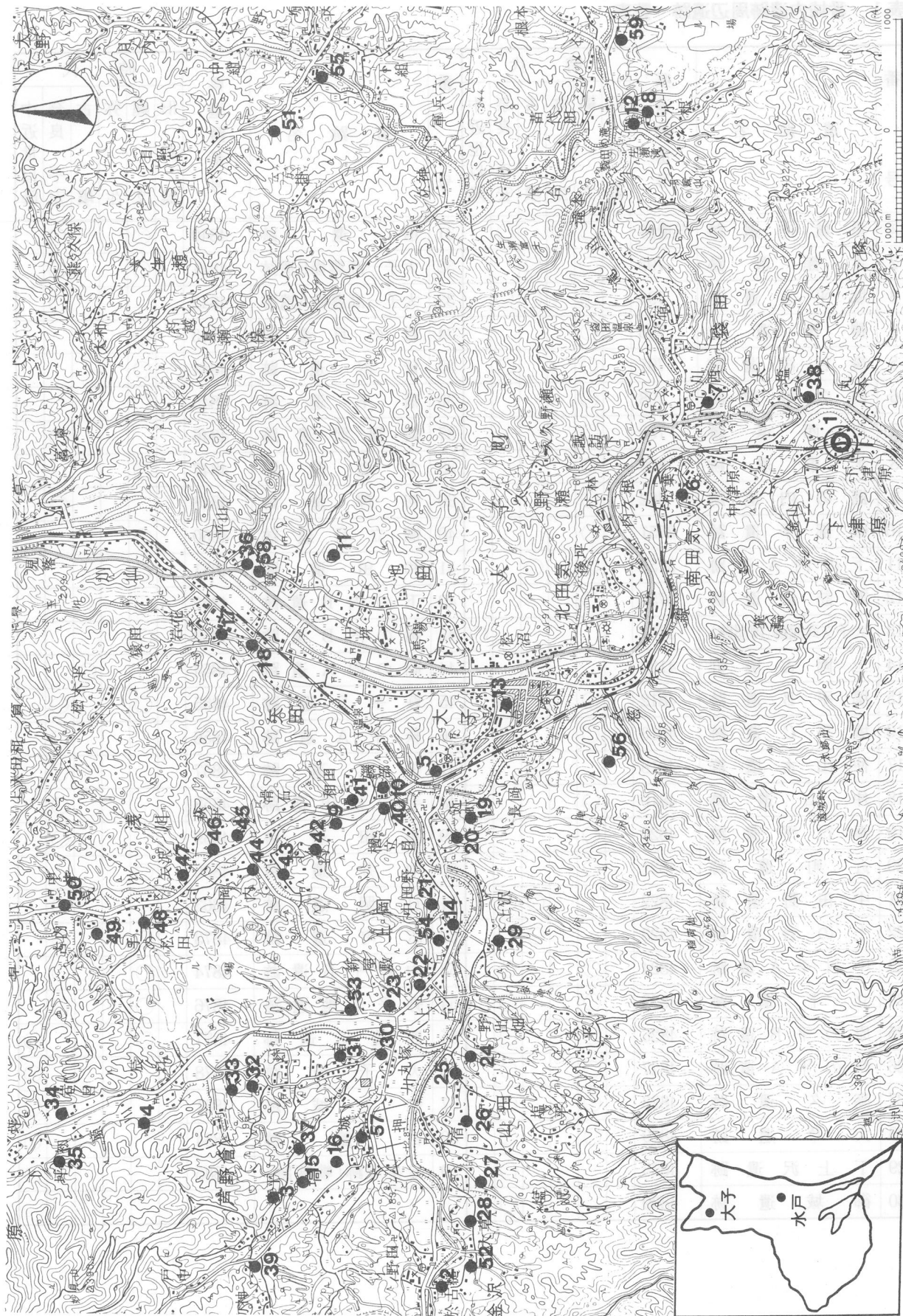
中世の遺跡では、大子城跡^{だいご}〈56〉、月居城跡^{つきおり}、小川城跡^{おがわ}、依上城跡^{よりかみ}〈57〉、町付城跡^{まちづき}、荒蒔城跡^{あらかき}、古館跡^{ふるだて}〈58〉、宝泉寺跡^{ほうせんじ}〈59〉などがある。大子地方では、長い間、白河結城氏や岩城氏、佐竹氏の勢力の狭間で攻防が繰り返されたため多くの城館跡が残っている。その多くは、山頂を切り崩した山城や、舌状台地に堀を設けるなど、山や川の自然条件を生かしたものである。

註

- (1) 大子町史編さん委員会 『仲山古墳群三号墳発掘調査報告書』 1986年1月
- (2) 千種重樹 『埴平C遺跡』 1995年9月
- (3) 山武考古学研究所 『宝泉寺跡発掘調査報告書』 1992年3月

参考文献

- ・大子町史編さん委員会 『大子町史 通史編 上巻』 1988年3月
- ・大子町史編さん委員会 『大子町史 写真集』 1980年12月
- ・大子町史編さん委員会 『大子町史料別冊〔2〕 大子町の遺跡と遺物』 1981年3月
- ・大子町史編さん委員会 『大子町史 資料編 上巻 原始・古代・中世・近世』 1984年8月
- ・茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年3月
- ・茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会 『茨城県史料考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年3月
- ・茨城県史編さん原始古代史部会 『茨城県史料考古資料編 古墳時代』 1974年2月



第3図 番城内遺跡周辺遺跡分布図

表1 番城内遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代					番号	遺跡名	県遺跡番号	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安				中近世以降	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世以降
①	番城内遺跡	当遺跡		○	○		○		31	宿遺跡	4840		○				
2	古館遺跡	793		○		○			32	大子一高農場B遺跡	4841		○				○
3	塙平A遺跡	794		○		○	○		33	大子一高農場A遺跡	4842						○
4	勝田遺跡	796		○					34	岩の目遺跡	4843		○				
5	後谷津遺跡	797		○			○		35	皆沢遺跡	4844		○				
6	内久根遺跡	798		○					36	宿平遺跡	4845		○				
7	川西遺跡	799		○					37	幡福沢遺跡	4846						○
8	水根遺跡	800		○					38	大塩遺跡	4847		○				
9	掘の内遺跡	802		○					39	初神遺跡	4848						○
10	磯部平遺跡	3751		○					40	櫛立目遺跡	4850		○				
11	下の内A遺跡	3752		○		○			41	和田遺跡	4851		○				
12	諏訪台遺跡	3754		○					42	下の内B遺跡	4852		○				
13	大子文武館跡(陣屋跡)	3761						○	43	岡の内B遺跡	4853		○				
14	上岡古墳群	4130				○			44	岡の内A遺跡	4854					○	
15	塙平B遺跡	4812		○			○		45	萩平B遺跡	4855		○				○
16	塙平C遺跡	4813		○			○		46	萩平A遺跡	4856						○
17	仲山古墳群	4818				○			47	矢沢遺跡	4857						○
18	仲山遺跡	4819		○					48	手の松田遺跡	4858						○
19	奉行平遺跡	4820		○					49	池田遺跡	4859						○
20	近町遺跡	4821		○					50	中井遺跡	4860		○				
21	中田野遺跡	4822				○	○		51	日照遺跡	4863						○
22	上の台遺跡	4823				○			52	広町遺跡	4873		○				○
23	中村平A遺跡	4824		○			○		53	中村平B遺跡	4874		○				○
24	立下遺跡	4825		○			○		54	弥平土地遺跡	4876		○				○
25	原の平B遺跡	4826		○			○		55	西境田遺跡	4877		○				○
26	原の平A遺跡	4827		○			○		56	大子城跡	4878						○
27	高久遺跡	4828		○			○		57	依上城跡	4881						○
28	大草遺跡	4829		○			○		58	古館跡	4884						○
29	下上沢遺跡	4835					○		59	宝泉寺跡(戦陣跡)	4885						○
30	御城遺跡	4839					○										



第4図 番城内遺跡遺構全体図

第3章 番城内遺跡

第1節 遺跡の概要

番城内遺跡は、大子町役場の南東約2.5kmに位置し、久慈川の右岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の標高は90～91mで、久慈川との比高は約8mである。調査区域は東西約54m、南北150m、面積2,865㎡で、現況は畑地である。

今回の調査によって、確認した遺構は平安時代の竪穴住居跡13軒と土坑2基、時期不明の土坑12基である。遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）に27箱出土している。遺物の大部分は平安時代の土師器や須恵器の坏、高台付坏、甕である。その他には、縄文土器片、弥生土器片、石鏃、管状土錘、石錘、鉄製紡錘車、砥石、炭化種子及び瑪瑙の原石が出土している。

第2節 基本層序

テストピットは、調査区南東部のC3e7区に設定し、第4図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、厚さ16～30cmの暗褐色の耕作土で、砂を少量、炭化物を微量、炭化粒子を極微量含む。

第2層は、厚さ20～42cmの黒褐色土で、砂を中量、炭化粒子を微量、ローム粒子を極微量含む。

第3層は、厚さ30～48cmの黄褐色の砂層で、ローム粒子微量含む。粘性、締まり共に弱い。

第4層は、厚さ14cmのにぶい黄褐色土で、焼土・炭化粒子・ローム粒子・粘土を微量、砂を中量含む。

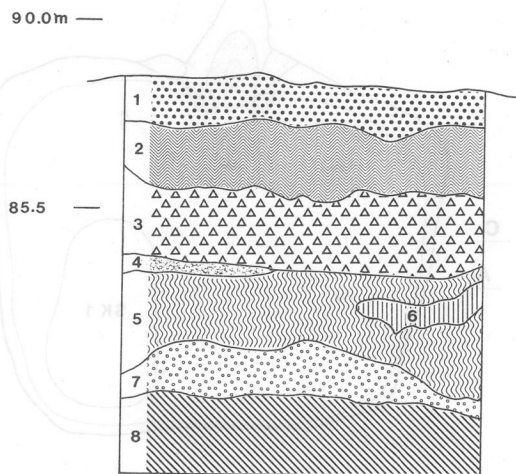
第5層は、厚さ38～74cmのにぶい黄褐色の粘土層で、砂・鉄分を微量含む。粘性、締まり共に強い。

第6層は、厚さ14cmの暗灰黄色の粘土層で、鉄分を中量、砂を微量含む。粘性、締まり共に強い。

第7層は、厚さ6～30cmのにぶい黄褐色の粘土層で、砂を極微量含む。粘性、締まり共に強い。

第8層は、厚さ28～46cmの褐色の粘土層で、砂を極微量含む。粘性、締まり共に強い。

遺構は、表土下25～70cmの第3層上面で確認した。



第5図 番城内遺跡基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡13軒を検出した。以下、検出した竪穴住居跡と出土遺物について記載する。

第1号住居跡（第6図）

位置 調査A区の北西部，B2c3区。

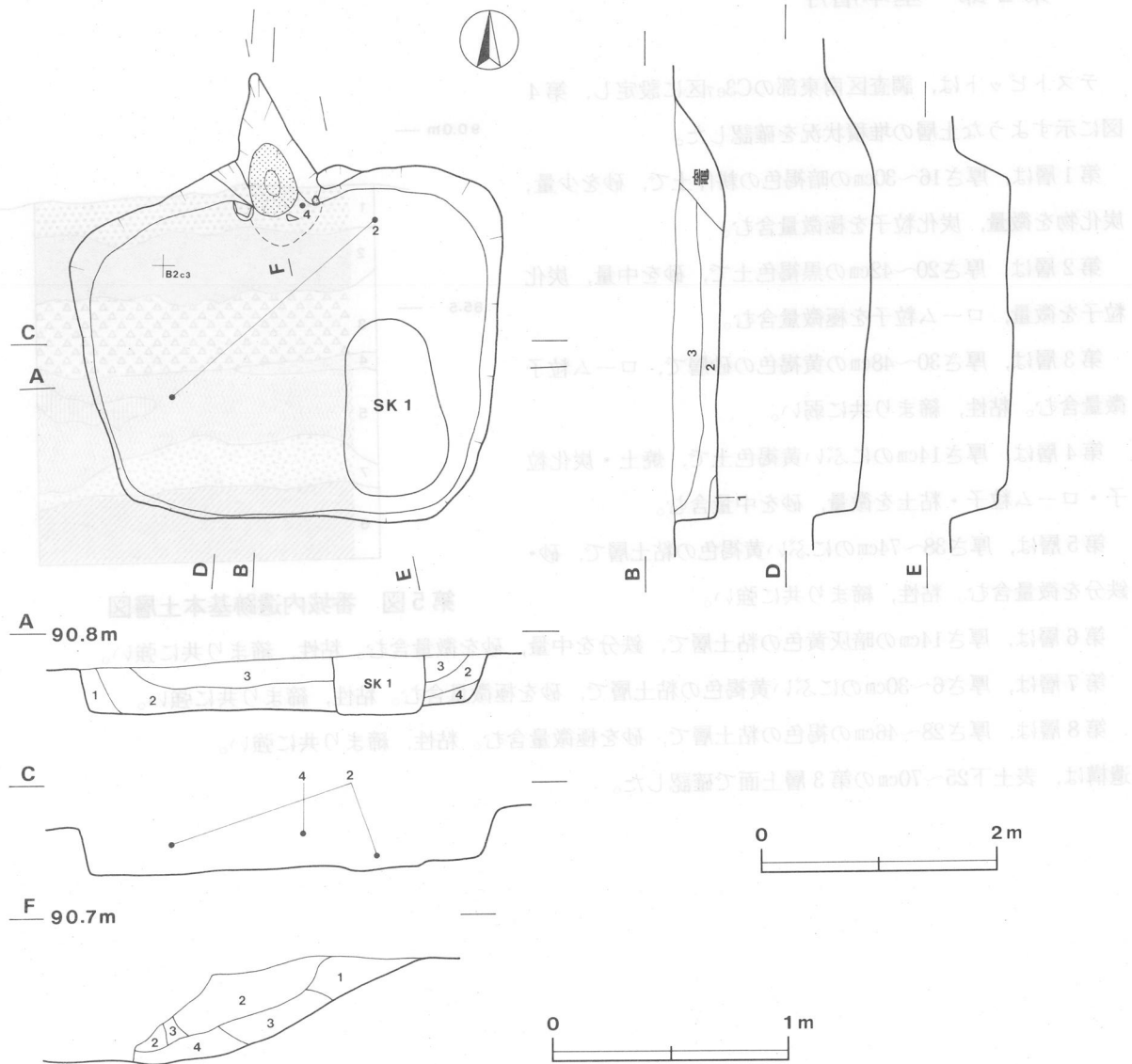
重複関係 本跡は，第1号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.50m，短軸2.90mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-8°-W

壁 壁高は40~50cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に平坦である。南東側の床に第1号土坑の4cmの掘り込みがある。



第6図 第1号住居跡実測図

竈 北壁中央部に構築されている。天井部と両袖部は残存しておらず、掘り込みのみを確認した。掘り方の規模は煙道部から焚き口部まで150cm、壁外への掘り込みは、幅73cm、奥ゆき80cmである。火床部は床面を約5cm掘り窪めており、僅かではあるが焼けて赤変している。煙道部に向かって緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・砂微量、焼土粒子極微量
- 2 黒褐色 砂少量、炭化物・炭化粒子微量、焼土粒子極微量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・砂微量、焼土小ブロック極微量
- 4 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量、砂微量

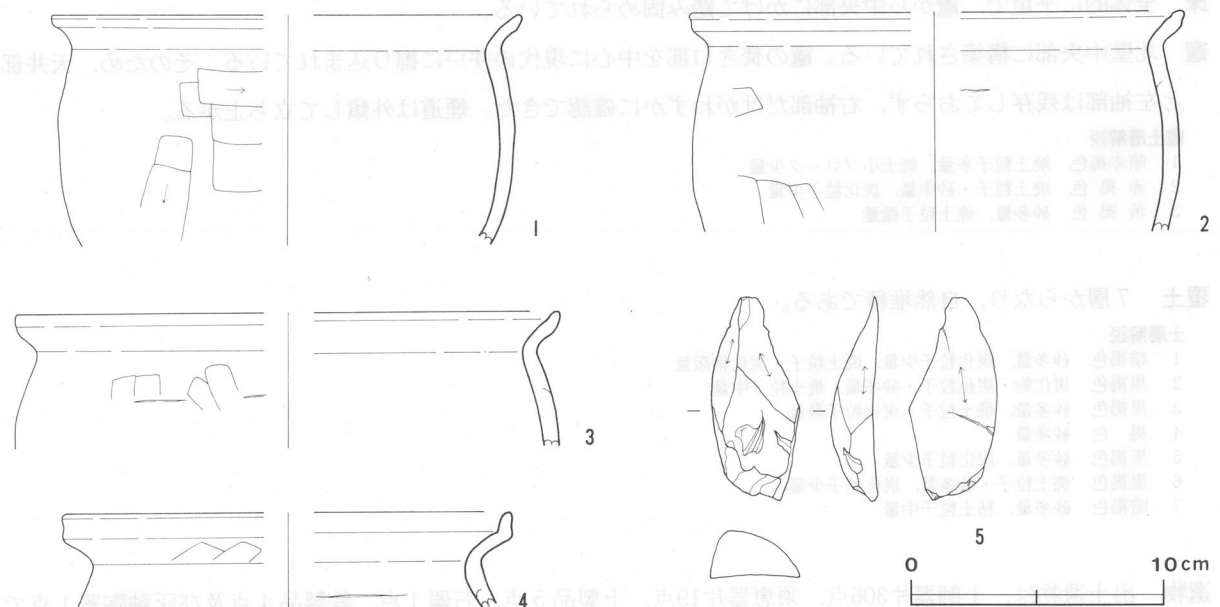
覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・砂微量
- 2 暗褐色 炭化粒子・砂微量、焼土粒子極微量
- 3 黒褐色 炭化粒子・砂微量、焼土粒子極微量
- 4 黒褐色 炭化粒子・砂極微量

遺物 出土遺物は、土師器片115点、石製品1点である。第7図1の土師器甕は竈内覆土中から、2の土師器甕は北東コーナー付近覆土下層の土器片と南西コーナー付近覆土中層から出土した土器片が接合したものである。3の土師器甕は覆土中から、4の土師器甕は竈内覆土中層から出土している。また、5の砥石は北東部の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代（9世紀後半）と考えられる。



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	甕 土師器	A〔18.9〕 B〔9.2〕	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面ヘラナデ。	長石・石英・スコリアにぶい黄橙色 普通	P1 5% PL13 竈内覆土中
2	甕 土師器	A〔19.8〕 B〔8.9〕	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎し、頸部は「く」の字状に折れる。口縁部は僅かに外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面上位横方向のナデ、中位縦方向のヘラ削り。	長石・石英にぶい黄橙色 普通	P2 5% PL13 北東コーナー付近覆土下層及び南西コーナー付近覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	甕 土師器	A[21.8] B(5.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎し、頸部は「く」の字状に折れる。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面ヘラナデ。	長石・石英・雲母にぶい黄橙色普通	P3 5% PL13 覆土中
4	甕 土師器	A[18.0] B(3.9)	体部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に折れる。口縁部は僅かに外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面ヘラナデ。	長石・石英・スコリア・雲母にぶい橙色普通	P4 5% PL13 竈内覆土中層

図版番号	器種	計 測 値 (cm)					石 材	出 土 地 点	備 考
		長 さ	幅	厚 さ	孔 径	重 量 (g)			
第7図5	砥石	(8.2)	(3.6)	1.9	—	(47.2)	凝灰岩	覆土中	Q1 PL20

第2号住居跡（第8図）

位置 調査A区の中央部，C2a0区。

規模と平面形 長軸5.20m，短軸4.54mの長方形である。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は25～34cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で，竈から中央部にかけて踏み固められている。

竈 北壁中央部に構築されている。竈の焚き口部を中心に現代の井戸に掘り込まれている。そのため，天井部と左袖部は残存しておらず，右袖部だけがわずかに確認できた。煙道は外傾して立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
- 2 赤褐色 焼土粒子・砂中量，炭化粒子少量
- 3 黄褐色 砂多量，焼土粒子微量

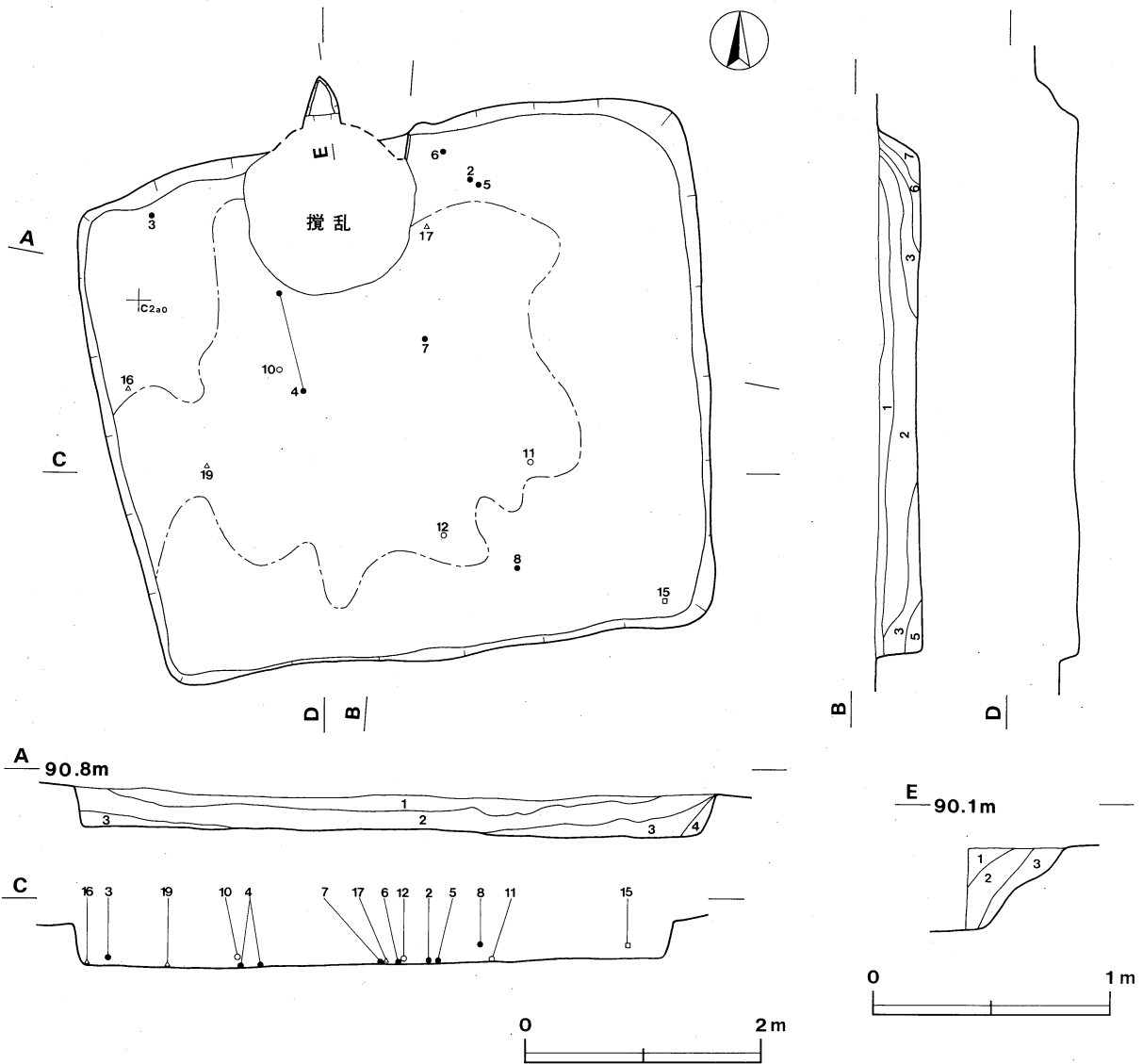
覆土 7層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 砂多量，炭化粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 炭化物・炭化粒子・砂多量，焼土粒子中量
- 3 黒褐色 砂多量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 砂多量
- 5 黒褐色 砂多量，炭化粒子少量
- 6 黒褐色 焼土粒子・砂多量，炭化粒子少量
- 7 暗褐色 砂多量，粘土粒子中量

遺物 出土遺物は，土師器片306点，須恵器片19点，土製品5点，石器1点，鉄製品4点及び灰釉陶器1点である。第9図2の土師器坏と5の土師器甕は北壁中央付近床面から，3の土師器甕は北西コーナー付近覆土下層から，4・7の土師器甕は中央部床面から，6の土師器甕は竈付近床面から，8の須恵器甕は南壁中央付近覆土中層から，9の灰釉陶器高台付椀は北西部の覆土中から出土している。また，15の磨石は南東コーナー付近覆土中層から，16の鋤先は西壁中央付近床面から，17の刀子は中央部北寄り床面から，19の不明鉄製品は中央部西寄り床面から出土している。10・12の管状土錘は中央部の覆土下層から，11の管状土錘は中央部の床面から出土している。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から平安時代（9世紀後半）と考えられる。



第8図 第2号住居跡実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	坏 土師器	A[11.2] B 5.3 C[6.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり口縁部に至る。	ロクロ整形。内面体部・底部ヘラ磨き。体部外面横ナデ。底部ナデ。	長石・石英・スコリア・雲母にぶい橙色普通	P5 20% PL13 覆土中 内面黒色処理
2	坏 土師器	A[16.2] B 5.5 C[8.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり口縁部は外傾する。	ロクロ整形。口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面下端回転ヘラ削り。	スコリア・雲母 浅黄橙色 普通	P6 20% PL13 北壁中央付近床面 内面黒色処理
3	甕 土師器	A[19.2] B(8.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎し、頸部は「く」の字状に折れる。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面ヘラナデ。	長石・石英・スコリア・礫にぶい黄橙色普通	P7 10% PL13 北西コーナー付近 覆土下層
4	甕 土師器	A[17.4] B(12.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・パミス黄橙色普通	P8 5% PL13 中央部床面
5	甕 土師器	A[18.2] B(8.1)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は僅かに外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向のヘラ削り後ナデ。	長石・スコリア・雲母小礫 橙色 普通	P9 5% PL13 北壁中央付近床面



第9图 第2号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
6	甕土師器	A[17.4] B(6.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部は「く」の字状に折れる。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。	長石・石英・雲母・礫にぶい黄橙色普通	P10 5% PL13 甕付近床面
7	甕土師器	A[20.0] B(6.1)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面ヘラナデ。	長石・石英・パミスにぶい黄橙色普通	P11 5% PL13 中央部床面
8	甕須恵器	B(4.5) C[19.0]	底部から体部にかけての破片。平底。	体部外面平行叩き、内面ナデ。	長石・針状鉱物黄灰色良好	P13 5% PL13 南壁中央付近覆土中層
9	高台付椀灰釉陶器	B(1.9) D 7.8 E 0.9	高台から底部にかけての破片。高台は低く僅かに内彎する。体部は外傾して立ち上がる。	ロクロ整形。高台部ナデ。底部に僅かに灰釉が施されている。	砂粒にぶい黄橙色良好	P12 10% PL13 北西部覆土中

図版番号	器種	計測値 (cm)					現存率 (%)	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ	孔径	重量(g)			
第9図10	管状土錘	4.1	1.7	1.7	0.6	13.2	100	覆土下層	DP1 PL20
11	管状土錘	3.4	1.6	1.7	0.5	(8.6)	95	床面	DP2 PL20
12	管状土錘	3.6	1.6	1.6	0.5	6.5	100	覆土下層	DP3 PL20
13	管状土錘	3.3	1.6	1.5	0.4	(5.7)	98	覆土中	DP4 PL20
14	管状土錘	(3.4)	1.6	1.5	0.5	(6.1)	80	覆土中	DP5 PL20

図版番号	器種	計測値 (cm)					石材	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ	孔径	重量(g)			
第9図15	磨石	9.3	9.2	4.4	—	573.4	花崗岩	覆土中層	Q2 PL20

図版番号	器種	計測値 (cm)				材質	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ	重量(g)			
第9図16	鋤先	(9.3)	10.0	1.7	(81.9)	鉄	床面	M1 PL20
17	刀子	(3.9)	(1.6)	(0.3)	(3.2)	鉄	床面	M2
18	刀子	(4.2)	(1.3)	(0.4)	(4.4)	鉄	覆土中	M3
19	不明鉄製品	19.4	0.9	0.8	(57.7)	鉄	床面	M4 PL20

第3号住居跡 (第10図)

位置 調査A区の中央部、C2b0区。

規模と平面形 長軸4.16m、短軸4.15mの隅丸方形である。

主軸方向 N-3°-W

壁 壁高は40~45cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、両竈から中央部にかけて踏み固められている。

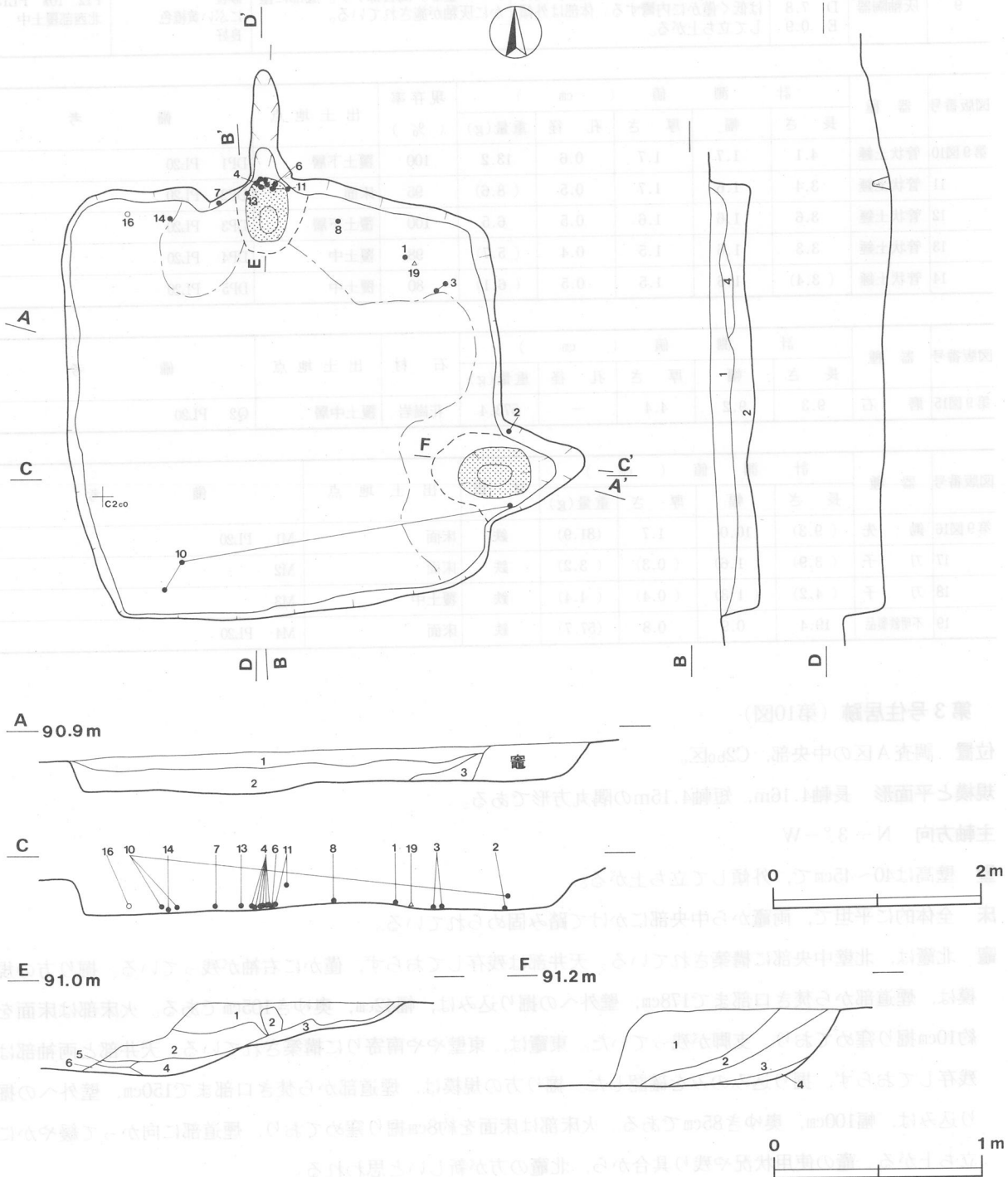
竈 北竈は、北壁中央部に構築されている。天井部は残存しておらず、僅かに右袖が残っている。掘り方の規模は、煙道部から焚き口部まで178cm、壁外への掘り込みは、幅42cm、奥ゆき105cmである。火床部は床面を約10cm掘り窪めており、支脚が残っていた。東竈は、東壁やや南寄りに構築されている。天井部と両袖部は残存しておらず、掘り込みのみを確認した。掘り方の規模は、煙道部から焚き口部まで150cm、壁外への掘り込みは、幅100cm、奥ゆき85cmである。火床部は床面を約8cm掘り窪めており、煙道部に向かって緩やかに立ち上がる。竈の使用状況や残り具合から、北竈の方が新しいと思われる。

北竈土層解説

- 1 暗褐色 砂多量, 炭化粒子中量, 焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂中量, 焼土小ブロック少量, 焼土中ブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 砂多量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 炭化粒子・砂少量, 焼土粒子微量
- 5 黒褐色 炭化粒子多量, 焼土粒子中量, 砂少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量

東竈土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・炭化粒子・砂少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂少量, 炭化物微量
- 3 暗褐色 炭化粒子・砂少量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 4 褐色 砂多量



第10図 第3号住居跡実測図

覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説

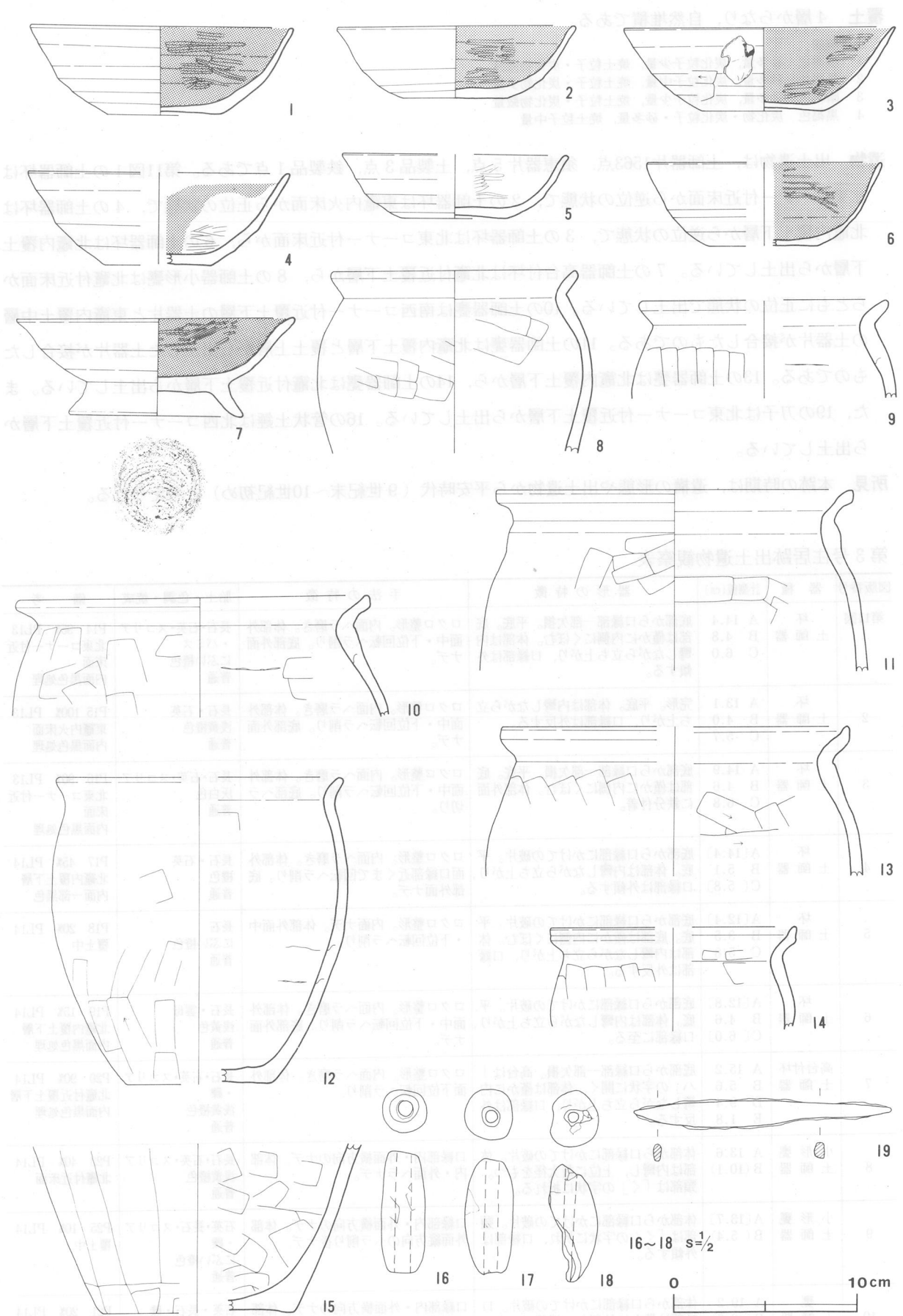
- 1 黒褐色 砂多量, 炭化粒子少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 砂多量, 炭化粒子中量, 焼土粒子・炭化物少量
- 3 暗褐色 砂多量, 炭化粒子少量, 焼土粒子・炭化物微量
- 4 黒褐色 炭化物・炭化粒子・砂多量, 焼土粒子中量

遺物 出土遺物は、土師器片1563点、須恵器片5点、土製品3点、鉄製品1点である。第11図1の土師器坏は北東コーナー付近床面から逆位の状態で、2の土師器坏は東竈内火床面から正位の状態で、4の土師器坏は北竈内覆土下層から逆位の状態で、3の土師器坏は北東コーナー付近床面から、6の土師器坏は北竈内覆土下層から出土している。7の土師器高台付坏は北竈付近覆土下層から、8の土師器小形甕は北竈付近床面からともに正位の状態で出土している。10の土師器甕は南西コーナー付近覆土下層の土器片と東竈内覆土中層の土器片が接合したものである。11の土師器甕は北竈内覆土下層と覆土上層から出土した土器片が接合したものである。13の土師器甕は北竈内覆土下層から、14の土師器甕は北竈付近覆土下層から出土している。また、19の刀子は北東コーナー付近覆土下層から出土している。16の管状土錘は北西コーナー付近覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代（9世紀末～10世紀初め）と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	坏 土師器	A 14.4 B 4.8 C 6.0	底部から口縁部一部欠損。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。体部外面中・下位回転ヘラ削り。底部外面ナデ。	長石・石英・スコリア・バミスにぶい橙色普通	P14 95% PL13 北東コーナー付近床面 内面黒色処理
2	坏 土師器	A 13.1 B 4.0 C 5.7	完形。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。体部外面中・下位回転ヘラ削り。底部外面ナデ。	長石・石英 浅黄橙色 普通	P15 100% PL13 東竈内火床面 内面黒色処理
3	坏 土師器	A 14.9 B 4.6 C 6.8	底部から口縁部一部欠損。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。体部外面に鉄分付着。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。体部外面中・下位回転ヘラ削り。底部ヘラ切り。	長石・石英・スコリア 灰白色 普通	P16 90% PL13 北東コーナー付近床面 内面黒色処理
4	坏 土師器	A〔14.4〕 B 5.1 C〔5.8〕	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。体部外面口縁部近くまで回転ヘラ削り。底部外面ナデ。	長石・石英 橙色 普通	P17 45% PL14 北竈内覆土下層 内面一部黒色
5	坏 土師器	A〔12.4〕 B 3.5 C 5.8	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロ整形。内面ナデ。体部外面中・下位回転ヘラ削り。	長石 にぶい橙色 普通	P18 20% PL14 覆土中
6	坏 土師器	A〔12.8〕 B 4.6 C〔6.0〕	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。体部外面中・下位回転ヘラ削り。底部外面ナデ。	長石・雲母 浅黄色 普通	P19 15% PL14 北竈内覆土下層 内面黒色処理
7	高台付坏 土師器	A 15.2 B 5.6 D 9.4 E 1.8	底部から口縁部一部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。体部外面下位回転ヘラ削り。	長石・石英・スコリア・礫 浅黄橙色 普通	P20 90% PL14 北竈付近覆土下層 内面黒色処理
8	小形甕 土師器	A 13.6 B(10.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に折れる。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面ヘラナデ。	長石・石英・スコリア 浅黄橙色 普通	P23 40% PL14 北竈付近床面
9	小形甕 土師器	A〔13.7〕 B〔5.4〕	体部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に折れ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向のヘラ削り後ナデ。	石英・長石・スコリア・礫 にぶい橙色 普通	P25 10% PL14 覆土中
10	甕 土師器	A 19.2 B〔6.6〕	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は僅かに外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向のヘラナデ、内面横方向のヘラナデ。	石英・長石・礫 浅黄橙色 普通	P21 20% PL14 南西コーナー付近覆土下層及び東竈内覆土中層



第11図 第3号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
11	甕 土師器	A 19.4 B (9.9)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面横方向のヘラナデ。	石英・長石・スコリア 浅黄橙色 普通	P22 15% PL14 北竈内覆土下層及び覆土上層
12	甕 土師器	A[15.8] B 16.8 C[8.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面中・下位縦方向のヘラ削り。	石英・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P24 40% PL14 覆土中
13	甕 土師器	A[18.8] B (8.2)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は僅かに外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向のヘラナデ。	長石・スコリア・雲母 浅黄色 普通	P26 10% PL14 北竈内覆土下層
14	甕 土師器	A[11.4] B (5.6)	体部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に折れ、口縁部の端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向のヘラナデ。頸部内面横方向のヘラナデ。	長石・スコリア・パミス にぶい橙色 普通	P27 5% PL14 北竈付近覆土下層
15	甕 土師器	B (9.3) C[10.4]	底部から体部にかけての破片。平底。	体部外面縦方向のヘラ削り、内面横方向のヘラナデ。	長石・スコリア・パミス 浅黄橙色 普通	P28 10% PL14 覆土中

図版番号	器種	計 測 値 (cm)					現存率 (%)	出土地点	備 考
		長さ	幅	厚さ	孔径	重量(g)			
第11図16	管状土錘	4.5	1.6	1.5	0.6	12.0	100	覆土下層	DP6 PL20
17	管状土錘	4.2	1.7	1.9	0.5	13.3	100	覆土中	DP7 PL20
18	管状土錘	(4.2)	(1.8)	2.1	0.4	(9.5)	50	覆土中	DP8 PL20

図版番号	器種	計 測 値 (cm)				材質	出土地点	備 考
		長さ	幅	厚さ	重量(g)			
第11図19	刀 子	(14.1)	(1.8)	(0.6)	(25.0)	鉄	覆土下層	M5 PL20

第4号住居跡（第12図）

位置 調査A区の中央部，C2b7区。

重複関係 本跡は，第22号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 東西軸長(3.26)m，南北軸長3.16mまで測れるが，調査区域外へ延びているため全長は確認できない。南東コーナーは隅丸である。

主軸方向 N-99°-E

壁 壁高は30～34cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で，締まりがない。

ピット 1か所(P₁)。P₁は，径73cmの円形で，深さ20cmである。性格は不明であるが，覆土中から土師器片(坏・甕)が出土している。

土層解説

1 黒色 炭化粒子多量，焼土粒子中量，砂少量

竈 東壁のやや南寄りに構築されている。ほとんど残存しておらず，火床部と袖部の補強材として使用された板状の礫のみ確認できた。火床部は床面を約2cm掘り窪めており，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子が薄く堆積している。

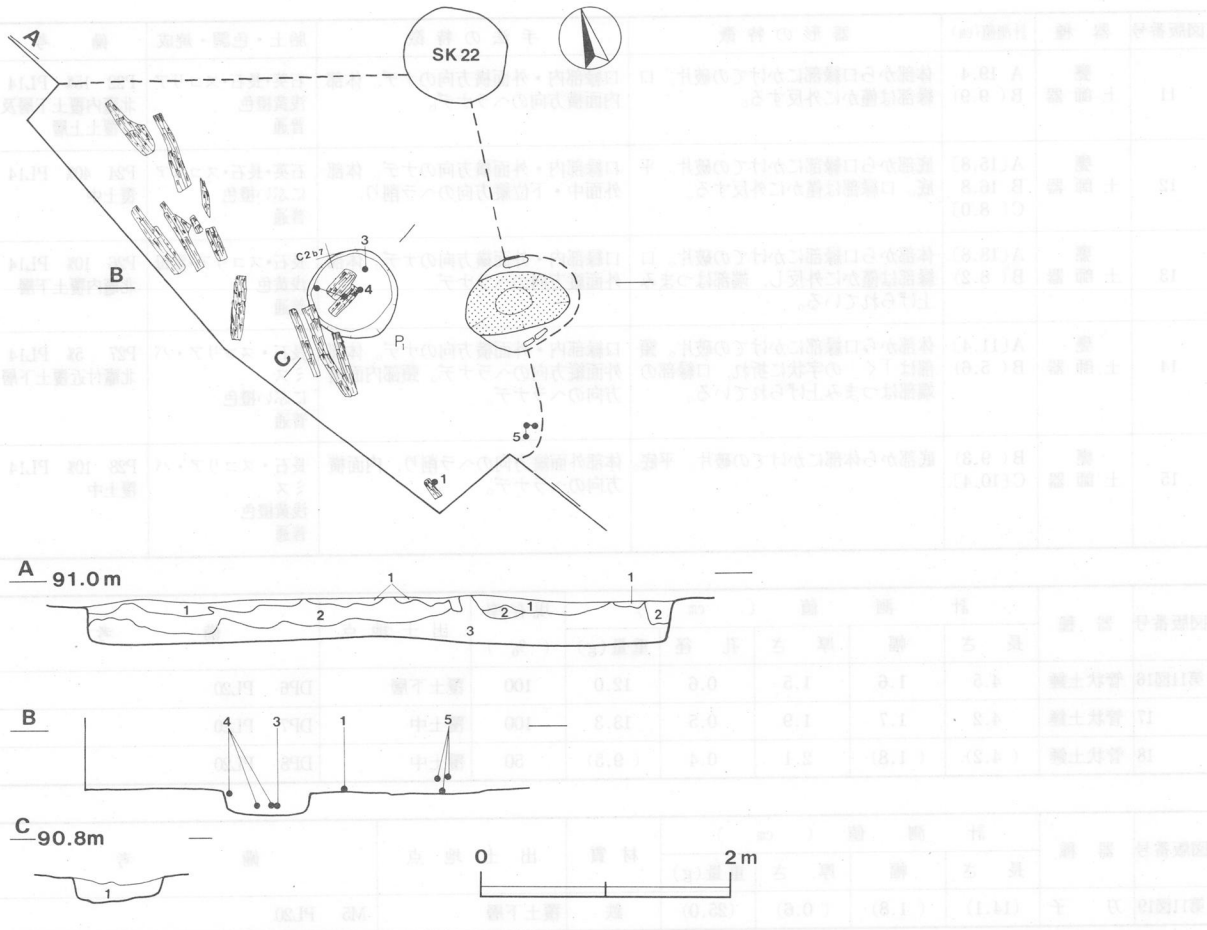
覆土 3層からなり，人為堆積である。

土層解説

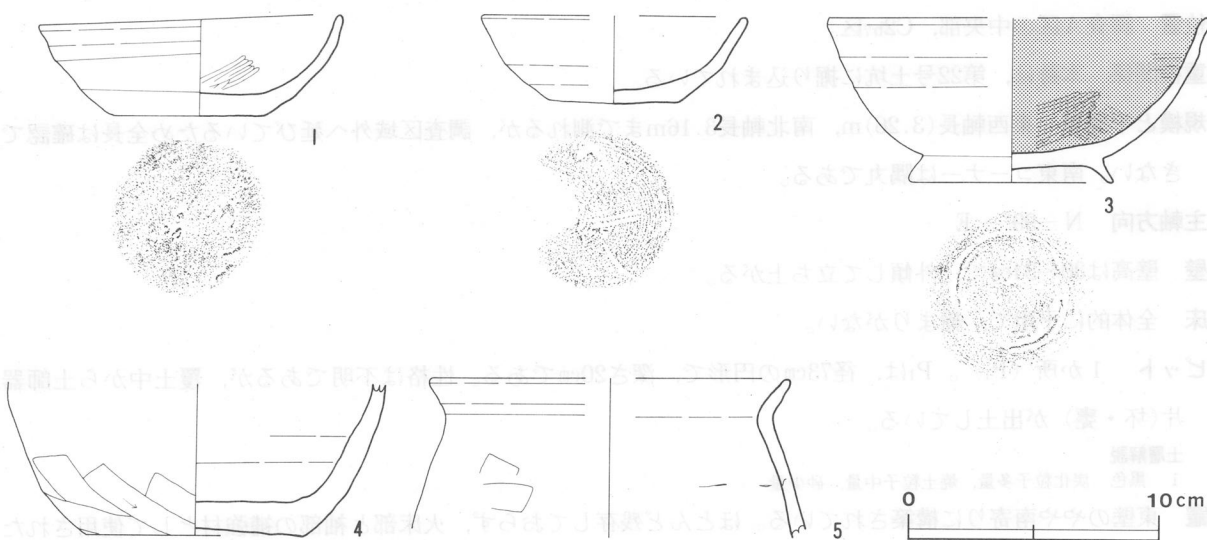
1 黒褐色 砂・黒色粒子多量

2 黒褐色 砂・黒色粒子多量，炭化粒子少量

3 暗褐色 砂・黒色粒子多量，炭化物・炭化粒子中量，焼土粒子・炭化材少量



第12図 第4号住居跡実測図



第13図 第4号住居跡出土遺物実測図

遺物 出土遺物は、土師器片57点である。第13図1の土師器杯は南東コーナー付近床面から正位の状態で、3の土師器高台付杯はピット内覆土中層から、4の土師器甕はピット内覆土中層及び覆土上層から出土した土器片が接合したものである。5の土師器甕は南東コーナー付近床面及び覆土中層から出土した土器片が接合したものである。

所見 本跡は、住居の建築材の一部と考えられる炭化材が良好な状態で残存している焼失家屋である。時期は、出土遺物から平安時代（10世紀前半）と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	坏 土師器	A 12.1 B 4.1 C 6.0	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。体部はゆるやかに内彎し、口縁部に至る。	外面中・下位回転ヘラ削り。内面ヘラナデ。	長石・石英・スコリアにぶい橙色 普通	P29 65% PL14 南東コーナー付近 床面
2	坏 土師器	A[10.8] B 3.5 C 5.4	底部から口縁部にかけての破片。平底。口縁部は外傾する。	外面中・下位回転ヘラ削り。底部回転系切り。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P30 50% PL14 覆土中
3	高台付坏 土師器	A[15.4] B 6.2 D 8.1 E 0.9	底部から口縁部にかけての破片。高台は「ハ」の字状に開く。切り離した後高台貼り付け。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	内面ヘラ磨き。体部外面横方向のナデ。	長石・石英・スコリア 浅黄橙色 普通	P31 45% PL14 ピット内覆土中層 内面黒色処理
4	甕 土師器	B(6.1) C 8.6	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。	体部下位ヘラ削り、内面ヘラナデ。	長石・スコリア・パミス 橙色 普通	P32 25% PL14 ピット内覆土中層 及び覆土上層
5	甕 土師器	A[14.4] B(6.4)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面ヘラナデ。	石英・スコリア・パミス 橙色 普通	P33 5% PL14 南東コーナー付近 床面及び覆土中層

第5号住居跡（第14図）

位置 調査A区の中央部，C2a9区。

規模と平面形 長軸3.84m，短軸3.40mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-99°-E

壁 壁高は16～30cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で，締まりがない。遺構の南側半分が大きく攪乱を受けている。

竈 東壁中央部に構築されている。天井部と両袖部は残存しておらず，掘り込みのみを確認した。掘り方の規模は，煙道部から焚き口部まで115cm，壁外への掘り込みは，奥ゆき80cmである。火床部は床面を約4cm掘り窪めており，僅かではあるが焼けて赤変している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・砂中量，焼土粒子・炭化物少量
- 2 暗褐色 砂中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土大ブロック・炭化粒子・砂中量，焼土小ブロック少量

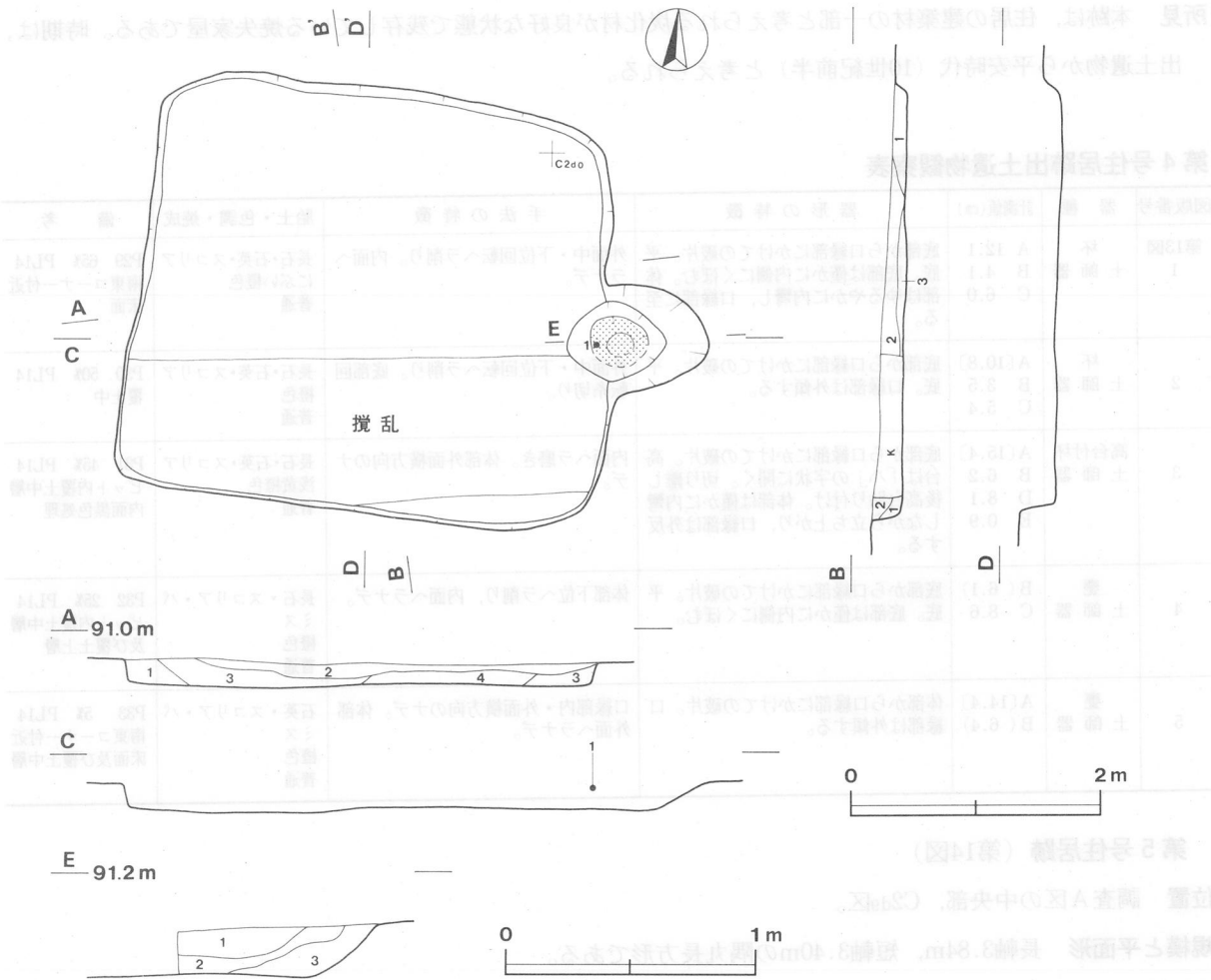
覆土 4層からなり，人為堆積である。

土層解説

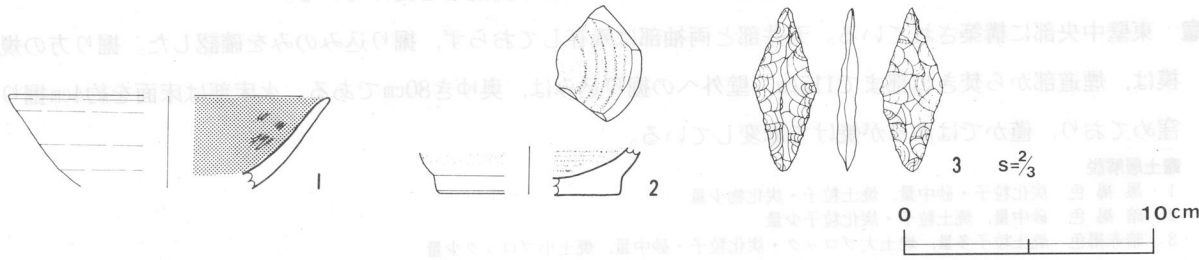
- 1 暗褐色 炭化粒子・砂微量，焼土粒子極微量
- 2 黒褐色 砂少量，炭化粒子微量，焼土粒子極微量
- 3 灰黄褐色 炭化粒子・砂微量
- 4 黒褐色 炭化粒子少量，砂微量，焼土粒子極微量

遺物 出土遺物は，土師器片280点，須恵器片3点，陶器片1点，石鏃1点である。第15図1の土師器坏は竈内覆土上層から出土している。また，2の陶器壺は覆土中から，3の石鏃は北西部から出土しているが，混入したものと思われる。

所見 本跡の時期は，遺構の形態や出土遺物から平安時代（9世紀後半）と考えられる。



第14図 第5号住居跡実測図



第15図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 1	坏 土師器	A〔12.8〕 B〔3.7〕	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎し、口縁部は外反する。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。	長石・石英・スコリア 浅黄橙色 普通	P34 5% PL15 竈内覆土上層 内面黒色処理
2	壺 陶器	B〔1.9〕 C〔7.5〕	底部から体部にかけての破片。平底。	底部ヘラ削り後ナデ。釉。	長石・砂粒・雲母 灰白色 良好	P35 5% PL15 覆土中

図版番号	器種	計測値 (cm)					石材	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ	孔径	重量(g)			
第15図3	石 鎌	3.3	1.3	0.4	—	1.2	メノウ	覆土中	Q3 PL20

第6号住居跡 (第16図)

位置 調査A区の中央部, C3d4区。

規模と平面形 長軸3.33m, 短軸3.00mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-5°-W

壁 壁高は29~33cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦である。

竈 北壁中央部に構築されている。天井部と右袖部は残存しておらず, 左袖部が僅かに残っている。掘り方の規模は, 煙道部から焚き口部まで135cm, 壁外への掘り込みは, 幅75cm, 奥ゆき80cmである。火床部は床面を約7cm掘り窪めており, 僅かではあるが焼土ブロックや焼土粒子がみられる。

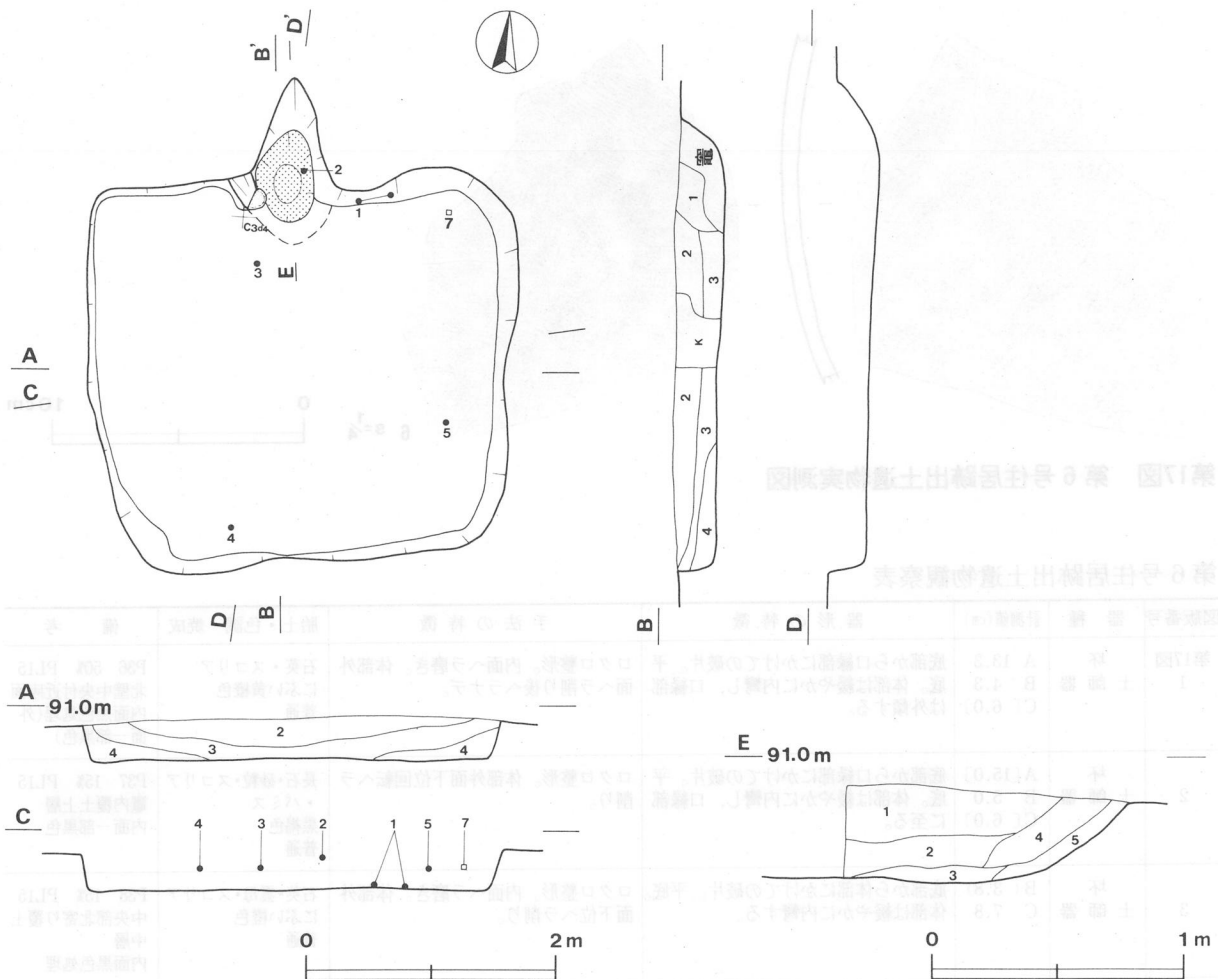
竈土層解説

- 1 暗褐色 砂中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 砂中量, 焼土粒子・炭化粒子微量, 焼土小ブロック極微量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・砂少量, 炭化物微量
- 4 暗褐色 砂中量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 5 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・砂少量, 焼土粒子微量

覆土 4層からなり, 自然堆積である。

土層解説

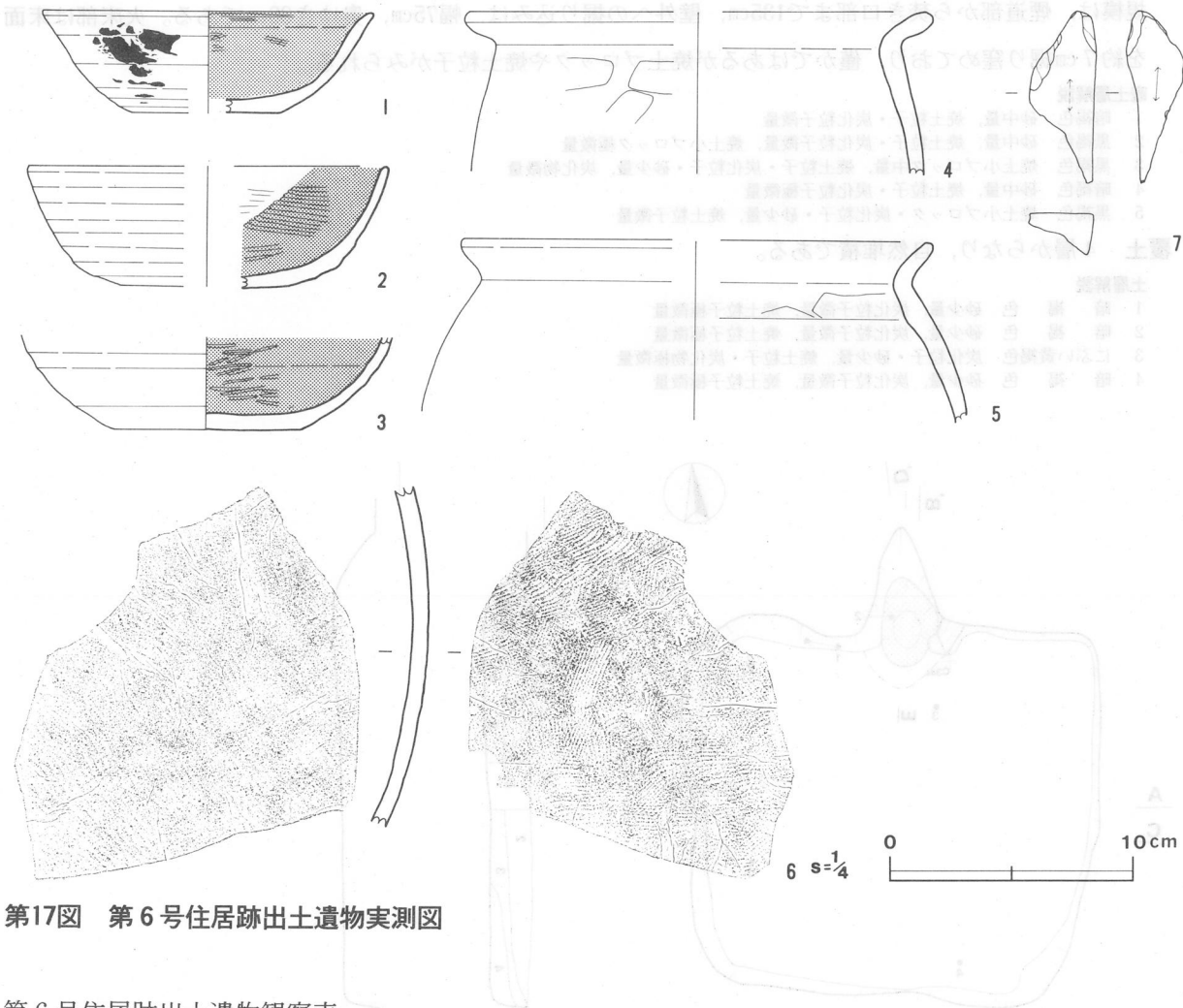
- 1 暗褐色 砂少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 砂少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量
- 3 にぶい黄褐色 炭化粒子・砂少量, 焼土粒子・炭化物極微量
- 4 暗褐色 砂少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量



第16図 第6号住居跡実測図

遺物 出土遺物は、土師器片145点、須恵器片1点、石製品1点である。第17図1の土師器坏は北壁中央付近床面から逆位の状態で、2の土師器坏は竈内覆土上層から、3の土師器坏は中央部北寄り覆土中層から出土している。また、4の土師器甕は南西コーナー付近覆土中層から、5の土師器甕は東壁中央付近覆土中層から、6の須恵器甕は北西コーナー付近覆土下層から出土している。7の砥石は北東コーナー付近覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代（9世紀後半）と考えられる。



第17図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	坏 土師器	A 13.3 B 4.3 C〔6.0〕	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は緩やかに内彎し、口縁部は外傾する。	ロクロ整形。内面へラ磨き。体部外面へラ削り後へラナデ。	石英・スコリアにぶい黄橙色 普通	P36 50% PL15 北壁中央付近床面 内面黒色処理(外面一部黒色)
2	坏 土師器	A〔15.0〕 B 5.0 C〔6.0〕	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は緩やかに内彎し、口縁部に至る。	ロクロ整形。体部外面下位回転へラ削り。	長石・砂粒・スコリア・パミス 黒褐色 普通	P37 15% PL15 竈内覆土上層 内面一部黒色
3	坏 土師器	B〔3.8〕 C 7.8	底部から体部にかけての破片。平底。体部は緩やかに内彎する。	ロクロ整形。内面へラ磨き。体部外面下位へラ削り。	石英・雲母・スコリアにぶい橙色 普通	P38 15% PL15 中央部北寄り覆土中層 内面黒色処理
4	甕 土師器	A〔19.5〕 B〔7.3〕	体部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に折れ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面へラナデ。	長石・石英・スコリアにぶい橙色 普通	P39 5% PL15 南西コーナー付近覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	甕 土師器	A〔19.6〕 B〔7.5〕	体部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に折れ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ヘラナデ。	長石・スコリア・礫 橙色 普通	P40 5% PL15 東壁中央付近覆土 中層

6は、北西コーナー付近覆土下層から出土した須恵器甕の体部片の拓影図である。体部外面は平行叩き、内面には当て具痕がある。

図版番号	器種	計測値 (cm)					石材	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ	孔径	重量(g)			
第17図7	砥石	(7.1)	(2.8)	(2.4)	—	(28.7)	凝灰岩	覆土中層	Q4 PL20

第7号住居跡 (第18図)

位置 調査A区の南東部, C3f6区。

規模と平面形 長軸3.76m, 短軸3.05mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-12°-W

壁 壁高は28~34cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、締まりがない。

竈 北壁中央部に構築されている。天井部は残存しておらず、僅かに両袖が残っている。掘り方の規模は、煙道部から焚き口部まで143cm, 壁外への掘り込みは、幅81cm, 奥ゆき86cmである。火床部は床面を若干掘り窪めており、僅かではあるが焼土粒子・炭化粒子が見られる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 砂少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量
- 2 黒褐色 砂少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量
- 3 黒褐色 砂少量, 焼土粒子・炭化粒子微量, 焼土小ブロック・炭化物極微量
- 4 黒褐色 砂・焼土粒子・炭化粒子少量, 焼土小ブロック微量, 炭化物極微量
- 5 にぶい黄褐色 砂多量, 炭化粒子極微量

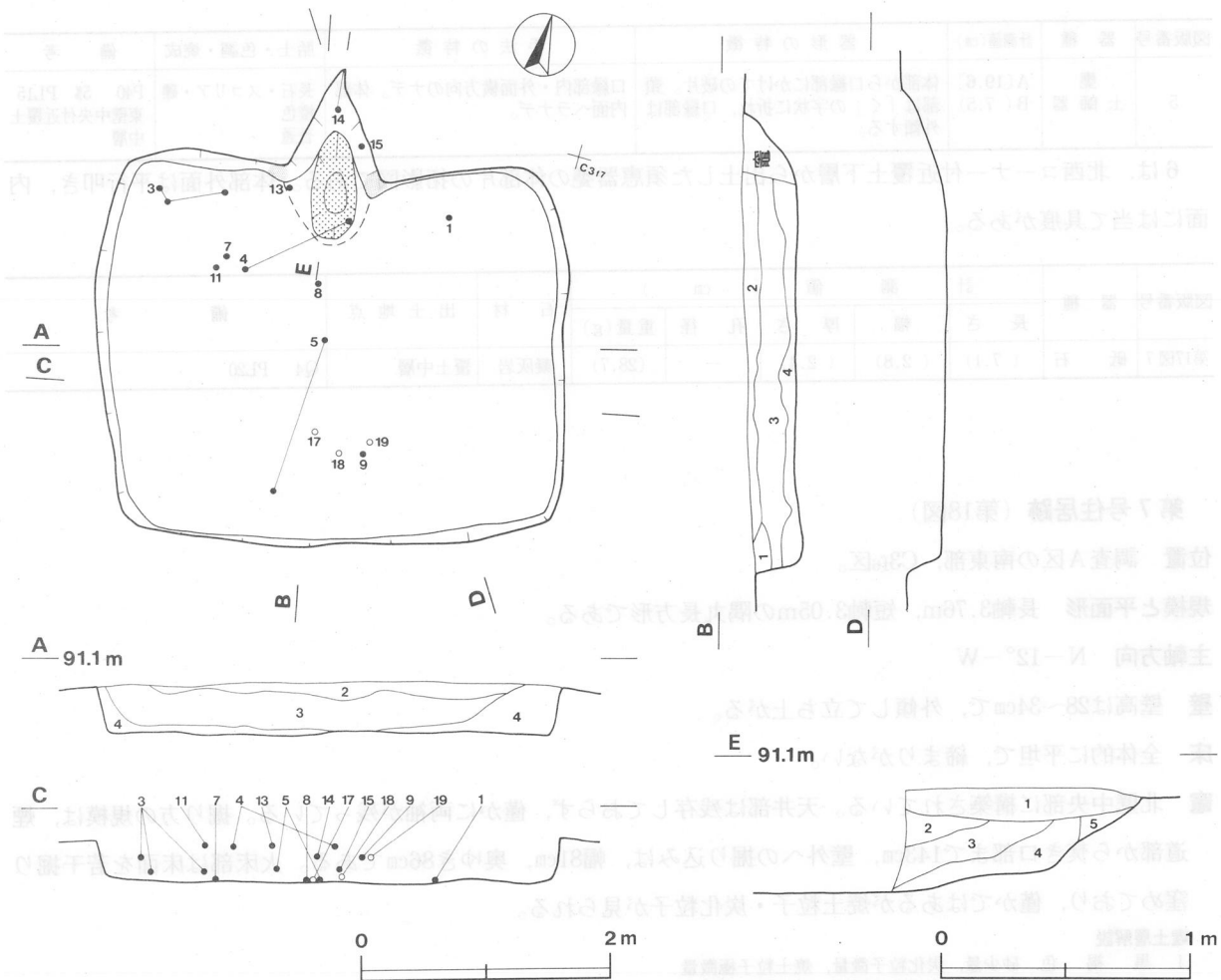
覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 にぶい黄褐色 砂多量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 黒褐色 砂多量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量
- 3 黒褐色 砂多量, 炭化粒子少量, 焼土粒子極微量
- 4 にぶい黄褐色 砂多量, 炭化粒子微量, 焼土粒子・粘土粒子極微量

遺物 出土遺物は、土師器片464点, 須恵器片3点, 土製品3点である。第19図1の土師器坏は北東コーナー付近床面から逆位の状態で、3の土師器坏は北西コーナー付近覆土下層及び覆土中層から出土している。4の土師器坏は中央部北寄り及び竈内覆土上層から、5の土師器坏は中央部床面及び南壁中央付近覆土中層から出土したものが、それぞれ接合したものである。また、7・8土師器甕は北西コーナー付近と中央部のそれぞれ床面から、9の土師器甕は南壁中央付近覆土中層から、11の土師器甕は北西コーナー付近覆土上層から、13の土師器甕は竈内覆土上層から出土している。14の須恵器坏は竈内覆土中層から、15の須恵器坏は竈内覆土中層から出土している。第20図17・18の管状土錘は中央部南寄り床面から、19の管状土錘は中央部南寄り覆土中層から出土している。

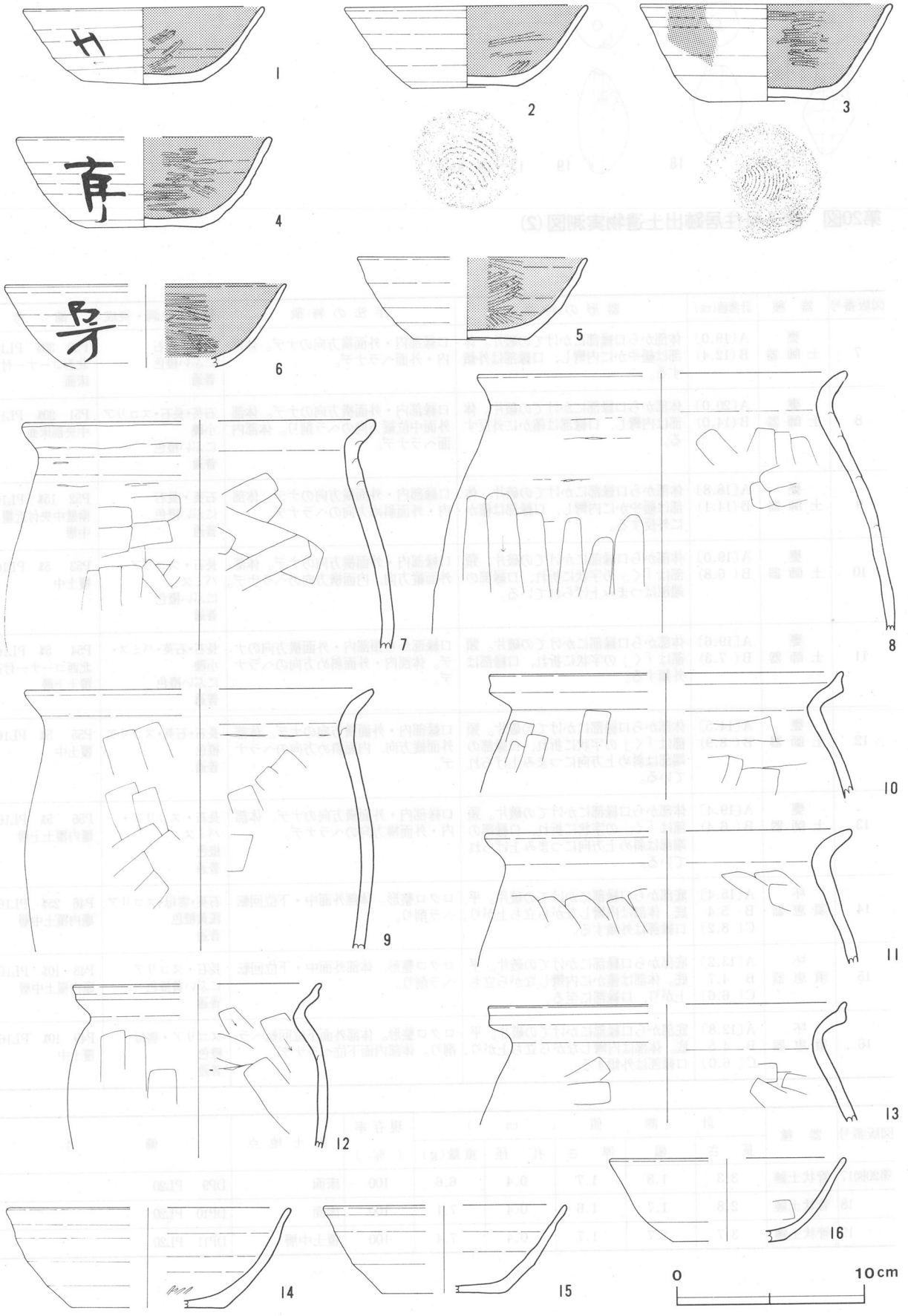
所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代(9世紀後半)と考えられる。



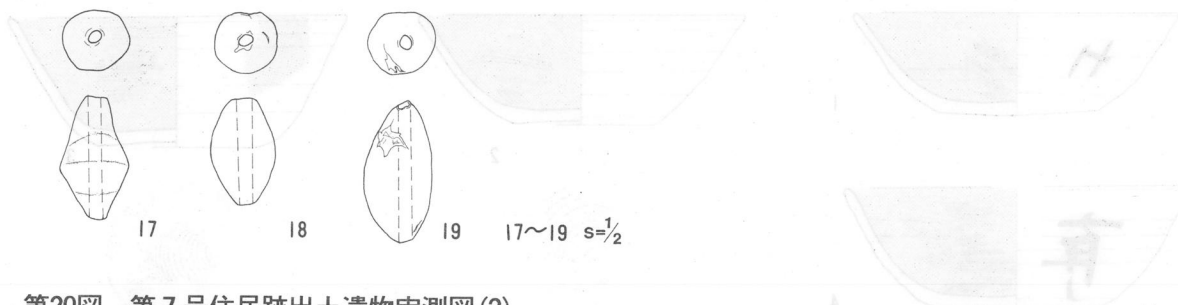
第18図 第7号住居跡実測図

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	坏 土師器	A 13.0 B 4.1 C 6.5	底部から口縁部一部欠損。僅かに丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。底部内面剥離。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。体部外面中・下位回転ヘラ削り。	長石・パミス 橙色 普通	P41 90% PL15 北東コーナー付近 床面 内面黒色処理 墨書土器
2	坏 土師器	A 13.2 B 4.9 C 5.7	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。体部外面ヘラナデ。底部回転糸切り後回転ヘラ削り調整。	砂粒・パミス・雲母 にぶい黄褐色 普通	P42 80% PL15 覆土中 内面黒色処理
3	坏 土師器	A 13.7 B 5.3 C 6.3	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。体部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。比較的器高が高い。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。体部外面下位回転ヘラ削り後ヘラナデ。底部回転糸切り後回転ヘラ削り調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	P43 55% PL15 北西コーナー付近 覆土下層及び中層 内面黒色処理 (外面一部黒色)
4	坏 土師器	A[13.8] B 4.9 C 6.3	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ整形。内面丁寧なヘラ磨き。体部外面下位回転ヘラ削り、中位ヘラナデ。	スコリア・雲母 にぶい黄褐色 普通	P44 50% PL15 中央部北寄り及び 竈内覆土上層 内面黒色処理 墨書土器
5	坏 土師器	A[12.4] B 4.5 C 6.1	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。体部は内彎しながら立ち上がる。	ロクロ整形。内面丁寧なヘラ磨き。体部外面中・下位回転ヘラ削り。底部切り離し後回転ヘラ削り調整。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P45 40% PL15 中央部床面及び南 壁中央付近覆土中 層、内面黒色処理
6	坏 土師器	A[15.2] B(4.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ整形。内面丁寧なヘラ磨き。体部外面下位回転ヘラ削り。	長石・スコリア・雲母 にぶい黄褐色 普通	P47 20% PL15 覆土中 内面黒色処理 墨書土器



第19図 第7号住居跡出土遺物実測図(1)



第20図 第7号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
7	甕 土師器	A〔19.0〕 B〔12.4〕	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面ヘラナデ。	石英・長石にぶい 橙色 普通	P50 30% PL16 北西コーナー付近 床面
8	甕 土師器	A〔20.0〕 B〔14.0〕	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面中位縦方向のヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	石英・長石・スコリア 小礫 にぶい 橙色 普通	P51 20% PL16 中央部床面
9	甕 土師器	A〔18.8〕 B〔14.1〕	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎し、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面斜め方向のヘラナデ。	石英・長石にぶい 橙色 普通	P52 15% PL16 南壁中央付近覆土 中層
10	甕 土師器	A〔19.0〕 B〔6.8〕	体部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に折れ、口縁部の端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向、内面横方向のヘラナデ。	長石・スコリア・ パミス にぶい 橙色 普通	P53 5% PL16 覆土中
11	甕 土師器	A〔19.6〕 B〔7.3〕	体部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に折れ、口縁部は外傾する。	口縁部から頸部内・外面横方向のナデ。体部内・外面斜め方向のヘラナデ。	長石・石英・パミス・ 小礫 にぶい 橙色 普通	P54 5% PL16 北西コーナー付近 覆土上層
12	甕 土師器	A〔14.5〕 B〔8.9〕	体部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に折れ、口縁部の端部は斜め上方向につまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向、内面斜め方向のヘラナデ。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P55 5% PL16 覆土中
13	甕 土師器	A〔19.4〕 B〔6.4〕	体部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に折れ、口縁部の端部は斜め上方向につまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面横方向のヘラナデ。	長石・スコリア・ パミス 橙色 普通	P56 5% PL16 竈内覆土上層
14	坏 須恵器	A〔15.4〕 B 5.4 C〔8.2〕	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	ロクロ整形。体部外面中・下位回転ヘラ削り。	石英・雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	P46 25% PL16 竈内覆土中層
15	坏 須恵器	A〔13.2〕 B 4.7 C〔6.6〕	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ整形。体部外面中・下位回転ヘラ削り。	長石・スコリア にぶい 黄橙色 普通	P48 10% PL16 竈内覆土中層
16	坏 須恵器	A〔12.8〕 B 4.5 C〔6.0〕	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	ロクロ整形。体部外面下位回転ヘラ削り。体部内面下位ヘラナデ。	スコリア・雲母 橙色 普通	P49 10% PL16 覆土中

図版番号	器種	計 測 値 (cm)					現 存 率 (%)	出 土 地 点	備 考
		長 さ	幅	厚 さ	孔 径	重 量(g)			
第20図17	管状土錘	3.3	1.8	1.7	0.4	6.6	100	床面	DP9 PL20
18	管状土錘	2.8	1.7	1.6	0.4	7.1	100	床面	DP10 PL20
19	管状土錘	3.7	1.7	1.7	0.4	7.4	100	覆土中層	DP11 PL20

(1) 図版実測遺物出土順図巻号7葉 図91葉

第8号住居跡（第21図）

位置 調査A区の南東部，C3h5区。

重複関係 本跡は，第9号住居跡との重複があるが不明である。

規模と平面形 長軸4.27m，短軸3.48mの隅丸長方形である。

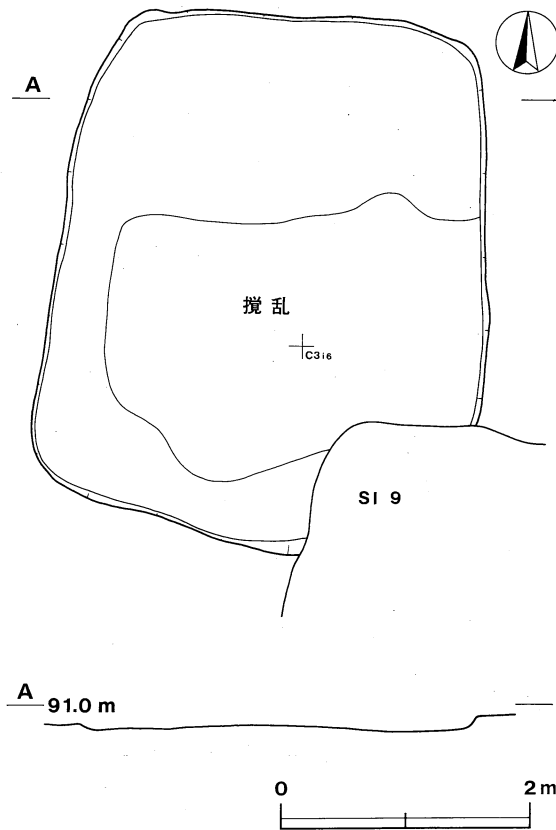
主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は6～10cmで，外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で，締まりがない。遺構の中央部が大きく攪乱を受けている。

遺物 出土遺物は，土師器片20点である。

所見 本跡は，遺構の中央部が大きく攪乱を受けているうえに，出土遺物も細片のため時期は不明である。



第21図 第8号住居跡実測図

第9号住居跡（第22図）

位置 調査A区の南東部，C3i6区。

重複関係 本跡は，第8号住居跡との重複があるが，新旧関係は不明である。

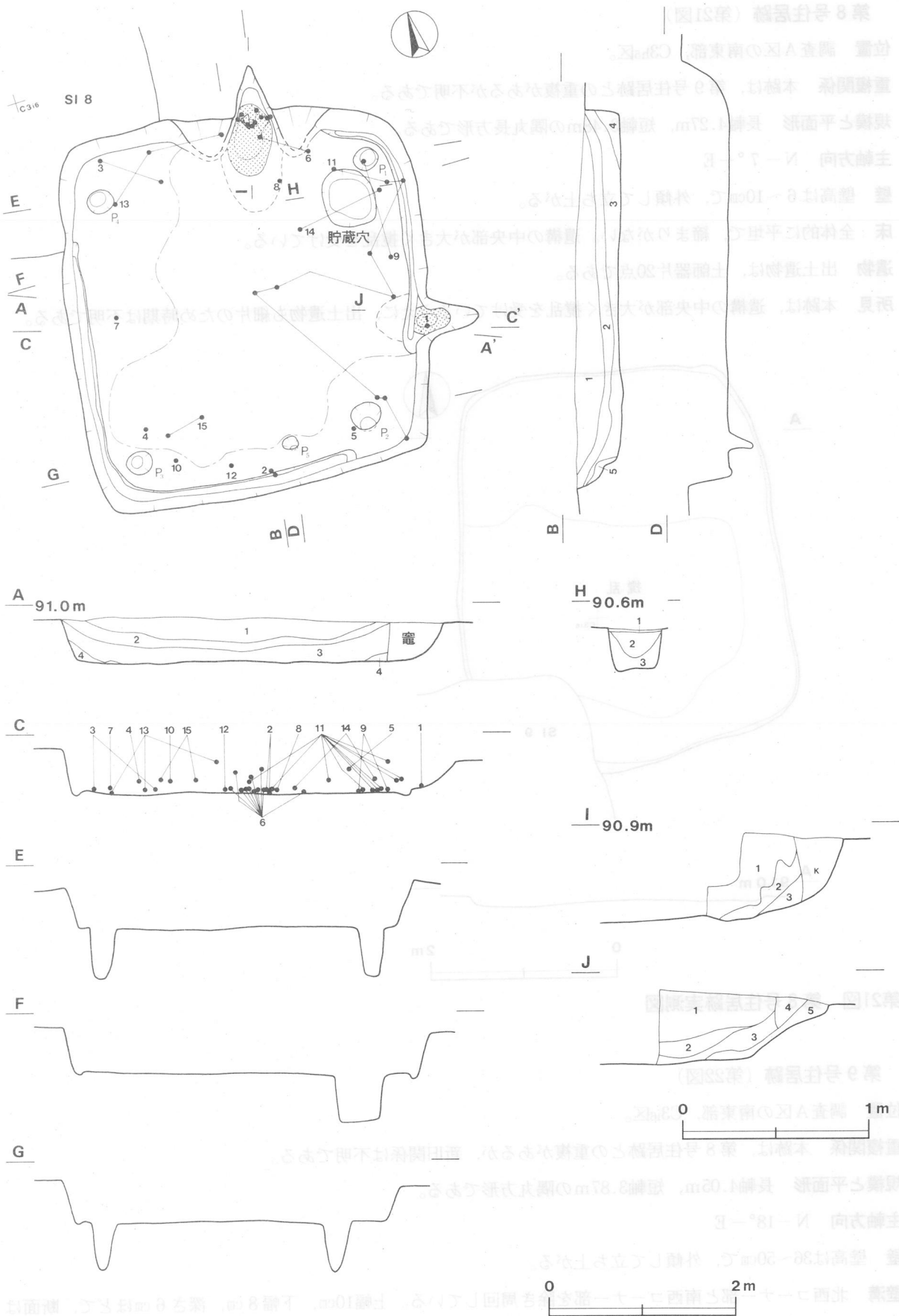
規模と平面形 長軸4.05m，短軸3.87mの隅丸方形である。

主軸方向 N-18°-E

壁 壁高は36～50cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 北西コーナー部と南西コーナー部を除き周回している。上幅10cm，下幅8cm，深さ6cmほどで，断面は「U」字形である。

床 全体的に平坦で，両竈から中央部にかけて踏み固められている。



第22図 第9号住居跡実測図

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁は、径28cmの円形で深さ54cm。P₂は、径33cmの円形で深さ54cm。P₃は、径28cmの円形で深さ52cm。P₄は、長径29cm、短径24cmの楕円形で深さ54cm。P₁~P₄は各コーナー付近に付設され、規模や位置から支柱穴と考えられる。P₅は、長径17cm、短径13cmの楕円形で深さ27cmの出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北竈は、北壁中央部に構築されている。天井部は残存しておらず、僅かに両袖が残っている。煙道部の先が攪乱を受けているため確認できる掘り方の規模は、煙道部から焚き口部まで132cm、壁外への掘り込みは、幅41cm、奥ゆき29cmである。火床部は床面を約6cm掘り窪めており、石製支脚が残っていた。また、火床面はブロック状に赤変硬化している。東竈は、東壁やや南寄りに構築されている。天井部と両袖部は残存しておらず、掘り込みのみを確認した。掘り方の規模は、煙道部から焚き口部まで111cm、壁外への掘り込みは、幅49cm、奥ゆき53cmである。火床部は床面を僅かに掘り窪めており、煙道部に向かって緩やかに立ち上がる。竈の残り具合から、北竈の方が新しいと思われる。

北竈土層解説

- 1 黒褐色 砂中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子多量、炭化粒子・砂少量、焼土中ブロック・焼土小ブロック微量
- 3 黒褐色 砂多量、焼土粒子少量

東竈土層解説

- 1 黒色 炭化粒子・砂少量、焼土粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 炭化粒子・砂少量、焼土粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・砂少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、砂微量
- 5 黒褐色 砂中量、焼土粒子・炭化粒子微量

貯蔵穴 北東コーナーに付設されている。長径65cm、短径55cmの楕円形で、深さ49cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂少量
- 2 褐色 砂少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 焼土粒子・砂中量、炭化粒子少量、炭化物微量

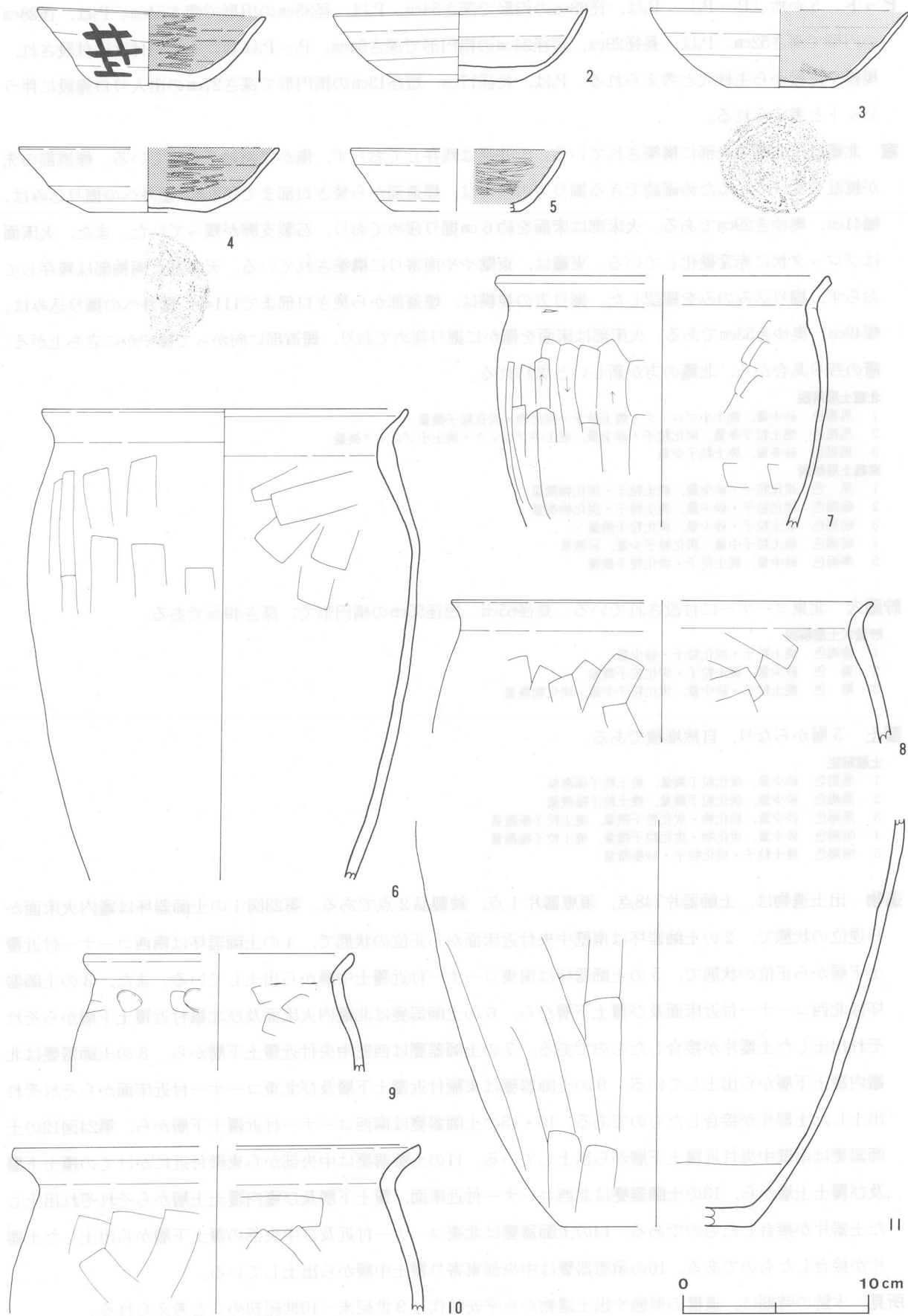
覆土 5層からなり、自然堆積である。

土層解説

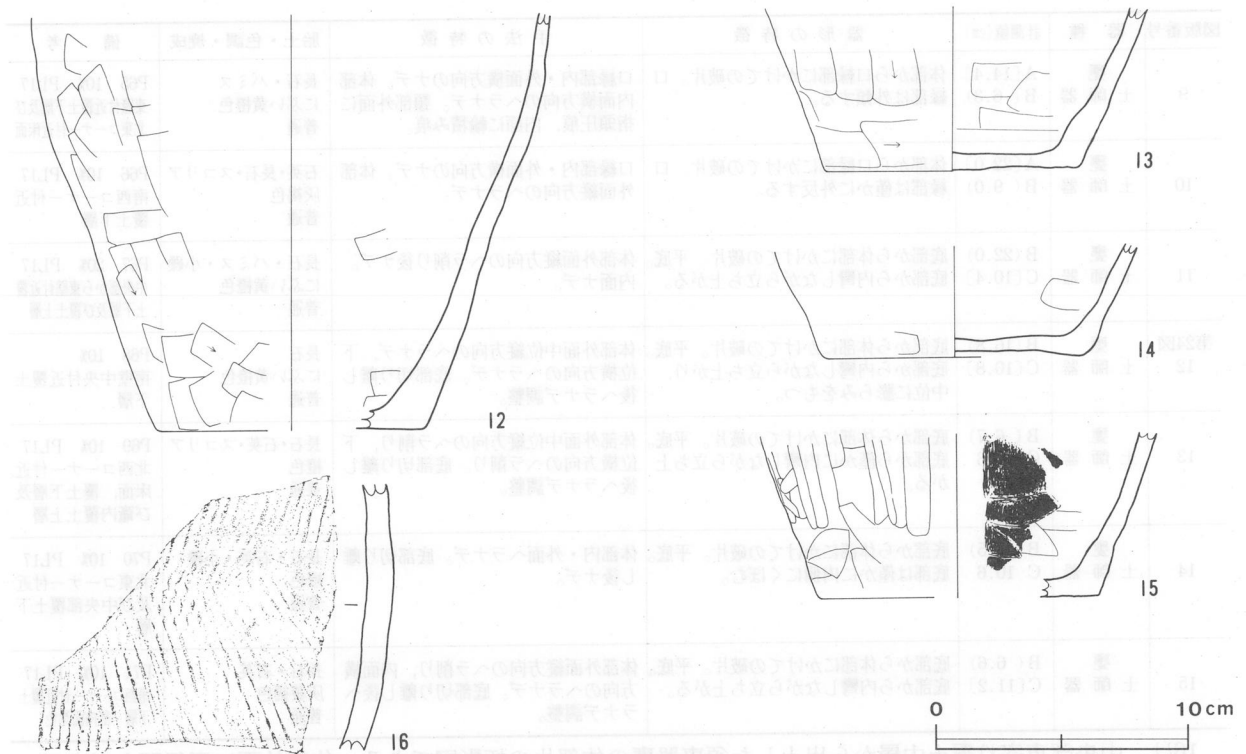
- 1 黒褐色 砂少量、炭化粒子微量、焼土粒子極微量
- 2 黒褐色 砂少量、炭化粒子微量、焼土粒子極微量
- 3 黒褐色 砂少量、炭化物・炭化粒子微量、焼土粒子極微量
- 4 暗褐色 砂少量、炭化物・炭化粒子微量、焼土粒子極微量
- 5 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂極微量

遺物 出土遺物は、土師器片748点、須恵器片1点、鉄製品2点である。第23図1の土師器坏は竈内火床面から逆位の状態で、2の土師器坏は南壁中央付近床面から正位の状態で、4の土師器坏は南西コーナー付近覆土下層から正位の状態で、5の土師器坏は南東コーナー付近覆土中層から出土している。また、3の土師器坏は北西コーナー付近床面及び覆土下層から、6の土師器甕は北竈内火床面及び北竈付近覆土下層からそれぞれ出土した土器片が接合したものである。7の土師器甕は西壁中央付近覆土下層から、8の土師器甕は北竈内覆土下層から出土している。9の土師器甕は東竈付近覆土下層及び北東コーナー付近床面からそれぞれ出土した土器片が接合したものである。10・15の土師器甕は南西コーナー付近覆土下層から、第24図12の土師器甕は南壁中央付近覆土下層から出土している。11の土師器甕は中央部から東壁付近にかけての覆土下層及び覆土上層から、13の土師器甕は北西コーナー付近床面、覆土下層及び竈内覆土上層からそれぞれ出土した土器片が接合したものである。14の土師器甕は北東コーナー付近及び中央部の覆土下層から出土した土器片が接合したものである。16の須恵器甕は中央部東寄り覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代(9世紀末~10世紀初め)と考えられる。



第23図 第9号住居跡出土遺物実測図(1)



第24図 第9号住居跡出土遺物実測図(2)

第9号住居跡出土遺物観察表

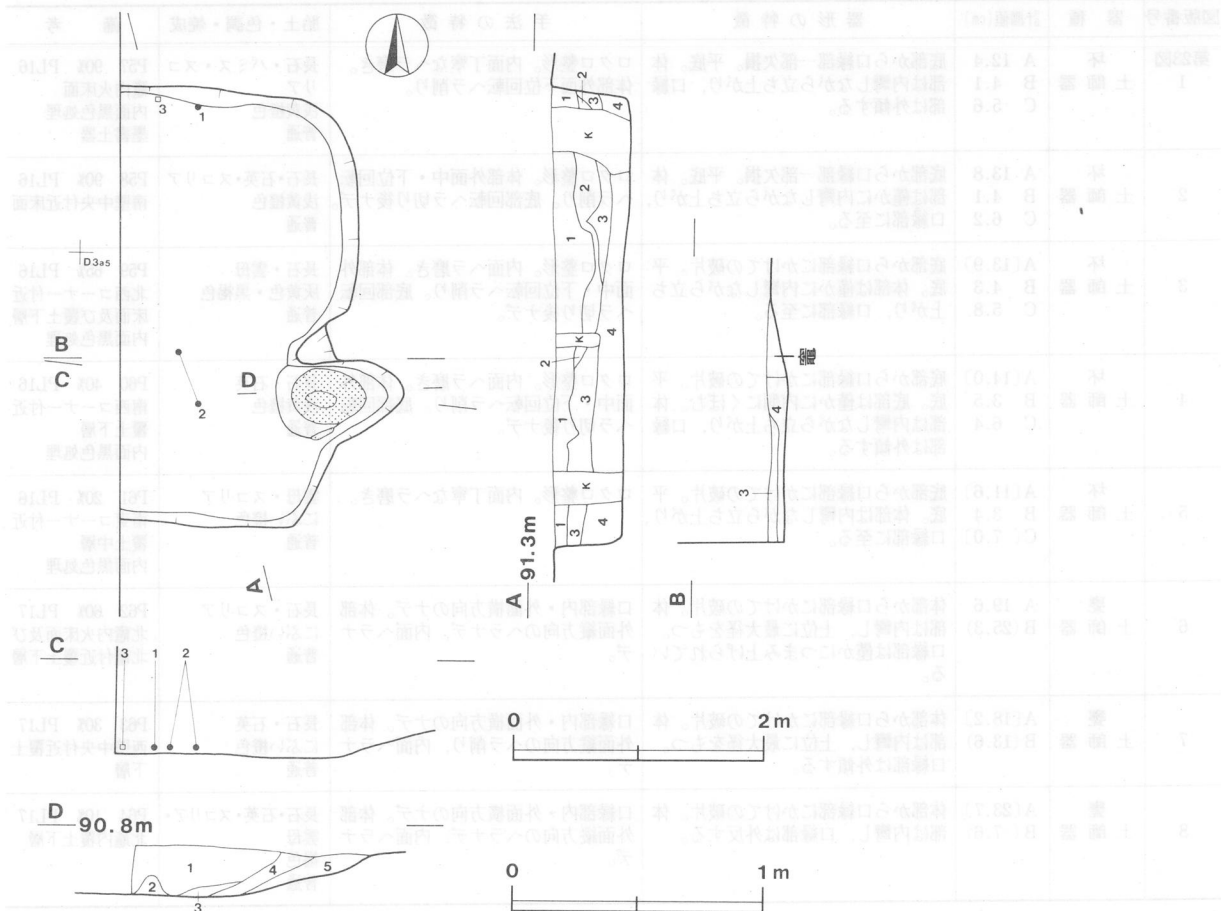
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	坏 土師器	A 12.4 B 4.1 C 5.6	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	ロクロ整形。内面丁寧なヘラ磨き。体部外面下位回転ヘラ削り。	長石・パミス・スコリア 浅黄橙色 普通	P57 90% PL16 甕内火床面 内面黒色処理 墨書土器
2	坏 土師器	A 13.8 B 4.1 C 6.2	底部から口縁部一部欠損。平底。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ整形。体部外面中・下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後ナデ。	長石・石英・スコリア 浅黄橙色 普通	P58 90% PL16 南壁中央付近床面
3	坏 土師器	A[13.9] B 4.3 C 5.8	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。体部外面中・下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後ナデ。	長石・雲母 灰黄色・黒褐色 普通	P59 65% PL16 北西コーナー付近 床面及び覆土下層 内面黒色処理
4	坏 土師器	A[14.0] B 3.5 C 6.4	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	ロクロ整形。内面ヘラ磨き。体部外面中・下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後ナデ。	長石・石英 浅黄橙色 普通	P60 40% PL16 南西コーナー付近 覆土下層 内面黒色処理
5	坏 土師器	A[11.6] B 3.4 C[7.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ整形。内面丁寧なヘラ磨き。	雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P61 20% PL16 南東コーナー付近 覆土中層 内面黒色処理
6	甕 土師器	A 19.6 B (25.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、上位に最大径をもつ。口縁部は僅かにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向のヘラナデ、内面ヘラナデ。	長石・スコリア にぶい橙色 普通	P62 60% PL17 北甕内火床面及び 北甕付近覆土下層
7	甕 土師器	A[18.2] B(13.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、上位に最大径をもつ。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向のヘラ削り、内面ヘラナデ。	長石・石英 にぶい橙色 普通	P63 30% PL17 西壁中央付近覆土 下層
8	甕 土師器	A[23.7] B(7.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向のヘラナデ、内面ヘラナデ。	長石・石英・スコリア・ 雲母 褐色 普通	P64 10% PL17 北甕内覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
9	甕 土師器	A[14.4] B(6.3)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面横方向のヘラナデ。頸部外面に指頭圧痕、内面に輪積み痕。	長石・パミスにぶい黄橙色普通	P65 10% PL17 東壁付近覆土下層及び北東コーナー付近床面
10	甕 土師器	A[22.0] B(9.0)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向のヘラナデ。	石英・長石・スコリア 灰褐色普通	P66 10% PL17 南西コーナー付近覆土下層
11	甕 土師器	B(22.0) C[10.4]	底部から体部にかけての破片。平底。底部から内彎しながら立ち上がる。	体部外面縦方向のヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	長石・パミス・小礫にぶい黄橙色普通	P67 20% PL17 中央部から東壁付近覆土下層及び覆土上層
第24図 12	甕 土師器	B(16.8) C[10.8]	底部から体部にかけての破片。平底。底部から内彎しながら立ち上がり、中位に膨らみをもつ。	体部外面中位縦方向のヘラナデ、下位横方向のヘラナデ。底部切り離し後ヘラナデ調整。	長石にぶい黄橙色普通	P68 10% 南壁中央付近覆土下層
13	甕 土師器	B(6.7) C 10.3	底部から体部にかけての破片。平底。底部から僅かに内彎しながら立ち上がる。	体部外面中位縦方向のヘラ削り、下位横方向のヘラ削り。底部切り離し後ヘラナデ調整。	長石・石英・スコリア 橙色普通	P69 10% PL17 北西コーナー付近床面、覆土下層及び竈内覆土上層
14	甕 土師器	B(4.5) C 10.6	底部から体部にかけての破片。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。	体部内・外面ヘラナデ。底部切り離し後ナデ。	長石・石英・小礫 橙色普通	P70 10% PL17 北東コーナー付近及び中央部覆土下層
15	甕 土師器	B(6.6) C[11.2]	底部から体部にかけての破片。平底。底部から内彎しながら立ち上がる。	体部外面縦方向のヘラ削り、内面横方向のヘラナデ。底部切り離し後ヘラナデ調整。	長石・石英 灰黄褐色普通	P71 10% PL17 南西コーナー付近覆土下層一部内面黒色

16は、中央部東寄り覆土中層から出土した須恵器甕の体部片の拓影図である。体部外面に平行叩きがある。

第10号住居跡 (第25図)

位置 調査A区の南東部、D3a5区。



第25図 第10号住居跡実測図

規模と平面形 南北軸長3.50m、東西軸長(1.90)mまで測れるが、調査区域外へ延びているため全長は確認できない。北東コーナーは隅丸である。

主軸方向 N-93°-E

壁 壁高は53~64cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、締まりがない。

竈 東壁のやや南寄りに構築されている。天井部と右袖部は残存しておらず、僅かに左袖部が確認できた。右袖部の補強材として使用された板状の礫が出土している。掘り方の規模は、煙道部から焚き口部まで90cm、壁外への掘り込みは幅76cm、奥行き56cmである。火床部は、床面を約4cm掘り窪めており、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子が若干確認できた。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・砂少量、炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 砂多量、炭化物少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・砂少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・砂少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 焼土小ブロック中量、焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、砂微量

覆土 4層からなり、人為堆積である。

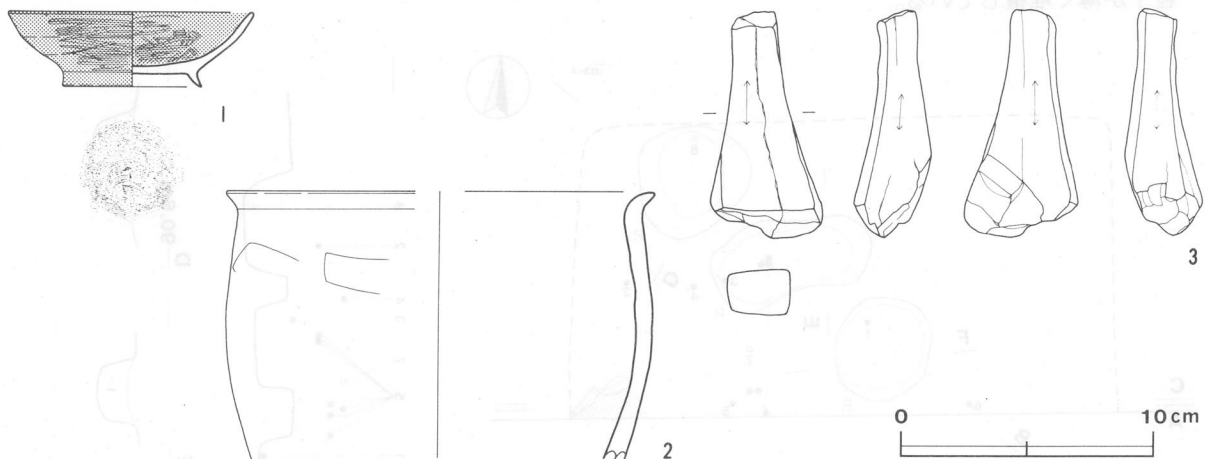
土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・砂微量、焼土粒子極微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・砂微量、焼土粒子・炭化物極微量
- 3 黒褐色 炭化粒子・砂微量、焼土粒子・炭化物極微量
- 4 黒褐色 砂少量、炭化粒子微量、焼土粒子極微量

遺物 出土遺物は、土師器片81点、石製品1点である。第26図1の土師器坏は北壁際覆土下層から正位の状態

で、2の土師器甕は竈付近覆土下層から、3の砥石は北壁際覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代(11世紀前半)と考えられる。



第26図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	高台付坏 土師器	A 9.8 B 3.1 D 5.6 E 0.6	底部から口縁部一部欠損。体部は内彎し、口縁部は僅かに外傾する。高台は「ハ」の字状に開く。切り離した後高台貼り付け。	底部回転糸切り。内面底部から体部、外面体部全面に丁寧なヘラ磨き。	長石・スコリア・雲母 黒色 普通	P72 95% PL17 北壁際覆土下層 内・外面黒色処理
2	甕 土師器	A[17.2] B(10.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部はゆるやかに内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面横方向のヘラナデ。	長石・砂粒 にぶい黄橙色 普通	P73 5% PL17 竈付近覆土下層

図版番号	器種	計測値 (cm)					石材	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ	孔径	重量(g)			
第26図3	砥石	(9.1)	(4.5)	(3.1)	—	(113.8)	凝灰岩	覆土下層	Q5 PL20

第11号住居跡 (第27図)

位置 調査B区の南東部, D3c2区。

規模と平面形 東西軸長 [4.40] m, 南北軸長 [2.34] mまで測れるが, 調査区域外へ延びているため全長は確認できない。

主軸方向 N-95°-E

壁 壁高は52~56cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 締まりがない。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁は, 長径94cm, 短径82cmの不整形円で, 深さ40cm。P₂は, 長径130cm, 短径53cmの長楕円形で, 深さ30cm。P₃は, 長径87cm, 短径78cmの円形で, 深さ34cm。各ピットの性格は不明であるが, 覆土中から土師器片や鉄製紡錘車が出土している。

P₁ 土層解説

- 1 黒褐色 砂少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量
- 2 黒褐色 砂少量, 炭化粒子微量

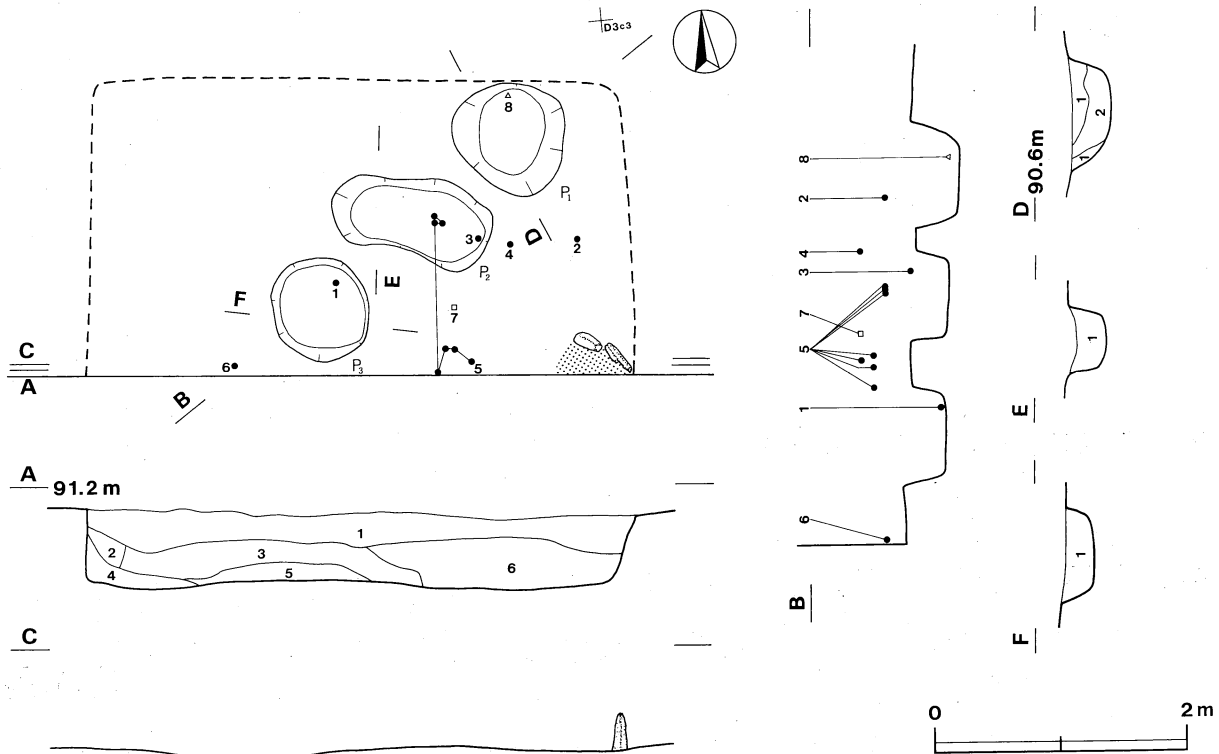
P₂ 土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂少量, 焼土小ブロック微量

P₃ 土層解説

- 1 黒褐色 砂少量, 焼土小ブロック・焼土粒子微量

竈 東壁に構築されているが, 竈の半分は調査区外になっている。また, ほとんど残存しておらず, 左袖部の補強材として使用された板状の礫のみ確認できた。火床部は床面を約5cm掘り窪めており, 焼土粒子と炭化粒子が薄く堆積している。



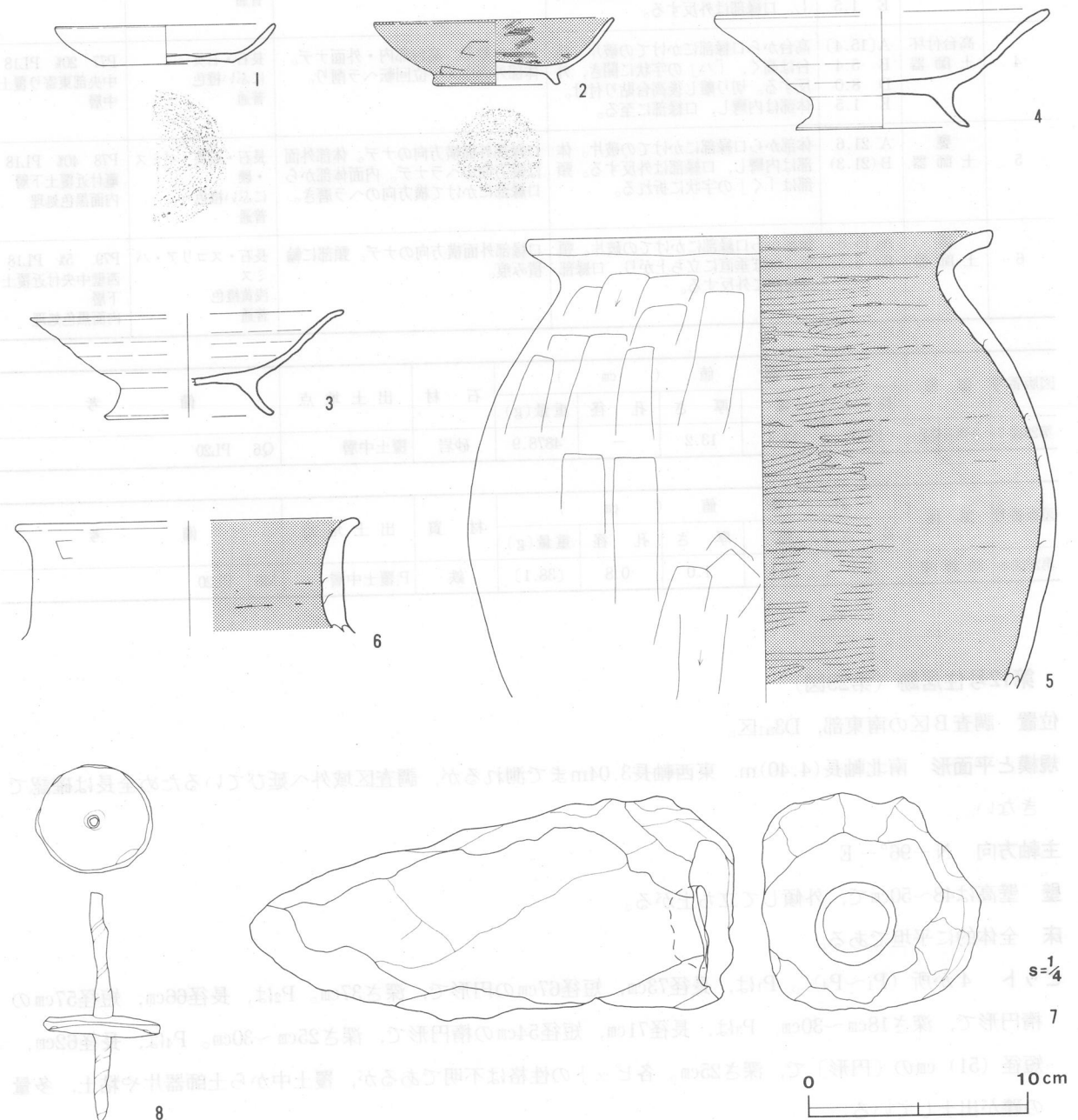
第27図 第11号住居跡実測図

覆土 6層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量，砂微量，焼土粒子極微量
- 2 黒褐色 砂少量，炭化粒子微量，焼土粒子極微量
- 3 黒褐色 炭化粒子・砂少量，焼土粒子極微量
- 4 黒褐色 砂少量，炭化粒子微量，焼土粒子極微量
- 5 黒褐色 砂少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 砂・炭化粒子少量，焼土粒子・炭化物極微量

遺物 出土遺物は，土師器片121点，鉄製品3点，石製品1点である。第28図1の土師器坏はP₃内覆土下層から正位の状態，2の土師器高台付坏は東壁中央付近覆土下層から逆位の状態出土している。3の土師器高台付坏はP₂内覆土上層から，4の土師器高台付坏は，中央部東寄り覆土中層から出土している。また，5の土師器甕は竈付近覆土下層から，6の土師器甕は西壁中央付近覆土下層から出土している。7の不明石製品は中央部北寄り覆土中層から，8の紡錘車はP₁の覆土中層から出土している。



第28図 第11号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代（11世紀前半）と考えられる。

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	坏 土師器	A 10.2 B 1.8 C 6.2	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。体部は緩やかに内彎し、口縁部に至る。	ロクロ整形。底部回転系切り。内面底部周縁及び体部回転ヘラナデ。	長石・スコリア・パミス 浅黄橙色 普通	P74 40% PL18 P3内覆土下層
2	高台付坏 土師器	A 11.2 B 3.1 C 6.9 E 0.5	底部から口縁部一部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。切り離した後高台貼り付け。体部は緩やかに内彎し、口縁部に至る。	ロクロ整形。底部回転系切り。内面底部は同一方向に、体部から口縁部は横方向に丁寧なヘラ磨き。	長石・パミス 黒色 良好	P75 90% PL18 東壁中央付近覆土下層 内・外面黒色処理 (外面一部黒色剥離)
3	高台付坏 土師器	A[14.6] B 4.8 D〔7.9〕 E 1.5	高台から口縁部にかけての破片。高台は高く、「ハ」の字状に開く。切り離した後高台貼り付け。体部は内彎し、口縁部は外反する。	ロクロ整形。高台部内・外面ナデ。	長石・石英・小礫 橙色 普通	P76 30% PL18 P2内覆土上層
4	高台付坏 土師器	A[15.4] B 5.4 D 8.0 E 1.5	高台から口縁部にかけての破片。高台は高く、「ハ」の字状に開き、外反する。切り離した後高台貼り付け。体部は内彎し、口縁部に至る。	ロクロ整形。高台部内・外面ナデ。体部外面中・下位回転ヘラ削り。	長石・石英 にぶい橙色 普通	P77 20% PL18 中央部東寄り覆土中層
5	甕 土師器	A 21.6 B (21.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は外反する。頸部は「く」の字状に折れる。	口縁部外面横方向のナデ。体部外面は縦方向のヘラナデ。内面体部から口縁部にかけて横方向のヘラ磨き。	長石・石英・パミス ・礫 にぶい橙色 普通	P78 40% PL18 竈付近覆土下層 内面黒色処理
6	甕 土師器	A[15.8] B〔5.3〕	頸部から口縁部にかけての破片。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部外面横方向のナデ。頸部に輪積み痕。	長石・スコリア・パミス 浅黄橙色 普通	P79 5% PL18 西壁中央付近覆土下層 内面黒色処理

図版番号	器種	計測値 (cm)					石 材	出土地点	備 考
		長さ	幅	厚さ	孔 径	重量(g)			
第28図7	不明石製品	29.7	13.4	13.2	—	4878.9	砂岩	覆土中層	Q6 PL20

図版番号	器種	計測値 (cm)					材 質	出土地点	備 考
		長さ	幅	厚さ	孔 径	重量(g)			
第28図8	紡錘車	5.3	5.1	1.0	0.8	[38.1]	鉄	P1覆土中層	M6 PL20

第12号住居跡（第29図）

位置 調査B区の南東部、D3a1区。

規模と平面形 南北軸長(4.40)m、東西軸長3.04mまで測れるが、調査区域外へ延びているため全長は確認できない。

主軸方向 N-96°-E

壁 壁高は48~50cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦である。

ピット 4か所(P1~P4)。P1は、長径73cm、短径67cmの円形で、深さ37cm。P2は、長径66cm、短径57cmの楕円形で、深さ18cm~30cm。P3は、長径71cm、短径54cmの楕円形で、深さ25cm~30cm。P4は、長径62cm、短径(51)cmの〔円形〕で、深さ25cm。各ピットの性格は不明であるが、覆土中から土師器片や粘土、多量の礫が出土している。

P₁ 土層解説

- 1 黒褐色 砂少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 黒褐色 砂少量, 炭化粒子極微量

P₂ 土層解説

- 1 黒褐色 砂少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 砂少量, 炭化物・炭化粒子微量, 焼土小ブロック・焼土粒子極微量

P₃ 土層解説

- 1 黒褐色 砂少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子・炭化物極微量
- 2 暗褐色 炭化粒子・砂極微量

P₄ 土層解説

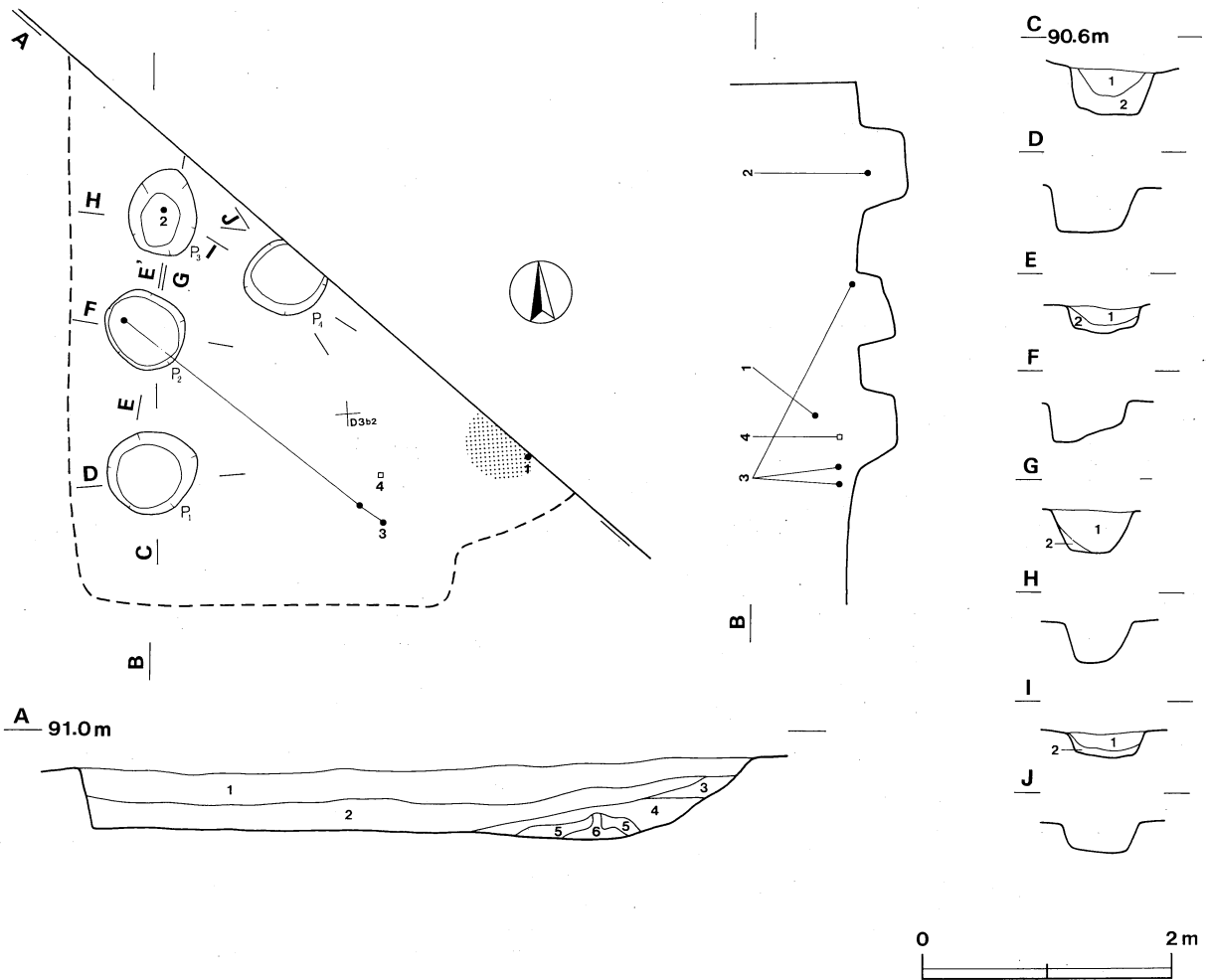
- 1 黒褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子・砂微量
- 2 黒褐色 砂少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

竈 東壁に構築されているが、ほとんど残存しておらず、土層断面でのみ確認できた。掘り方の規模は煙道部から焚き口部まで (190) cm, 壁外への掘り込みは (84) cmである。火床部は、床面を約5 cm掘り窪めており、火床面には焼土粒子・炭化粒子が薄く堆積している。

覆土 6層からなり、自然堆積である。

土層解説

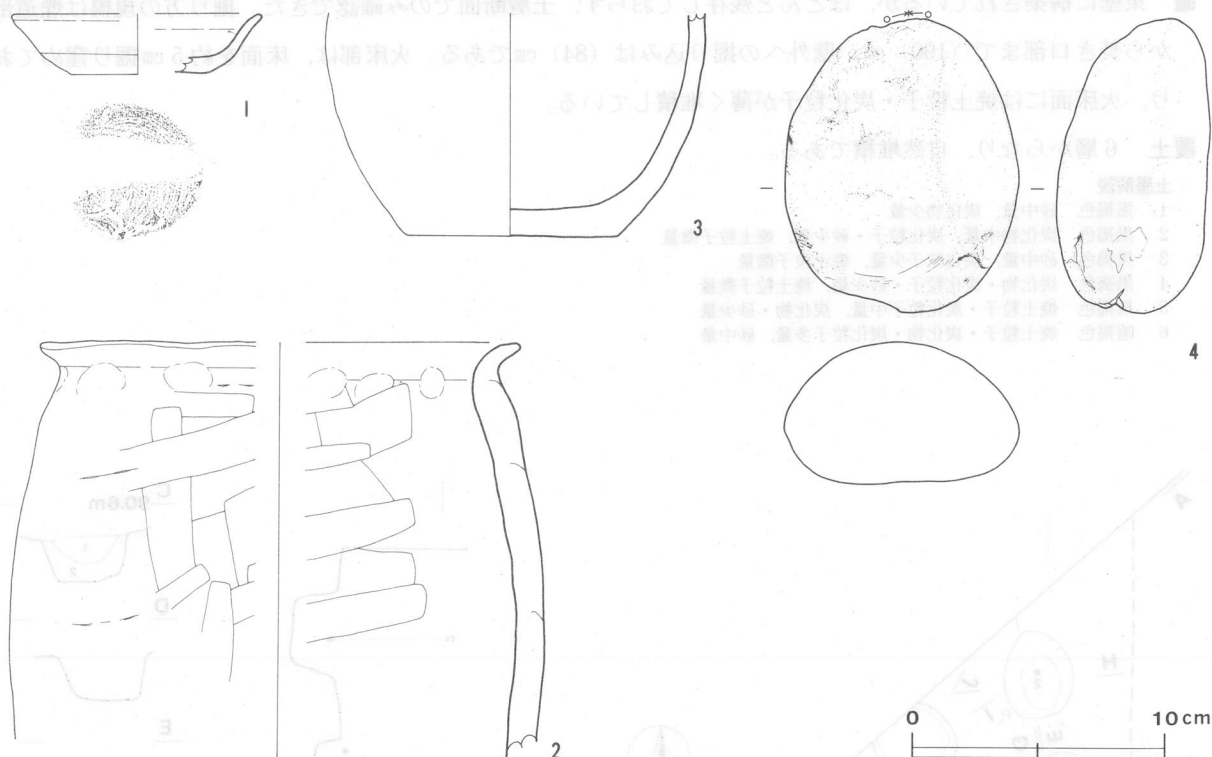
- 1 黒褐色 砂中量, 炭化物少量
- 2 黒褐色 炭化物中量, 炭化粒子・砂少量, 焼土粒子微量
- 3 黒褐色 砂中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 4 黒褐色 炭化物・炭化粒子・砂少量, 焼土粒子微量
- 5 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 炭化物・砂少量
- 6 暗褐色 焼土粒子・炭化物・炭化粒子多量, 砂中量



第29図 第12号住居跡実測図

遺物 出土遺物は、土師器片54点、石器1点である。第30図1の土師器坏は竈内覆土中層から正位の状態で、2の土師器甕はP₃の覆土上層から出土している。3の土師器甕は南東コーナー付近及び西壁中央付近の覆土下層からそれぞれ出土した土器片が接合したものである。また、4の磨石は中央部覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代（11世紀前半）と考えられる。



第30図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	坏 土師器	A[10.0] B 2.4 C 5.5	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は僅かに外反する。	ロクロ整形。体部外面下位回転ヘラ削り後ナデ。内面横方向のヘラナデ。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・パミス・雲母にぶい橙色普通	P80 50% PL18 竈内覆土中層
2	甕 土師器	A[19.2] B(16.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部は「く」の字状に折れる。口縁部は外反する。	頸部内・外面指頭による調整。体部外面輪積み痕。体部内面横方向のヘラナデ。	長石・石英・雲母 橙色 普通	P81 5% P ₃ 覆土上層
3	甕 土師器	B(9.0) C 8.5	底部から体部にかけての破片。平底。	体部外面下位横方向のヘラナデ。体部外面中位斜め方向のヘラナデ。	長石・石英・パミス 橙色 普通	P82 10% PL18 南東コーナー付近 及び西壁中央付近 覆土下層

図版番号	器種	計測値 (cm)					石材	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ	孔径	重量(g)			
第30図4	磨石	11.8	9.3	5.8	—	905.3	花崗岩	覆土下層	Q7 PL20

第13号住居跡 (第31図)

位置 調査B区の南東部, D2c0区。

規模と平面形 長軸3.77m, 短軸3.39mの隅丸長方形である。

主軸方向 N-114°-E

壁 壁高は18~20cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 締まりがない。遺構の南側半分が大きく攪乱を受けている。

竈 東壁中央部に構築されている。天井部と両袖部は残存しておらず, 掘り方のみを確認した。掘り方の規模は, 煙道部から焚き口部まで108cm, 壁外への掘り込みは, 幅65cm, 奥ゆき63cmである。火床面には, 焼土小ブロックや焼土粒子が僅かに堆積している。

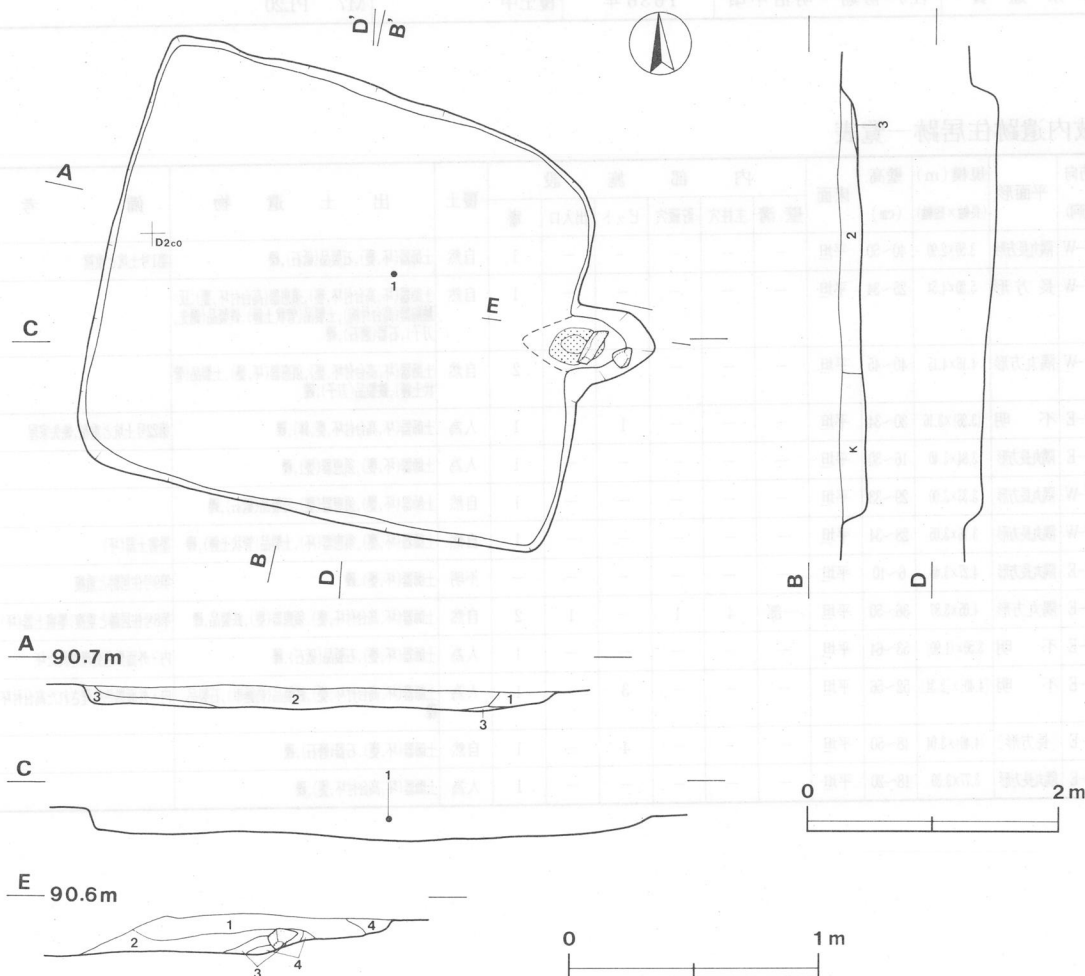
竈土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・砂少量, 焼土粒子微量, 焼土小ブロック極微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 焼土小ブロック・炭化物少量, 砂微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量, 焼土小ブロック・砂微量

覆土 3層からなり, 人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 砂少量, 焼土粒子・炭化粒子微量, 炭化物極微量
- 2 黒褐色 砂微量, 焼土粒子・炭化粒子極微量
- 3 暗褐色 砂少量, 炭化粒子極微量



第31図 第13号住居跡実測図

遺物 出土遺物は、土師器片38点、古銭1点である。第32図1の土師器高台付坏は、中央部覆土中層から出土している。また、2の古銭「寛永通寶」は覆土中から出土しているが、混入したものと思われる。

所見 本跡の時期は、遺構の形態や出土遺物から平安時代（10世紀後半）と考えられる。



第32図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	高台付坏 土師器	B〔2.7〕 D〔8.4〕 E 1.5	高台から底部にかけての破片。高台は高く、「ハ」の字状に開き、外反する。切り離し後、高台貼り付け。	ロクロ整形。高台内・外面横方向のナデ。底部回転系切り。	長石・スコリア・バミスにぶい 橙色 普通	P83 5% PL18 中央部覆土中層

図版番号	名称	初 鑄 年		出土地点	備 考
		時 代	年 号		
第32図2	寛 永 通 寶	江戸初期～明治中頃	1636年	覆土中	M7 PL20

表2 番城内遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設						覆土	出 土 遺 物	備 考
							壁 溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口	竈			
1	B2c3	N-8°-W	隅丸長方形	3.50×2.90	40~50	平坦	-	-	-	-	-	1	自然	土師器(坏, 甕), 石製品(砥石), 礫	第1号土坑と重複
2	C2a0	N-17°-W	長 方 形	5.20×4.54	25~34	平坦	-	-	-	-	-	1	自然	土師器(坏, 高台付坏, 甕), 須恵器(高台付坏, 甕), 灰釉陶器(高台付碗), 土製品(管状土錘), 鉄製品(鋤先, 刀子), 石器(磨石), 礫	
3	C2b0	N-3°-W	隅丸方形	4.16×4.15	40~45	平坦	-	-	-	-	-	2	自然	土師器(坏, 高台付坏, 甕), 須恵器(坏, 甕), 土製品(管状土錘), 鉄製品(刀子), 礫	
4	C2b7	N-99°-E	不 明	(3.26)×3.16	30~34	平坦	-	-	-	1	-	1	人為	土師器(坏, 高台付坏, 甕, 鉢), 礫	第22号土坑と重複, 焼失家屋
5	C2d9	N-99°-E	隅丸長方形	3.84×3.40	16~30	平坦	-	-	-	-	-	1	人為	土師器(坏, 甕), 須恵器(甕), 礫	
6	C3d4	N-5°-W	隅丸長方形	3.33×3.00	29~33	平坦	-	-	-	-	-	1	自然	土師器(坏, 甕), 須恵器(甕), 石製品(砥石), 礫	
7	C3f6	N-12°-W	隅丸長方形	3.76×3.06	28~34	平坦	-	-	-	-	-	1	自然	土師器(坏, 甕), 須恵器(坏), 土製品(管状土錘), 礫	墨書土器(坏)
8	C3h5	N-7°-E	隅丸長方形	4.27×3.48	6~10	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器(坏, 甕), 礫	第9号住居跡と重複
9	C3i6	N-18°-E	隅丸方形	4.05×3.87	36~50	平坦	一部	4	1	-	1	2	自然	土師器(坏, 高台付坏, 甕), 須恵器(甕), 鉄製品, 礫	第8号住居跡と重複, 墨書土器(坏)
10	D3a5	N-99°-E	不 明	3.50×(1.90)	53~64	平坦	-	-	-	-	-	1	人為	土師器(坏, 甕), 石製品(砥石), 礫	内・外面黒色処理された坏
11	D3c2	N-95°-E	不 明	(4.40)×(2.34)	52~56	平坦	-	-	-	3	-	1	人為	土師器(坏, 高台付坏, 甕), 鉄製品(紡錘車), 石製品, 礫	内・外面黒色処理された高台付坏
12	D3a1	N-96°-E	[長方形]	(4.40)×3.04	48~50	平坦	-	-	-	4	-	1	自然	土師器(坏, 甕), 石器(磨石), 礫	
13	D2c0	N-14°-E	隅丸長方形	3.77×3.39	18~20	平坦	-	-	-	-	-	1	人為	土師器(坏, 高台付坏, 甕), 礫	

2 土坑

当遺跡から、土坑14基を検出した。以下、主な土坑の概要と出土遺物について記載し、その他の土坑については実測図と一覧表を掲載する。

第9号土坑（第33図）

位置 調査A区北西部、B2e6区。

規模と平面形 長径0.73m、短径0.65mの楕円形で、深さは20cmである。

長径方向 N-14°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

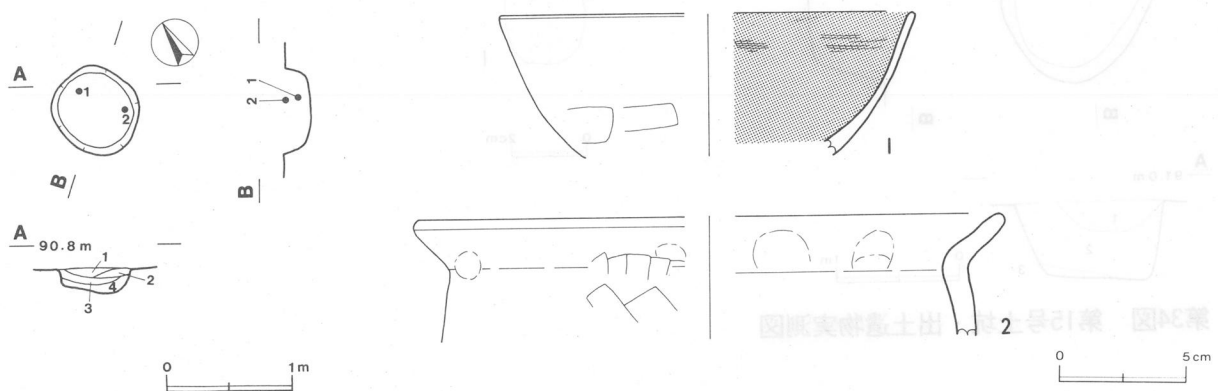
覆土 4層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、砂微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、砂微量
- 4 黒褐色 炭化粒子少量、砂微量、焼土粒子極微量

遺物 土師器片80点及び礫6点が出土している。第33図1の土師器坏は覆土中層から、2の土師器甕は覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、出土遺物から平安時代（9世紀末～10世紀初め）の土坑と考えられる。



第33図 第9号土坑・出土遺物実測図

第9号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	坏 土師器	A〔16.8〕 B〔5.7〕	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ整形。体部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。	雲母・スコリア・針状鉱物にぶい黄橙色普通	P85 20% PL18 覆土中層 内面黒色処理
2	甕 土師器	A〔23.8〕 B〔4.9〕	体部から口縁部にかけての破片。頸部は「く」の字状に折れ、口縁部は外反する。	口縁部内面と頸部外面指頭による調整。体部外面斜め方向のヘラナデ。	長石・石英にぶい黄橙色普通	P86 5% PL18 覆土上層

第15号土坑（第34図）

位置 調査A区北部，B2ho区。

規模と平面形 長径1.60m，短径1.20mの楕円形で，深さは60cmである。

長径方向 N-23°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

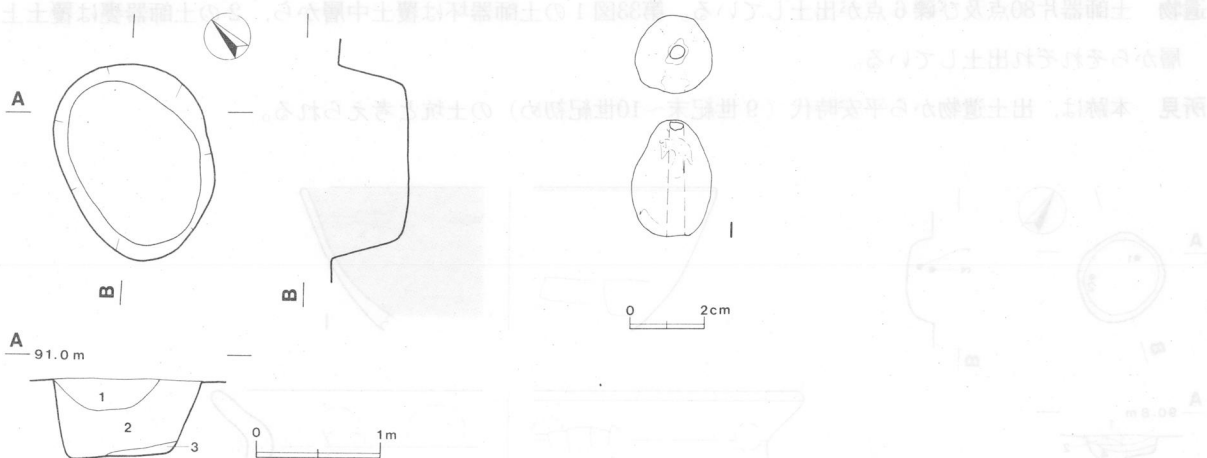
覆土 3層からなり，自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 砂中量，炭化粒子少量，焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 砂多量，炭化粒子微量，焼土粒子極微量
- 3 暗褐色 砂微量，炭化粒子極微量

遺物 土師器片68点，土製品1点及び礫2点が出土している。第34図1の管状土錘は，覆土中から出土している。

所見 本跡は，出土遺物が細片のため時期は不明である。



第34図 第15号土坑・出土遺物実測図

第15号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)					現存率 (%)	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ	孔径	重量(g)			
第34図1	管状土錘	3.1	2.2	2.1	0.4	(11.2)	95	覆土中	DP12 PL20

第23号土坑（第35図）

位置 調査A区中央部，C2cs区。

規模と平面形 長径0.94m，短径0.89mの円形で，深さは60cmである。

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

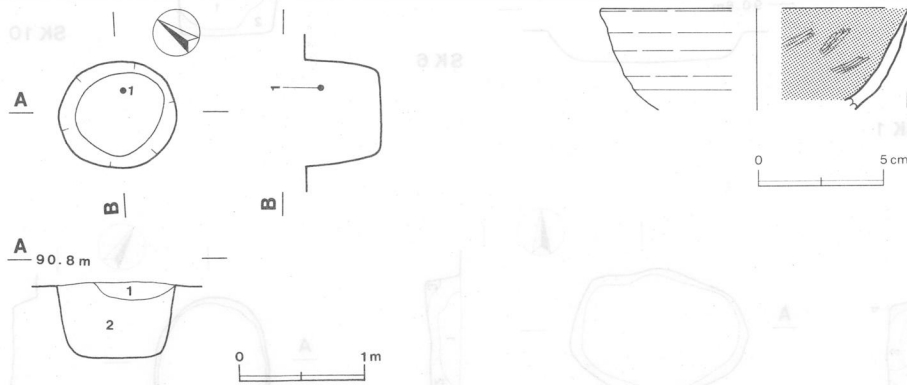
覆土 2層からなり、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子・砂少量
- 2 暗褐色 砂中量, 炭化粒子微量

遺物 土師器片27点が出土している。第35図1の土師器坏は、覆土上層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から平安時代（9世紀末～10世紀初め）の土坑と考えられる。



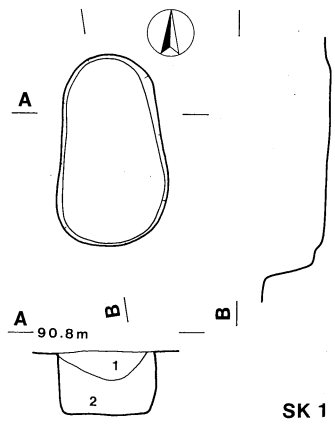
第35図 第23号土坑・出土遺物実測図

第23号土坑出土遺物観察表

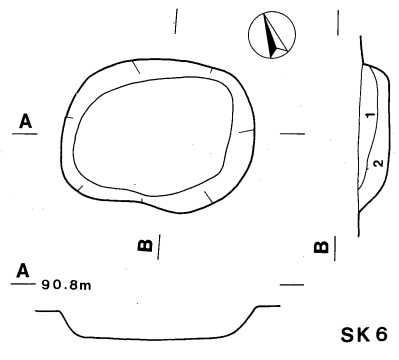
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 1	坏 土師器	A[12.6] B(4.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	ロクロ整形。内面へラ磨き。体部外面下位回転へラ削り。	スコリア・雲母にぶい橙色普通	P87 10% PL18 覆土上層 内面黒色処理

表3 番城内遺跡土坑一覧表

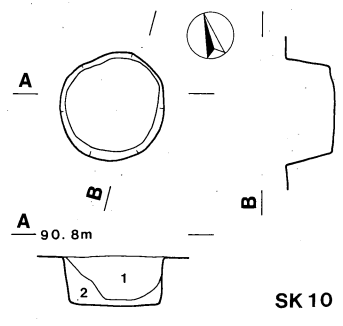
土坑 番号	位置 (長径方向 (長軸方向))	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考
			長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	B2cs	N-5°-W	楕円形	1.54×0.86	54	外傾	平坦	自然	第1号住居跡と重複
6	B2cs	N-6°-W	楕円形	1.56×1.21	24	外傾	平坦	自然	土師器(甕)
9	B2cs	N-14°-W	楕円形	0.73×0.65	20	外傾	平坦	自然	土師器(坏, 甕), 碟
10	B2fe		円形	0.86×0.84	38	外傾	平坦	自然	土師器(坏, 甕), 碟
12	B2hs		円形	0.90×0.82	32	外傾	平坦	人為	土師器(坏, 甕)
13	B2hs	N-8°-E	楕円形	1.40×1.05	25	外傾	平坦	自然	土師器(坏, 甕), 須恵器
14	B2hs	N-30°-E	楕円形	1.10×0.92	27	外傾	平坦	自然	土師器(坏, 甕)
15	B2ho	N-2°-E	楕円形	1.60×1.20	60	外傾	平坦	自然	土師器(坏, 甕), 土製品(管状土錘), 碟
16	B2hs		円形	1.22×1.16	25	外傾	平坦	自然	土師器(坏, 甕), 碟
19	B2jr		円形	1.15×1.10	32	外傾	平坦	自然	土師器(甕), 碟
22	C2bs		円形	0.84×0.76	16	外傾	平坦	自然	土師器(坏, 甕)
23	C2cs		円形	0.94×0.89	60	外傾	平坦	自然	土師器(坏, 甕)
26	C3c2		円形	1.09×1.07	43	外傾	平坦	自然	土師器(坏, 甕), 碟
28	C3g4		円形	1.43×1.43	32	外傾	平坦	自然	土師器(甕), 碟



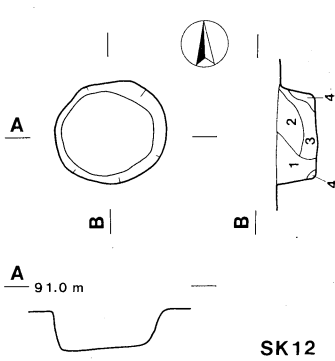
SK 1



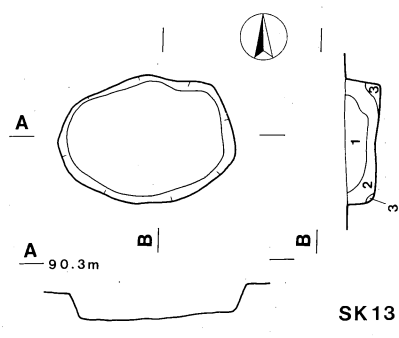
SK 6



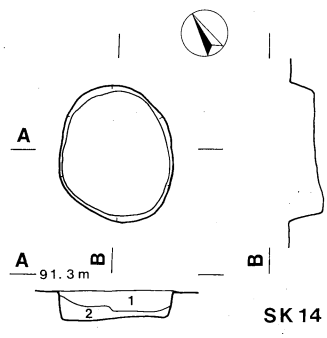
SK 10



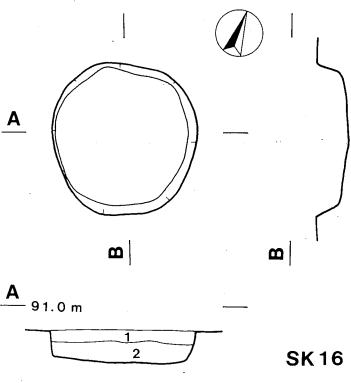
SK 12



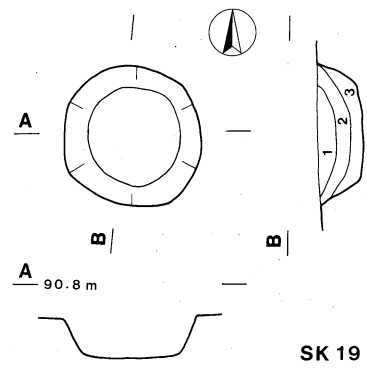
SK 13



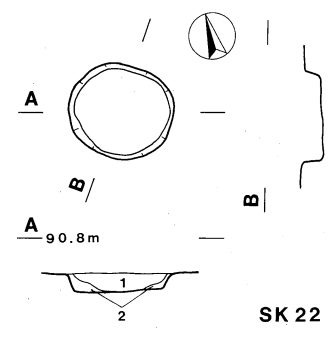
SK 14



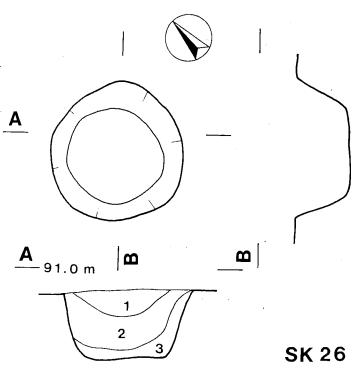
SK 16



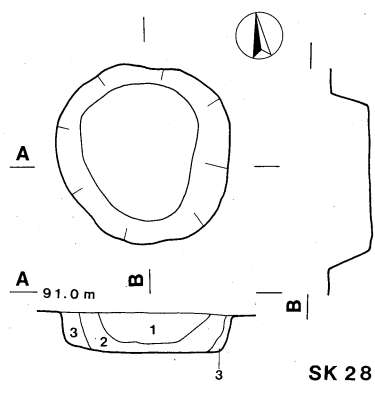
SK 19



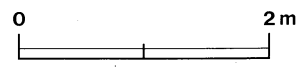
SK 22



SK 26



SK 28



第36图 土坑实测图

土坑土層解説

第1号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子少量, 砂微量, 焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 炭化粒子・砂微量, 焼土粒子極微量

第6号土坑土層解説

- 1 黒褐色 砂中量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 砂中量, 炭化粒子微量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・砂中量, 炭化粒子少量
- 2 黒褐色 砂中量, 炭化物・炭化粒子微量

第12号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量
- 3 暗褐色 炭化粒子少量
- 4 暗褐色 炭化粒子微量

第13号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 炭化粒子微量

第14号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子微量

第16号土坑土層解説

- 1 暗褐色 砂中量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 砂中量, 炭化粒子微量

第19号土坑土層解説

- 1 黒褐色 砂多量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 砂中量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 砂多量, 炭化粒子微量

第22号土坑土層解説

- 1 黒褐色 砂・炭化粒子少量, 焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 砂少量, 炭化粒子微量

第26号土坑土層解説

- 1 黒褐色 砂少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量
- 2 暗褐色 砂少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量
- 3 黒褐色 砂少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第28号土坑土層解説

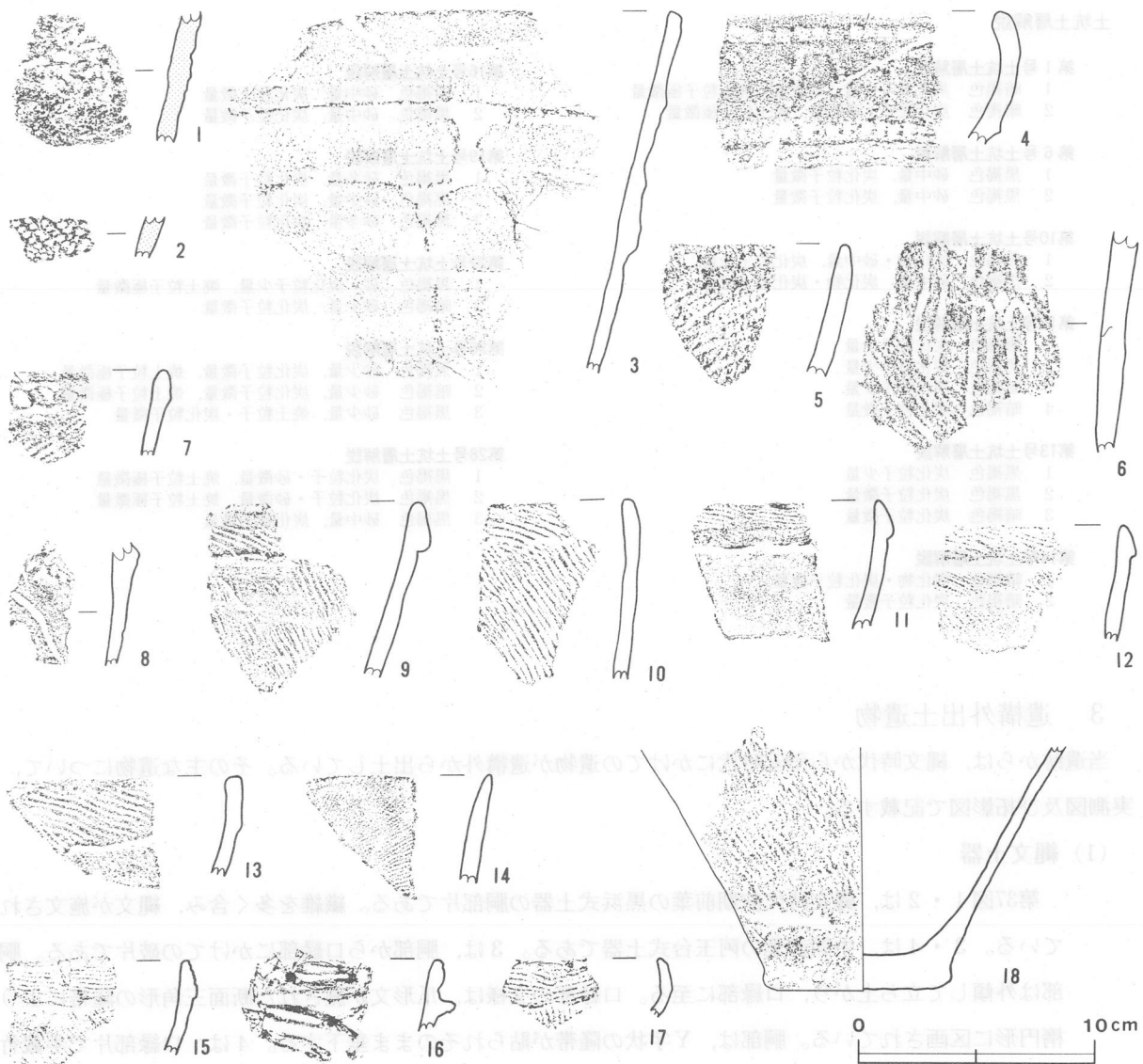
- 1 黒褐色 炭化粒子・砂微量, 焼土粒子極微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・砂微量, 焼土粒子極微量
- 3 黒褐色 砂中量, 炭化粒子微量

3 遺構外出土遺物

当遺跡からは、縄文時代から平安時代にかけての遺物が遺構外から出土している。その主な遺物について、実測図及び拓影図で記載する。

(1) 縄文土器

第37図1・2は、縄文時代前期前葉の黒浜式土器の胴部片である。繊維を多く含み、縄文が施文されている。3・4は、中期前葉の阿玉台式土器である。3は、胴部から口縁部にかけての破片である。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部の文様は、爪形文が施された断面三角形の隆帯により楕円形に区画されている。胴部は、Y字状の隆帯が貼られそのまま垂下する。4は、口縁部片で半截竹管による横方向のキャタビラ文が口唇部と隆帯の上部に施されている。5～8は、後期前葉の堀之内式土器である。5は、口縁部片で地文に縄文を用い、刺突文が施されている。6は、胴部片で地文に縄文を用い、沈線が施されている。内面に輪積み痕を残す。7は、口縁部片で口唇部に隆帯が貼られ、隆帯に爪形文が施されている。8は、胴部片で隆帯に刻文があり、瘤の下部には刺突が施されている。9～18は、晩期後葉の大洞式土器の口縁部片である。9～13・15・17は、口縁部に隆帯が貼られ、隆帯にまで撚糸文が施されている。14は、口唇部まで撚糸文が施されている。16は、口縁部に隆帯を貼り隆帯の削り込みによる凹凸をつけ、突起部と突起部を竹管による沈線で結んでいる。また、突起部は二段になっており、間に沈線が施されている。18は、底部から胴部にかけての破片である。胴部は撚糸文が施され、外面胴部下端には指頭圧痕がある。



第37図 遺構外出土縄文土器拓影図

(2) 弥生土器

第38図19~28は弥生土器である。19は、口縁部まで横方向の沈線が施されている。20は、口縁部に竹管により横方向に2条の沈線があり、沈線の下部に縄文が施されている。口唇部上端は、平坦で内側にせり出ている。21は、口縁部に「く」の字状の沈線が2条施されている。22は、口縁部まで撚糸文が施されている。23は、沈線で区画された内側に撚糸文が充填されている。24~27は、胴部片である。24は撚糸文が施されている。25は、竹管による横方向の沈線が施されている。26は、地文に撚糸文が施され竹管による横方向の沈線で区画されている。27は、縄文と沈線が施されている。28は、底部片である。底部には網代痕がある。



第38図 遺構外出土弥生土器拓影図

(3) その他の遺物 (第39・40図)

遺構外出土遺物観察表

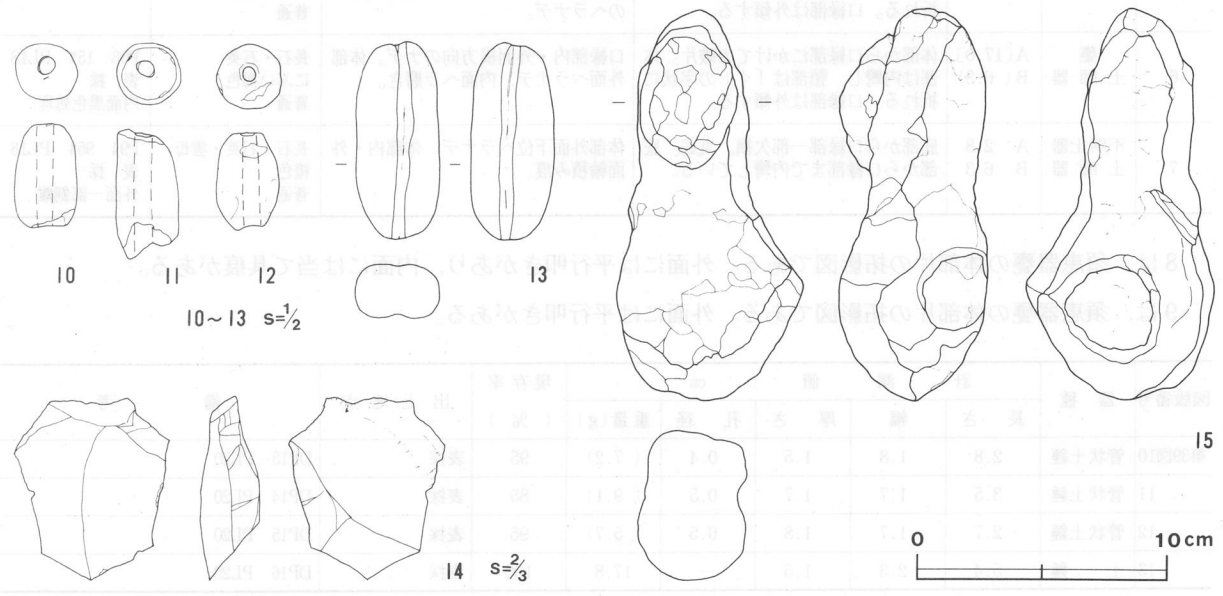
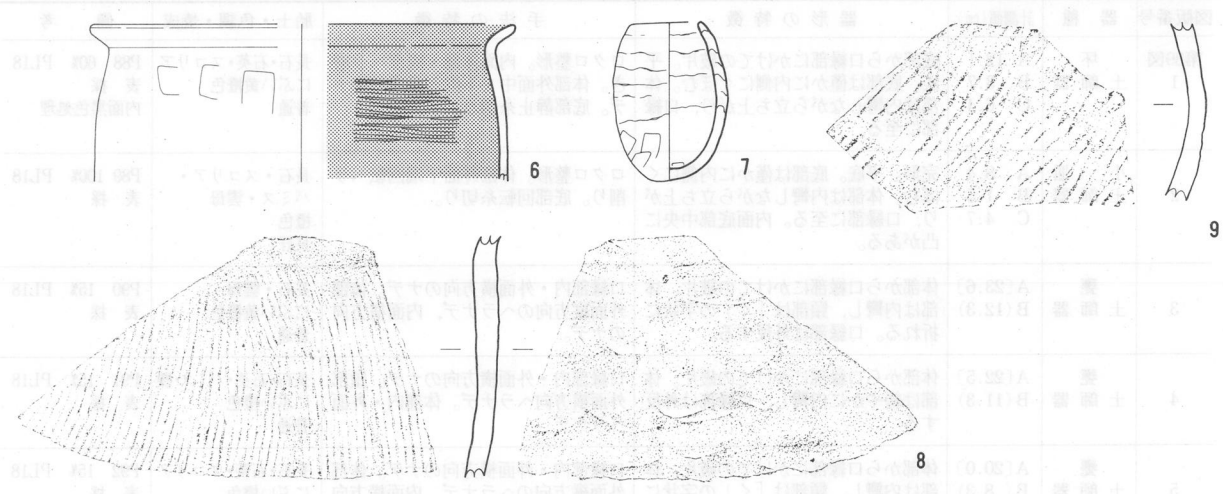
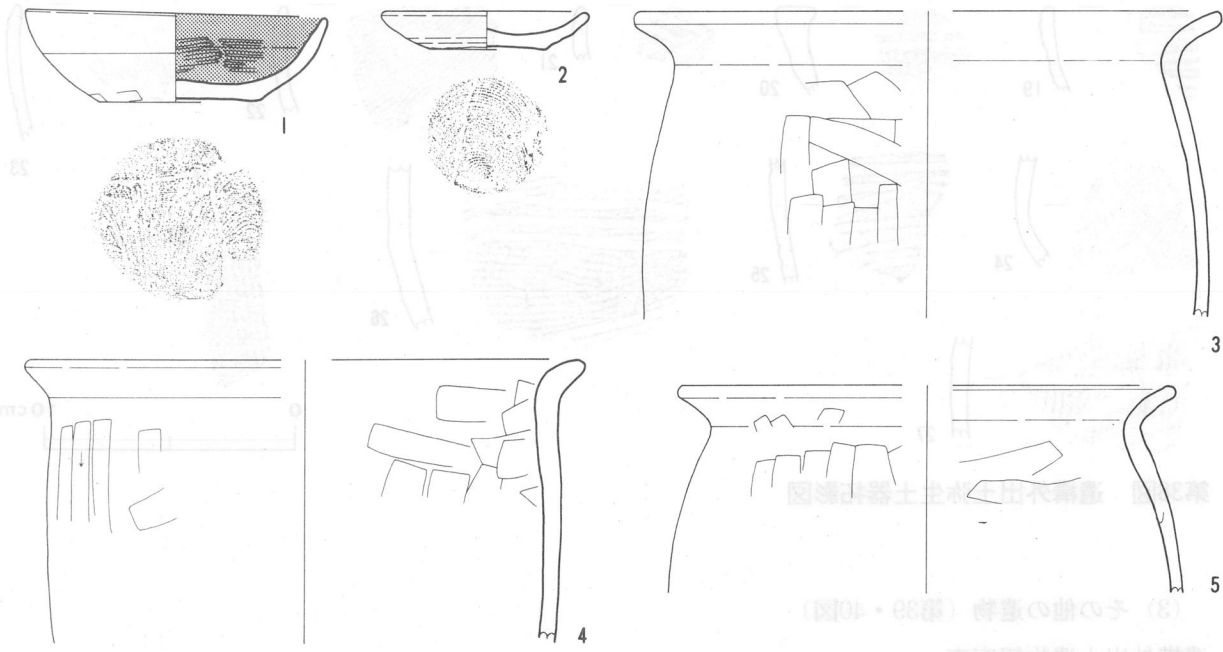
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	坏 土師器	A 12.1 B 3.7 C 6.4	底部から口縁部にかけての破片。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ整形。内面体部・底部ヘラ磨き。体部外面中・下位ヘラ削り後ナデ。底部静止糸切り。	長石・石英・スコリアにぶい黄橙色普通	P88 60% PL18 表採 内面黒色処理
2	小皿 土師器	A 8.4 B 1.5 C 4.7	完形。平底。底部は僅かに内側にくぼむ。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。内面底部中央に凸がある。	ロクロ整形。体部外面下端回転ヘラ削り。底部回転糸切り。	長石・スコリア・パミス・雲母 橙色良好	P89 100% PL18 表採
3	甕 土師器	A [23.6] B (12.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部は「く」の字状に折れる。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向のヘラナデ、内面横方向のナデ。	長石・雲母にぶい黄橙色普通	P90 15% PL18 表採
4	甕 土師器	A [22.5] B (11.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は緩やかに内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。頸部外面横方向ヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ。	長石・石英・パミス・礫にぶい橙色普通	P91 15% PL18 表採
5	甕 土師器	A [20.0] B (8.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部は「く」の字状に折れる。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面縦方向のヘラナデ、内面横方向のヘラナデ。	長石・石英・スコリアにぶい橙色普通	P92 15% PL18 表採
6	甕 土師器	A [17.0] B (6.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部は「く」の字状に折れる。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面ヘラナデ、内面ヘラ磨き。	長石・石英にぶい褐色普通	P93 15% PL18 表採 内面黒色処理
7	不明土器 土師器	A 2.8 B 6.3	底部から口縁部一部欠損。丸底。底部から口縁部まで内彎している。	体部外面下位ヘラナデ。体部内・外面輪積み痕。	長石・石英・雲母 橙色普通	P94 95% PL18 表採 外面一部剥離

8 は、須恵器甕の体部片の拓影図である。外面には平行叩きがあり、内面には当て具痕がある。

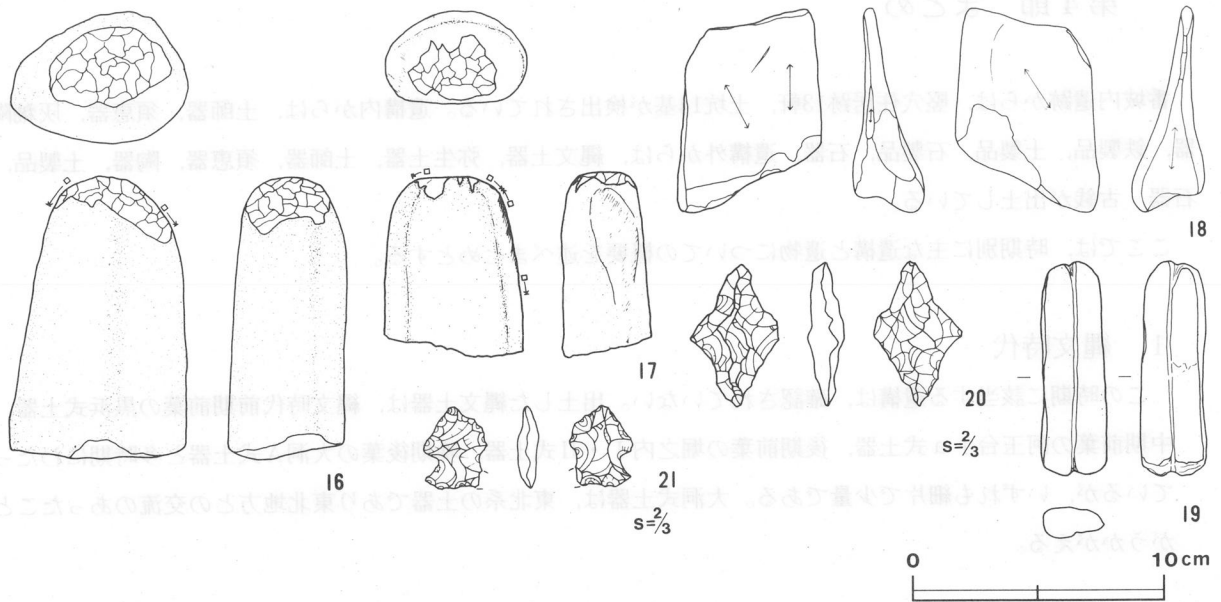
9 は、須恵器甕の体部片の拓影図である。外面には平行叩きがある。

図版番号	器種	計 測 値 (cm)					現 存 率 (%)	出 土 地 点	備 考
		長 さ	幅	厚 さ	孔 径	重 量 (g)			
第39図10	管状土鍾	2.8	1.8	1.5	0.4	(7.2)	95	表採	DP13 PL20
11	管状土鍾	3.5	1.7	1.7	0.5	(9.1)	85	表採	DP14 PL20
12	管状土鍾	2.7	1.7	1.8	0.5	(5.7)	95	表採	DP15 PL20
13	土 鍾	5.4	2.3	1.5	—	17.8	100	表採	DP16 PL20

(1) 図版表冊出土資料編 図93添



第39図 遺構外出土遺物実測図(1)



第40図 遺構外出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値 (cm)					石材	出土地点	備考
		長さ	幅	厚さ	孔径	重量(g)			
第39図14	剥片	3.2	3.1	1.2	—	7.9	頁岩	表採	Q8 PL20
15	不明石製品	15.7	7.5	6.0	—	847.3	花崗岩	表採	Q9 PL20
第40図16	敲石	(11.4)	7.1	4.8	—	(527.0)	砂岩	表採	Q10
17	敲石	(7.5)	5.7	3.6	—	(232.7)	砂岩	表採	Q11 PL20
18	砥石	(8.3)	(5.8)	(2.9)	—	(94.5)	凝灰岩	表採	Q12 PL20
19	石錘	(8.7)	2.7	1.3	—	(50.0)	粘板岩	表採	Q13 PL20
20	石鏃	2.9	1.8	0.7	—	1.9	メノウ	表採	Q15 PL20
21	石鏃	1.7	(1.3)	0.5	—	(0.9)	チャート	表採	Q16 PL20 アメリカ式

第4節 まとめ

番城内遺跡からは、竪穴住居跡13軒、土坑14基が検出されている。遺構内からは、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、土製品、石製品、石器、遺構外からは、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、土製品、石器、古銭が出土している。

ここでは、時期別に主な遺構と遺物についての概要を述べまとめとする。

1 縄文時代

この時期に該当する遺構は、確認されていない。出土した縄文土器は、縄文時代前期前葉の黒浜式土器、中期前葉の阿玉台Ⅰa式土器、後期前葉の堀之内Ⅰ・Ⅱ式土器、晩期後葉の大洞A式土器と多時期にわたっているが、いずれも細片で少量である。大洞式土器は、東北系の土器であり東北地方との交流のあったことがうかがえる。

2 弥生時代

この時期に該当する遺構は、確認されていない。出土した弥生土器は、細片で極少量であるが、弥生時代の遺跡の少ない大子地域においては、大変貴重な資料である。

3 平安時代

この時期に該当する遺構は、竪穴住居跡13軒、土坑2基である。当遺跡の特徴として、山地あるいは河川が近いということもあり、第11号住居跡・第12号住居跡の床面やピットからたくさんの石が出土していることである。その他、砂岩などの石を竈の補強材として袖部、あるいは支脚として使用していることである。竈に石を使用していた住居跡は、第1号住居跡・第3号住居跡・第4号住居跡・第6号住居跡・第9号住居跡・第10号住居跡・第11号住居跡である。

また、竈の向きをみると、北向きの竈を持つ住居跡が4軒、東向きの竈を持つ住居跡が6軒である。北向きの竈と東向きの竈を持つ住居跡は2軒である。出土遺物から、北向きの竈を持つ住居跡の時期は9世紀後半で、東向きの竈を持つ住居跡は、9世紀後半から11世紀前半である。北向きの竈と東向きの竈を持つ住居跡の時期は、9世紀末から10世紀初めである。この2つ竈を持つ住居跡は、竈の袖部の遺存状態や竈内に支脚があることから、両住居跡とも北竈の方が新しいと考えられる。

番城内遺跡は、9世紀後半から11世紀前半の2世紀間にわたって営まれた集落跡である。

参考文献

- ・浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅰ)」『研究ノート 創刊号』
茨城県教育財団 1992年7月
- ・浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅱ)」『研究ノート 2号』
茨城県教育財団 1993年7月
- ・大子町史編さん委員会 『大子町史 通史編 上巻』 1988年3月
- ・大子町史編さん委員会 『大子町史 写真集』 1980年12月

付 章

番城内遺跡から出土した炭化材および種実遺体の種類

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

茨城県では、これまで古墳時代や平安時代の住居構築材とみられる炭化材の樹種同定を中心にして、過去の植物利用に関する資料が蓄積されてきた。その結果、沿海地と内陸部とで用材に特徴があることが明らかとなり、その背景として周辺植生の違いが指摘されている（高橋・植木，1994）。しかし、その境界がどの付近にあるのかは明らかでない。また、木材以外の植物利用に関しては、牛久市ヤツノ上遺跡で灰像分析から構築材に利用されたイネ科植物を推定した例（未公表資料）や、常北町青木遺跡で出土した種実遺体がモモに同定された例（未公表資料）などがある。しかし、木材に比較すると資料が少ない。

本報告では、住居構築材と考えられる炭化材の樹種と、土坑から出土した種実遺体の種類を明らかにし、当該期の用材や植物質食料の利用に関する資料を得る。

1. 炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、平安時代の焼失住居跡（SI-4）から出土した、住居構築材と考えられる炭化材4点（SI-4 No.1～4）である。

(2) 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

炭化材は全てクリに同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc) ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

(4) 考察

住居構築材と考えられる炭化材は、同定した全点がクリであった。クリは、関東地方の縄文時代の多くの遺跡で構築材と考えられる炭化材に確認されている（千野，1991；高橋・植木，1994）。茨城県では縄文時代の構築材に関する資料が少ないため、縄文時代にクリが多用されていたかは不明である。

茨城県では、主として古墳時代の構築材を中心に樹種同定が行われてきた（パリノ・サーヴェイ株式会社，1986a, 1986b）。その結果、内陸部では落葉広葉樹のコナラ亜属を主とするが、沿海地ではアカガシ亜属やシノキ属などの常緑広葉樹と主としており、両地域で用材に違いがあることが明らかとなった。

平安時代の資料は、沿海地の水戸市白石遺跡や水戸市諏訪遺跡で報告されているが（嶋倉，1980；未公表資料）、常緑広葉樹を主としていることから古墳時代と同様の用材が推定される。一方内陸部については、資料

がほとんどないために用材については不明である。今回の結果は、内陸部における古墳時代の結果とも沿海地における平安時代の結果とも異なっている。このことから、古墳時代と平安時代で用材が異なっていた可能性がある。また、本地域が茨城県の中でも最も北に位置しており、南部の台地とは周辺植生が異なっていたことを示している可能性もある。今後さらに県内各地で構築材の樹種同定を行い、用材の地域性・時代性を明らかにしたい。

2. 種実遺体の種類

(1) 試料

試料は、平安時代の土坑Sk9から検出された試料1点（シャーレ内に複数の炭化物が収納されていた）である。

(2) 方法

双眼実体顕微鏡下で種類を同定し、ほう酸・ほう砂水溶液中に保存した。

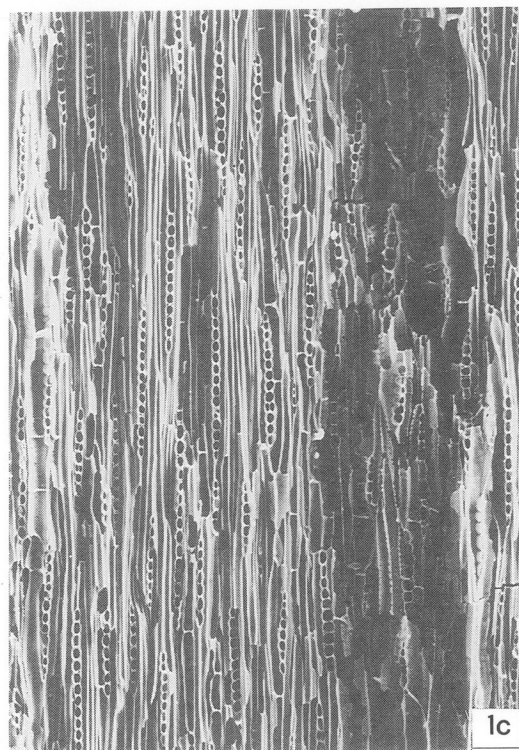
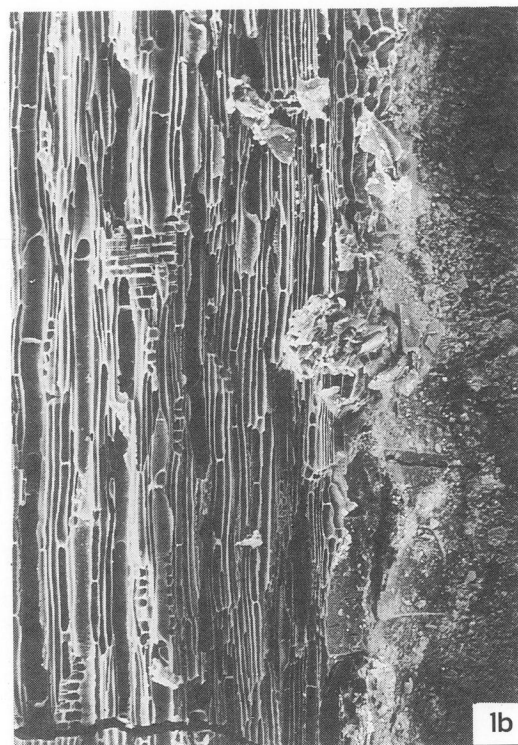
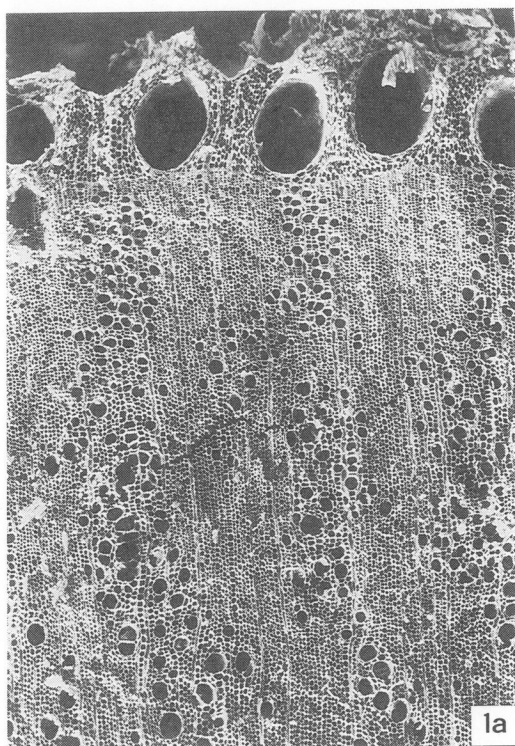
(3) 結果・考察

同定可能な種実は炭化したコナラ属 (*Quercus* sp.) の子葉3点であった。いずれも破片で推定される大きさは1 cm程度である。今回検出されたものは、火熱を受けて炭化したため、残存したとみられる。コナラ属は、縄文時代以降の主要な植物食であり、出土例も多い（渡辺, 1982）。このことから、これらは当時の重要な食料として採取、利用されていたことが示唆される。

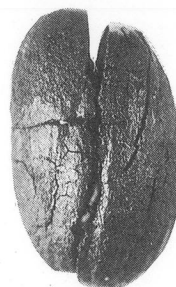
〈引用文献〉

- 千野裕道（1991）縄文時代に二次林はあったか —遺跡出土の植物性遺物からの検討—。東京都埋蔵文化財センター研究論文集, X, p.215-249.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1986a）奥山A遺跡出土試料 炭化材同定報告。茨城県教育財団文化財調査報告第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告2 奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」, p.239-240, 財団法人茨城県教育財団.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1986b）西原遺跡出土試料 種子及び材同定報告。茨城県教育財団文化財調査報告第31集「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告2 奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」, p.241-243, 財団法人茨城県教育財団.
- 嶋倉巳三郎（1980）日立市諏訪遺跡出土木炭の樹種について。「諏訪遺跡発掘調査報告書」, p.188, 日立市教育委員会.
- 高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PALYNO, 2, p.5-18.
- 渡辺 誠（1982）採集対象植物の地域性. 季刊考古学, 1, p.28-31, 雄山閣.

図版1 炭化材・種実遺体



200 μm : 1a
200 μm : 1b, 1c

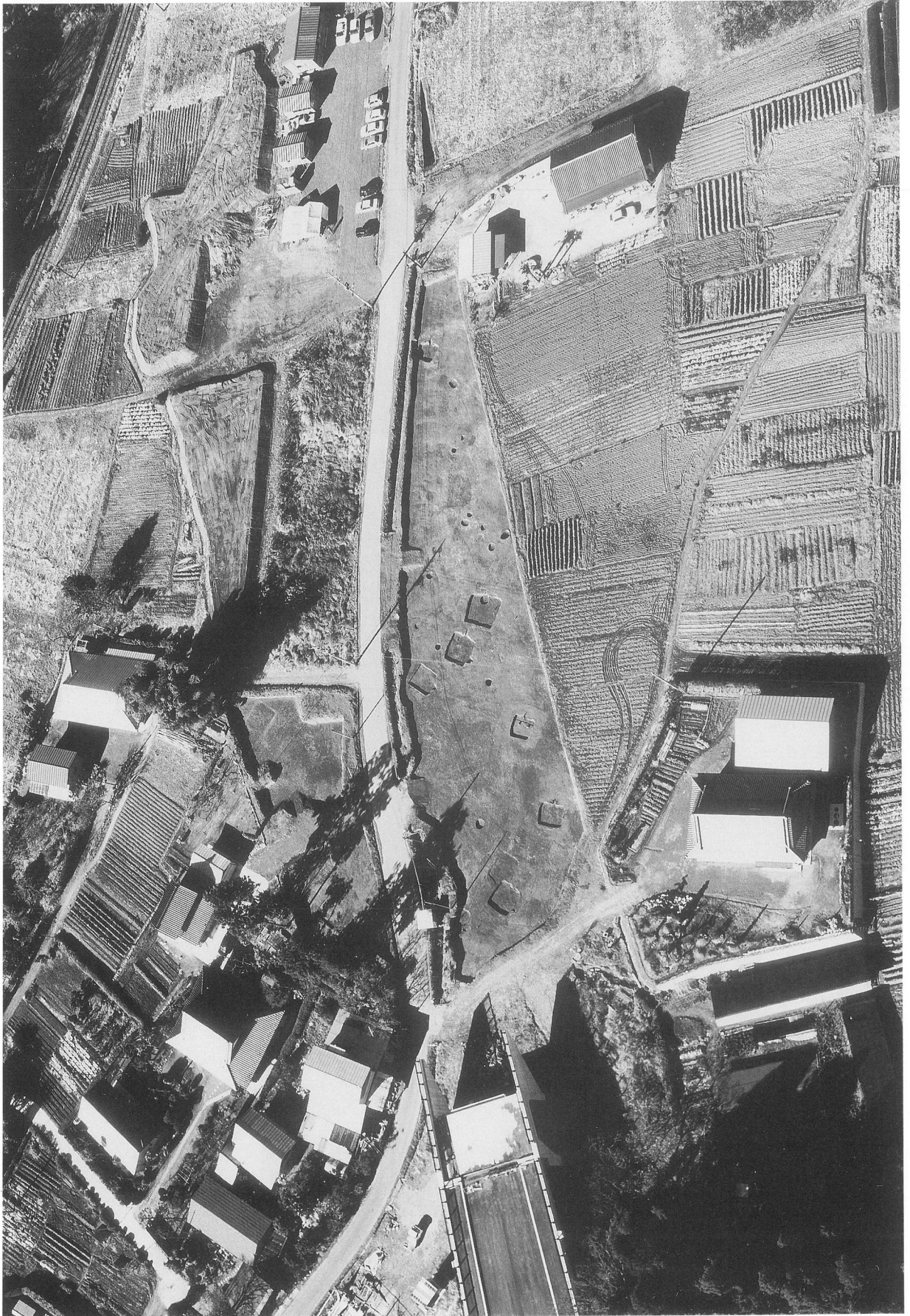


1 cm
(2)

1. クリ (SI-4 No. 3)
a: 木口, b: 柁目, c: 板目
2. コナラ属 子葉 (SK-9)

写 真 图 版

番 城 内 遺 跡



番城内遺跡全景

PL 2



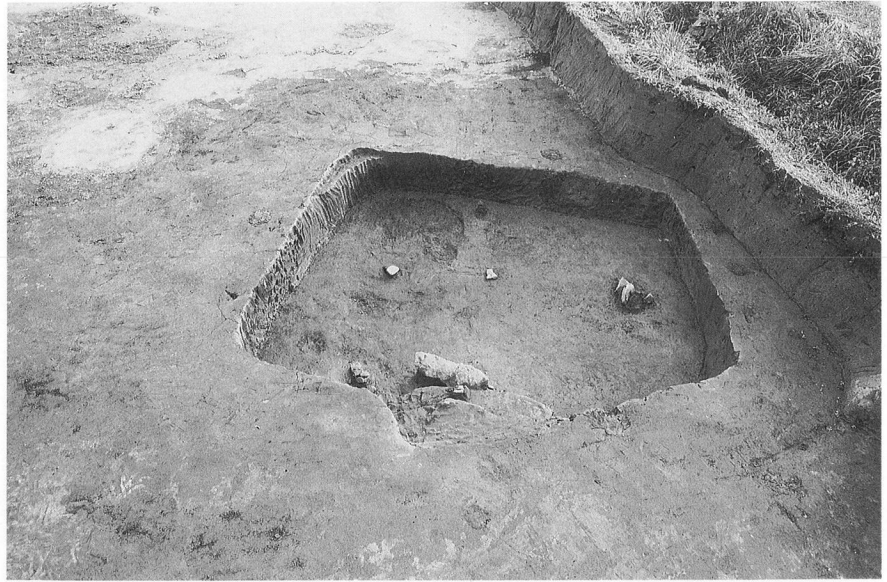
調査前風景



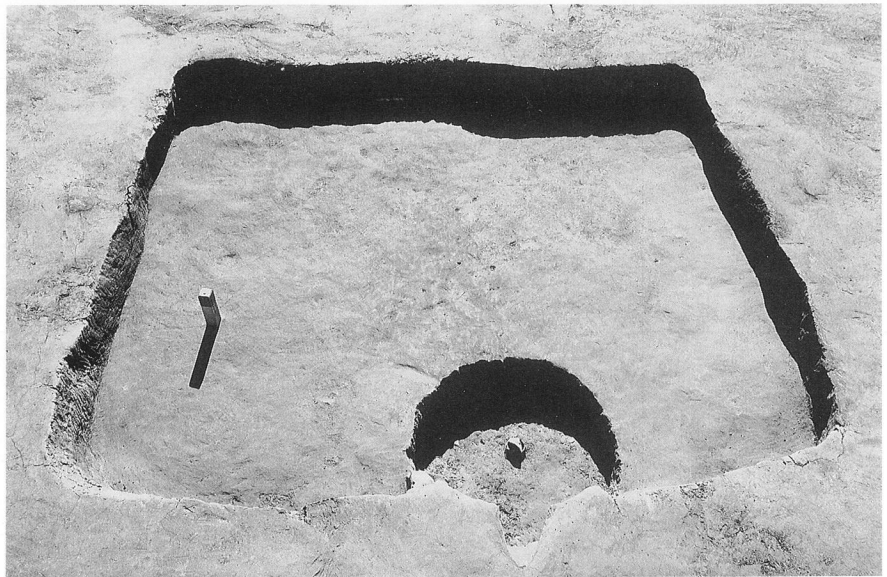
調査終了全景



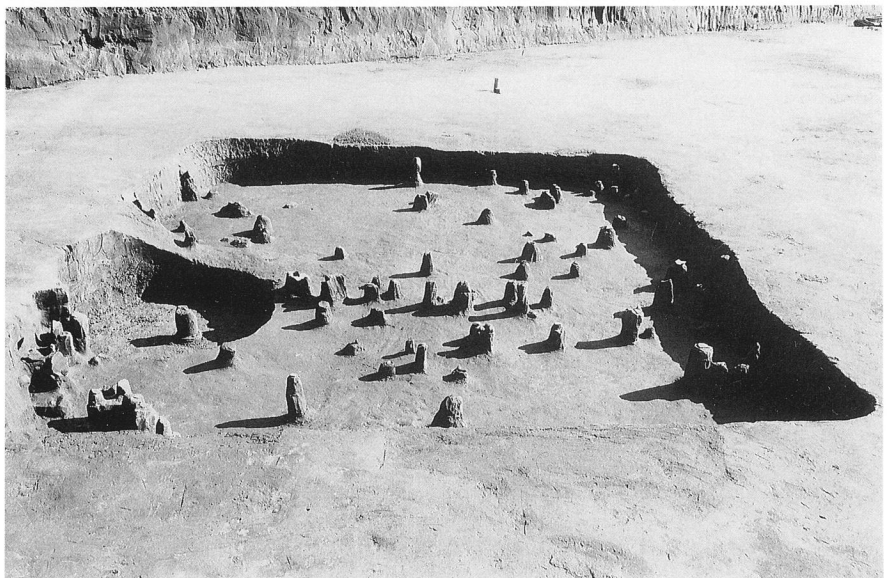
第1号住居跡完掘状況



第 1 号住居跡遺物出土状況

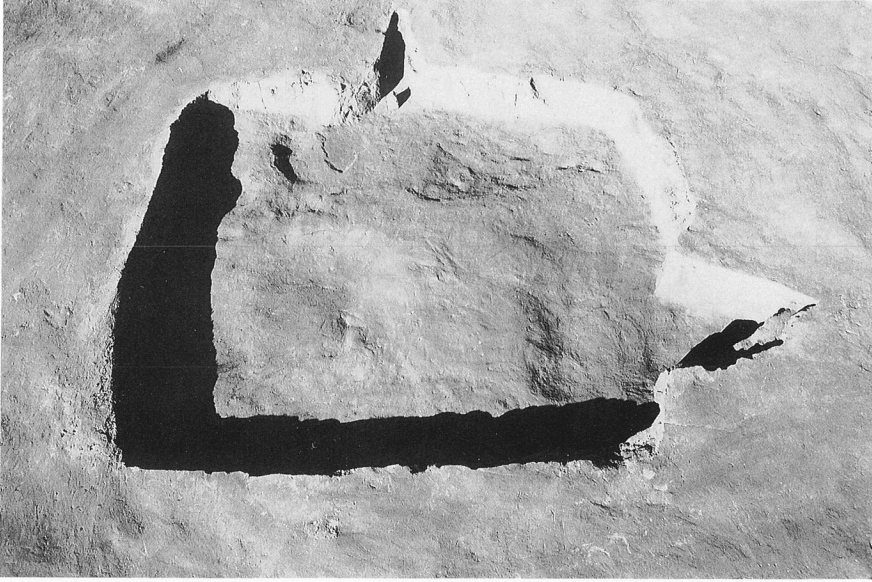


第 2 号住居跡完掘状況



第 2 号住居跡遺物出土状況

PL 4



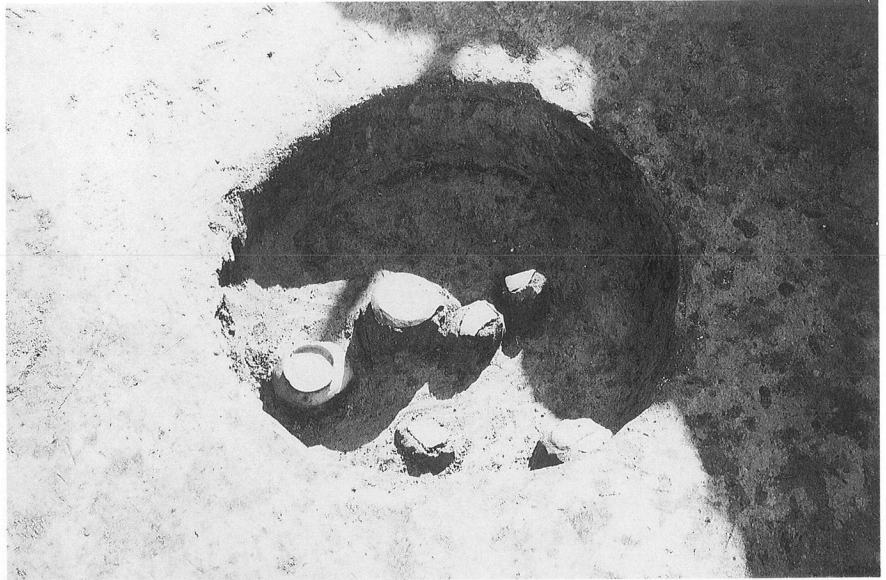
第3号住居跡完掘状況



第3号住居跡遺物出土状況



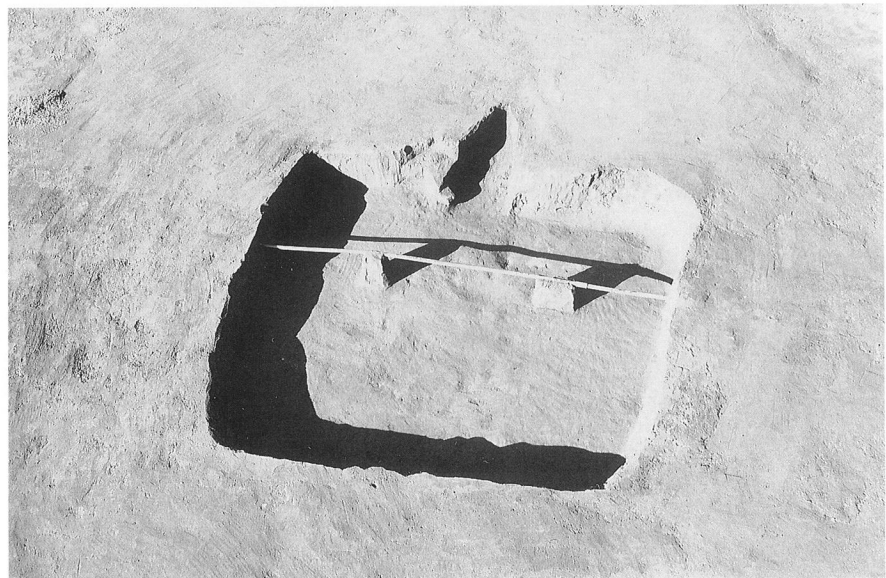
第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡P₁遺物出土状況



第5号住居跡完掘状況



第6号住居跡完掘状況

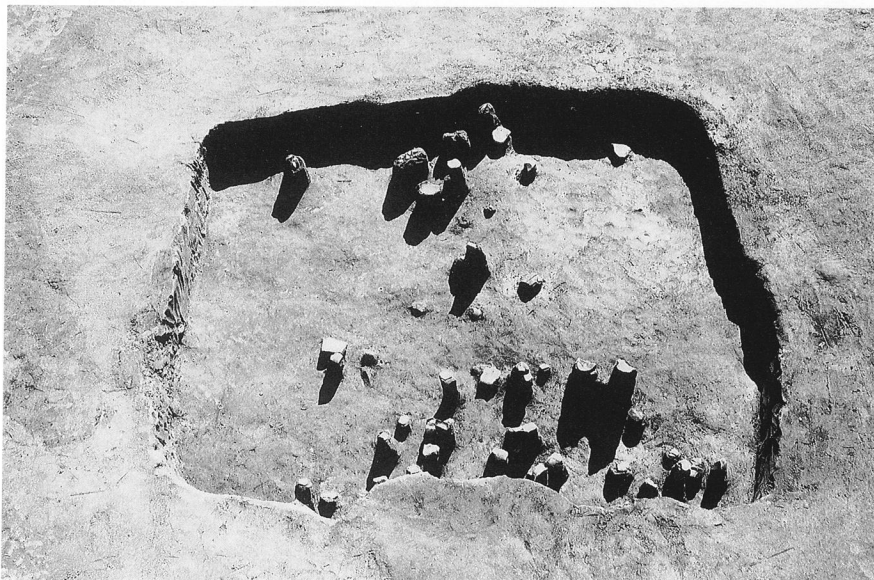
PL 6



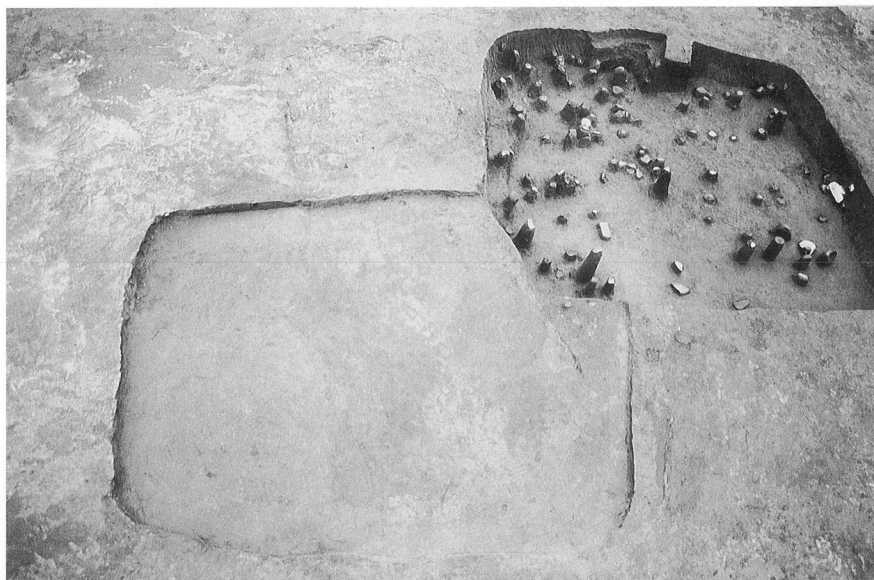
第6号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡完掘状況



第7号住居跡遺物出土状況



第 8 号住居跡完掘狀況



第 9 号住居跡完掘狀況



第 9 号住居跡遺物出土狀況



第9号住居跡北竈遺物出土状況



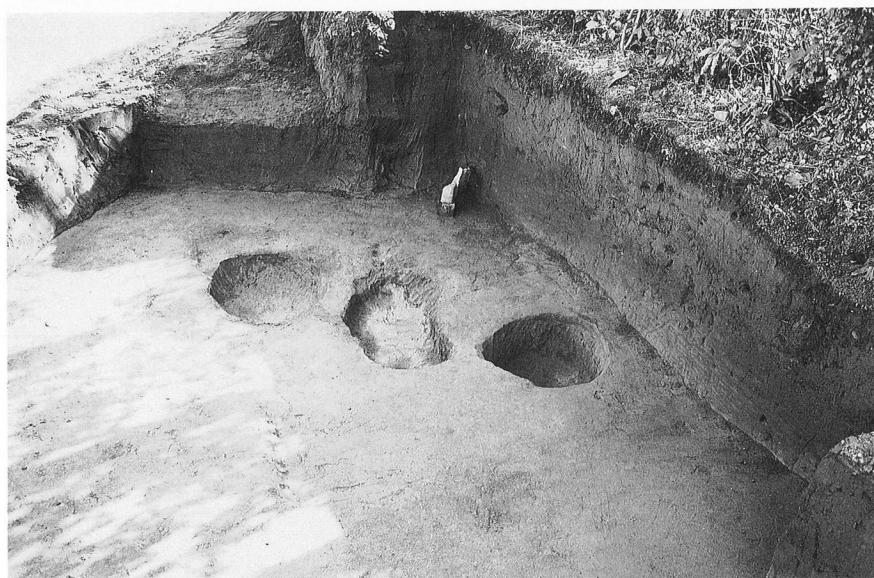
第10号住居跡完掘状況



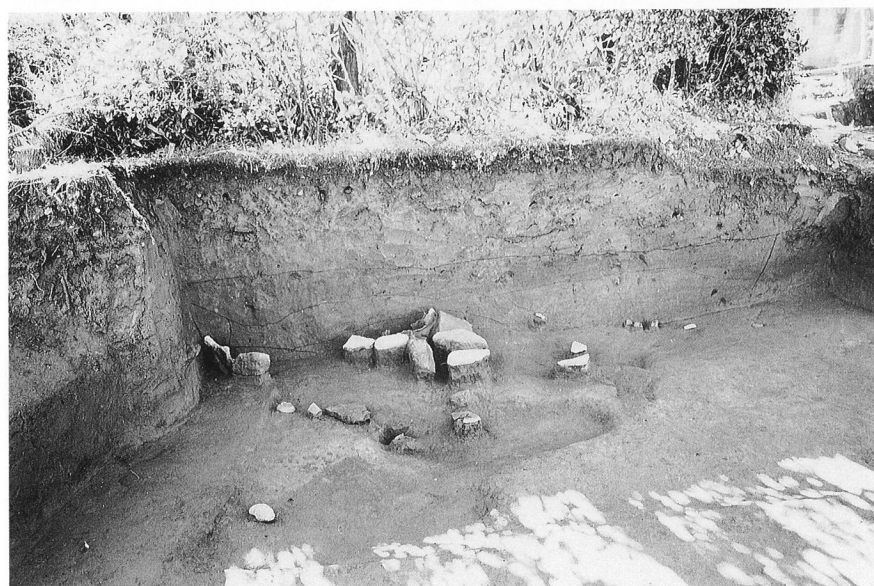
第10号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡遺物出土状況

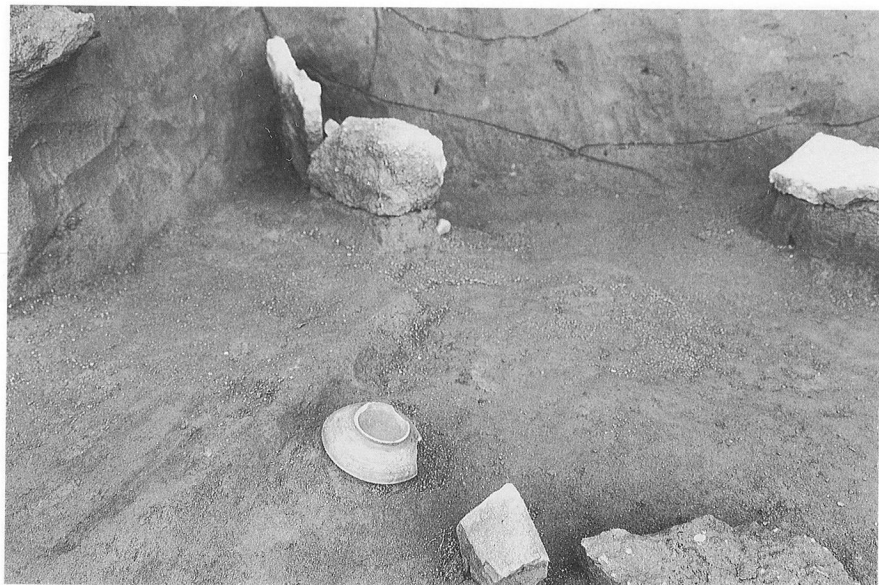


第11号住居跡完掘状況



第11号住居跡遺物出土状況

PL 10



第11号住居跡遺物出土状況



第12号住居跡完掘状況



第12号住居跡遺物出土状況



第12号住居跡P遺物出土状況



第12号住居跡P遺物出土状況



第13号住居跡完掘状況



第 1 号土坑完掘状况



第 9 号土坑完掘状况



第 9 号土坑遺物出土状况



第 10 号土坑遺物出土状况



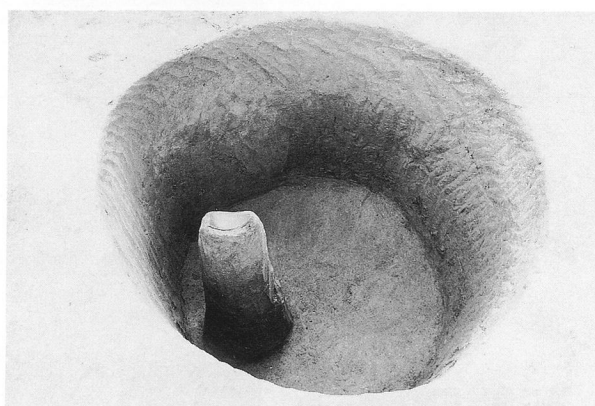
第 13 号土坑遺物出土状况



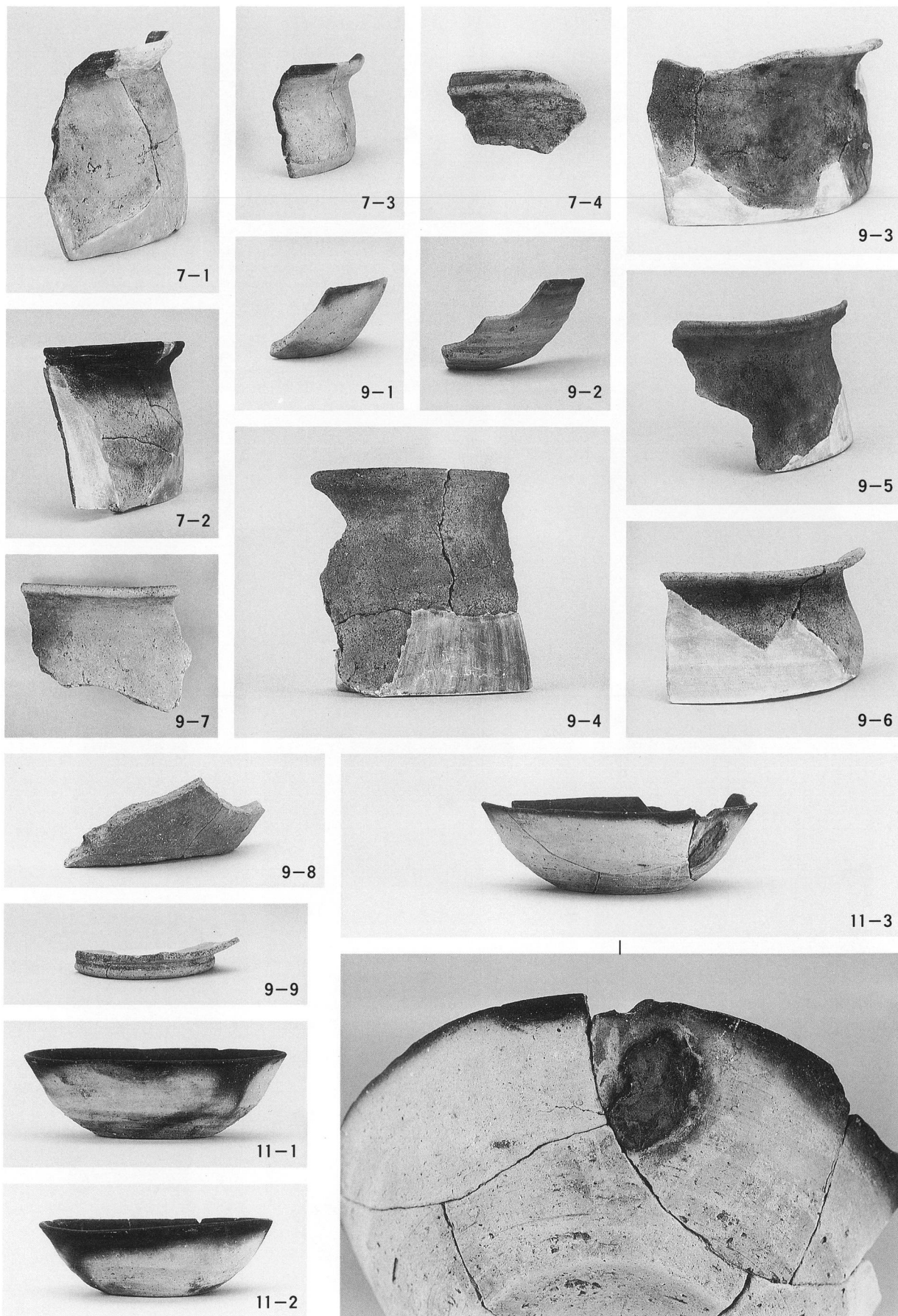
第 14 号土坑遺物出土状况



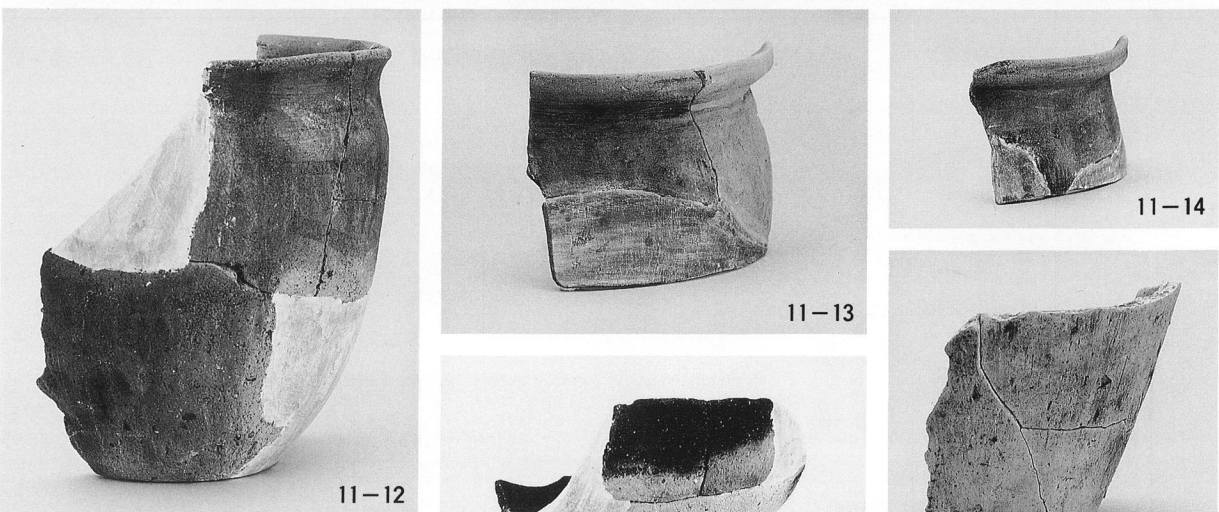
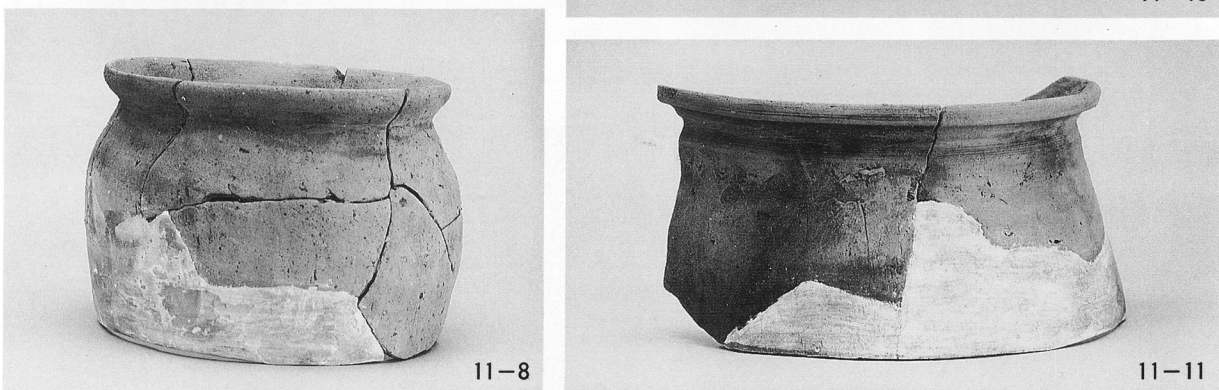
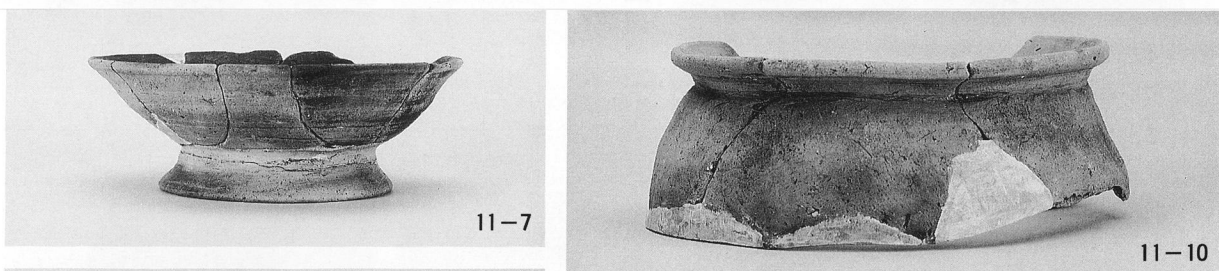
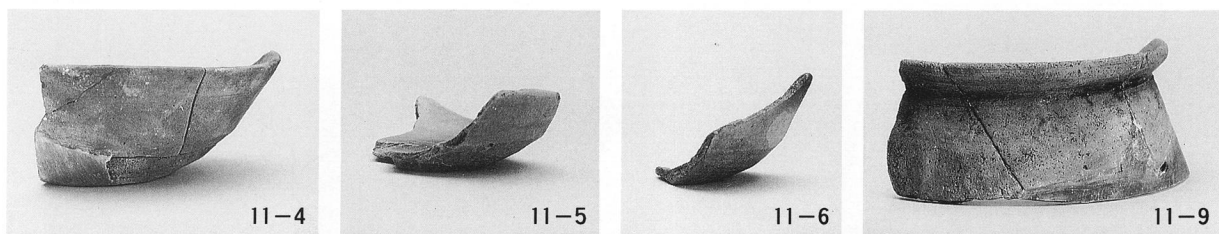
第 15 号土坑完掘状况

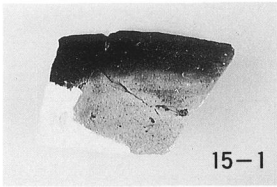


第 23 号土坑遺物出土状况



第1・2・3号住居跡出土遺物





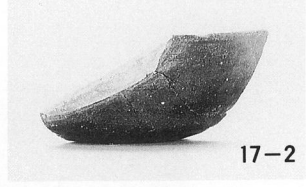
15-1



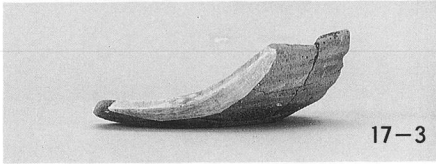
15-2



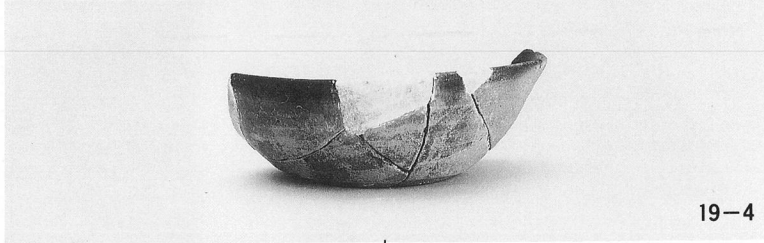
17-1



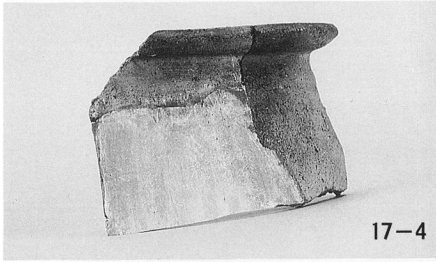
17-2



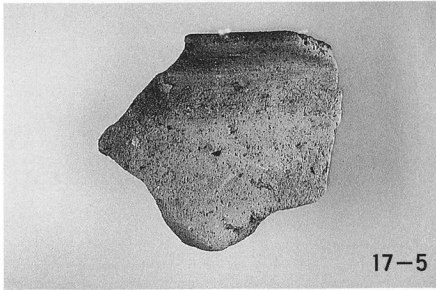
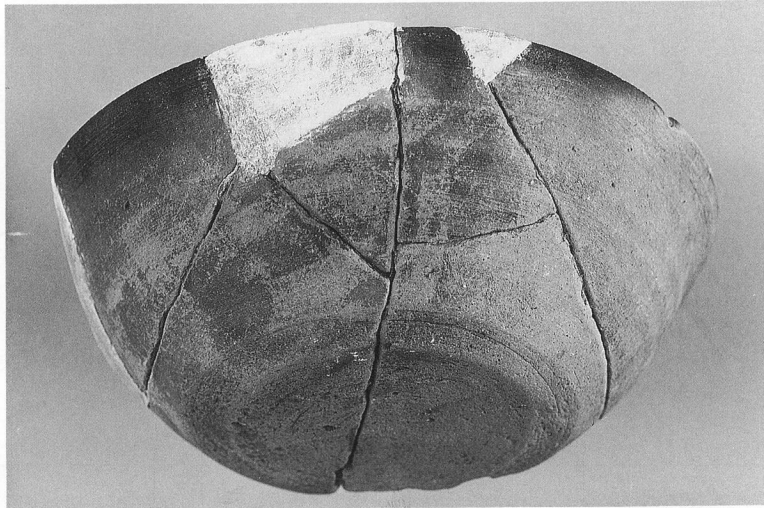
17-3



19-4



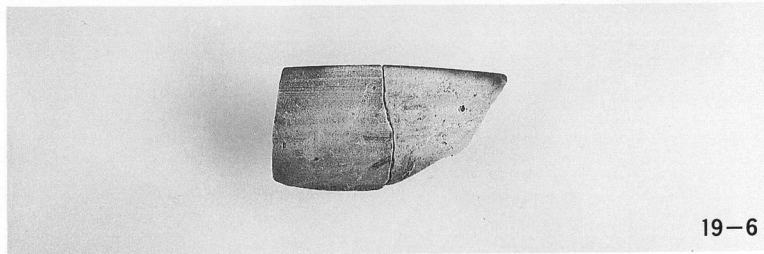
17-4



17-5



19-1



19-6



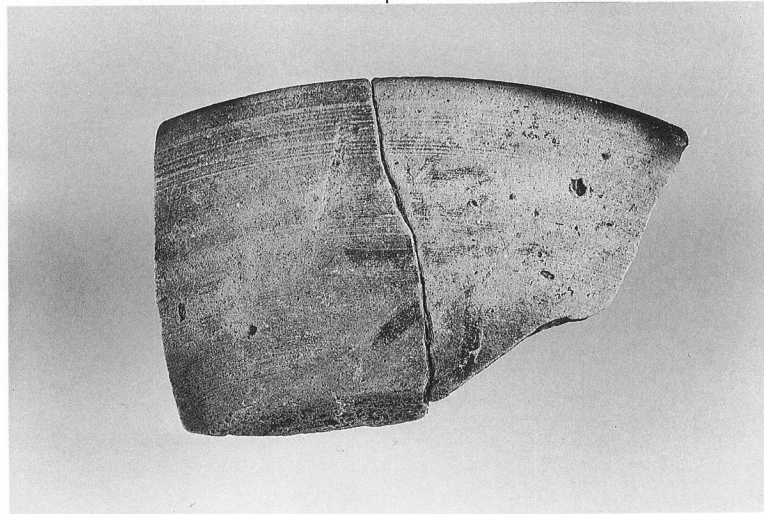
19-2



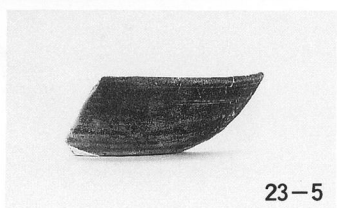
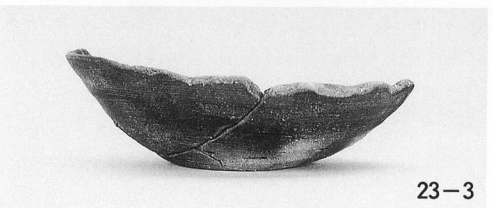
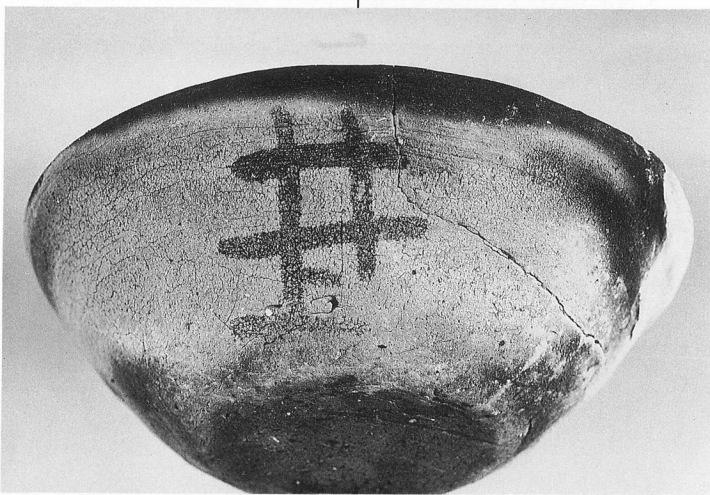
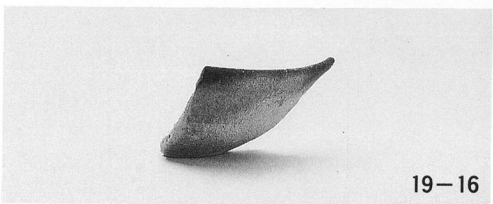
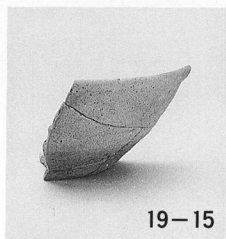
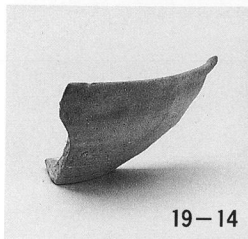
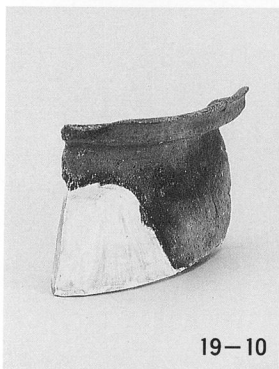
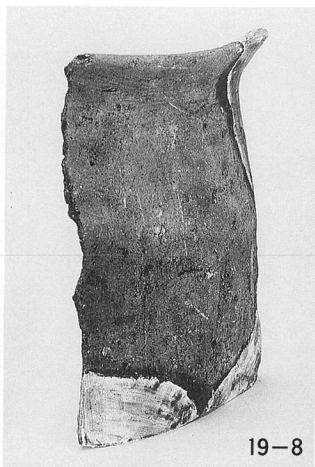
19-3



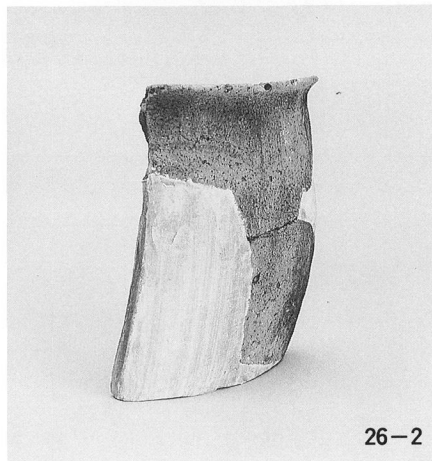
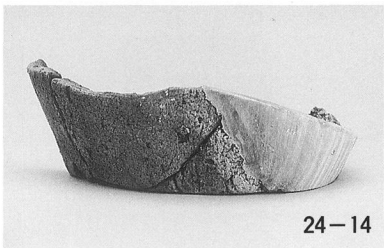
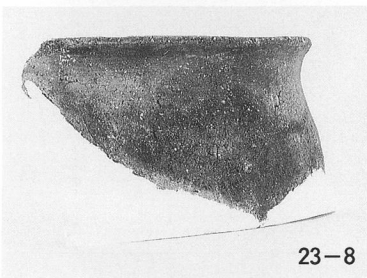
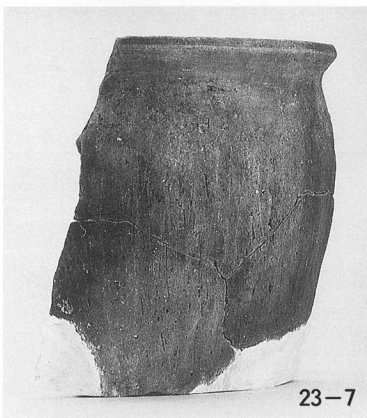
19-5



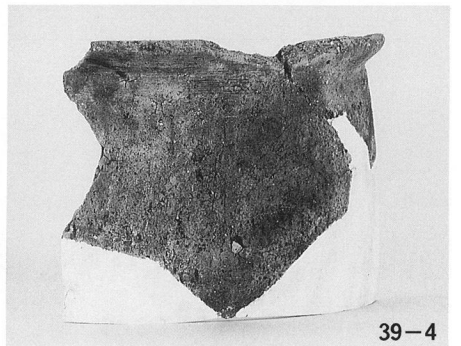
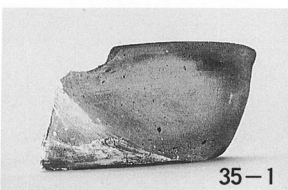
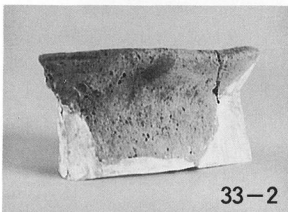
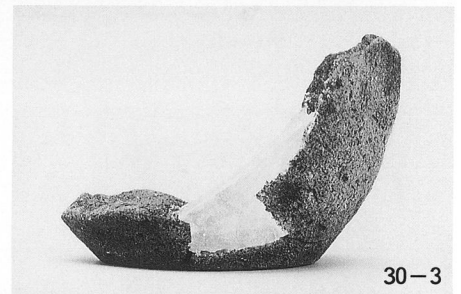
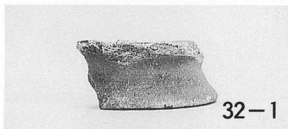
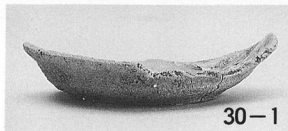
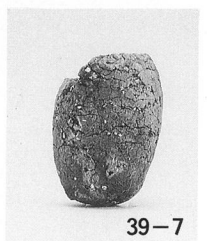
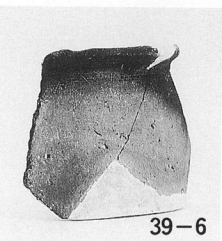
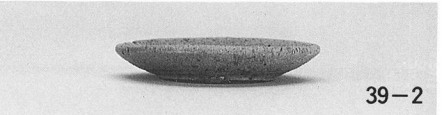
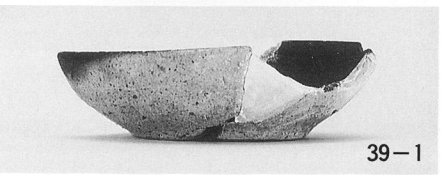
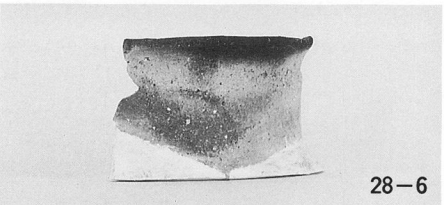
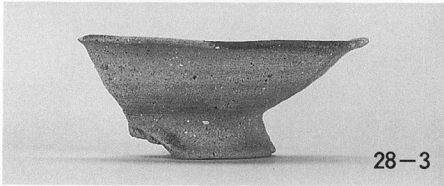
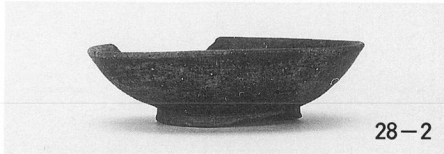
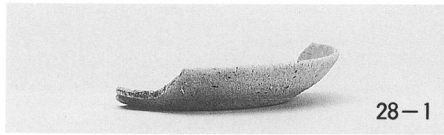
第5・6・7号住居跡出土遺物



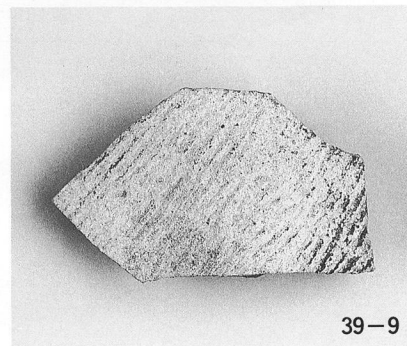
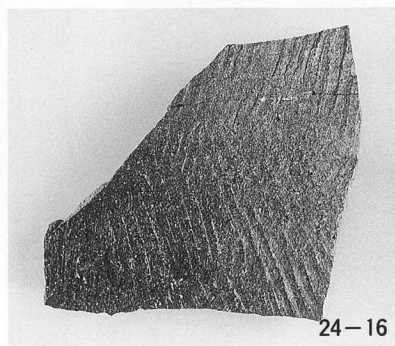
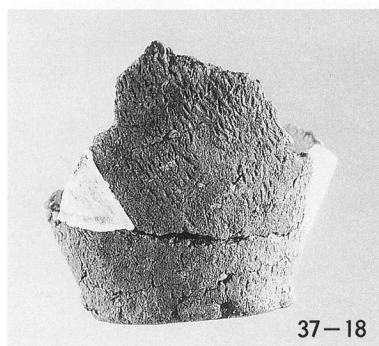
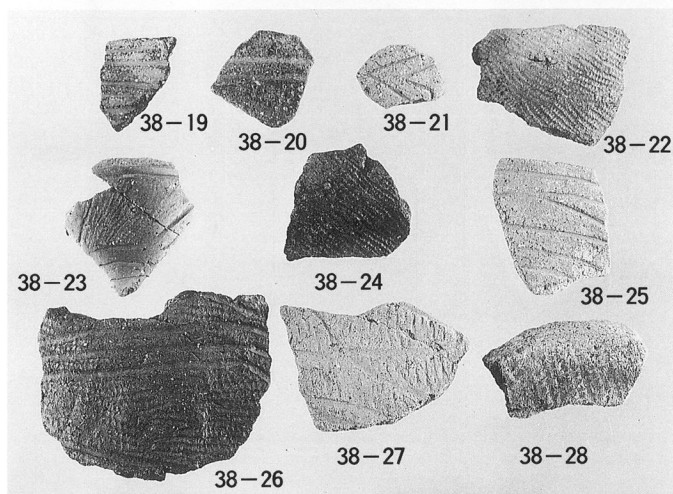
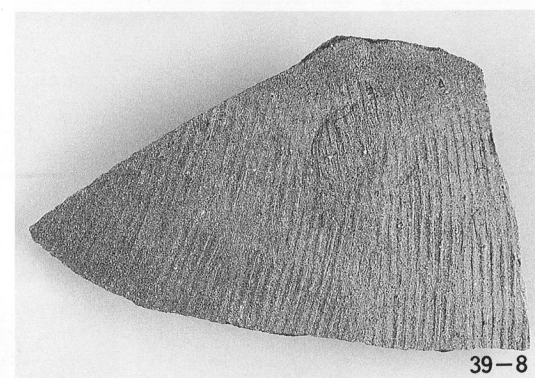
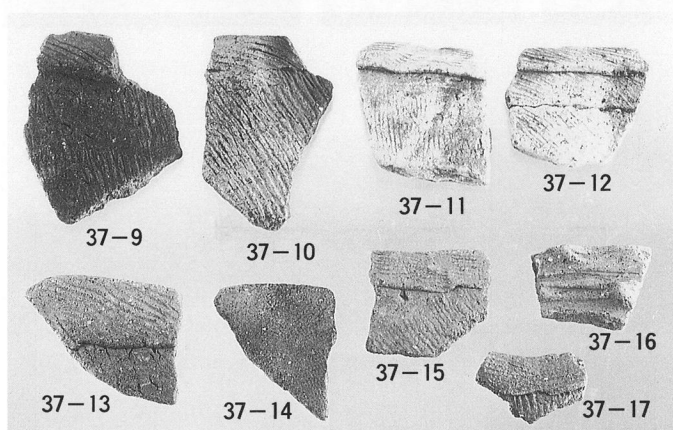
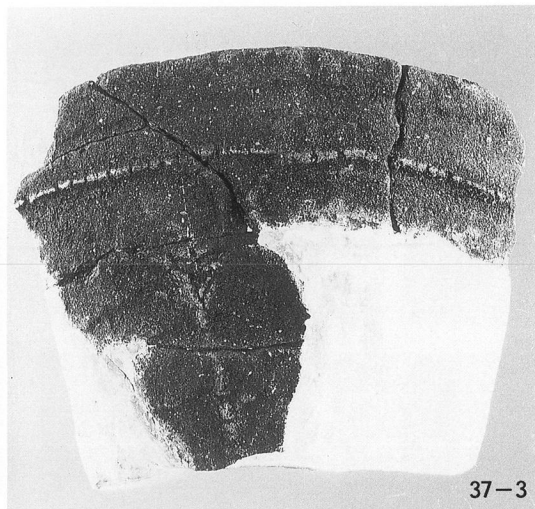
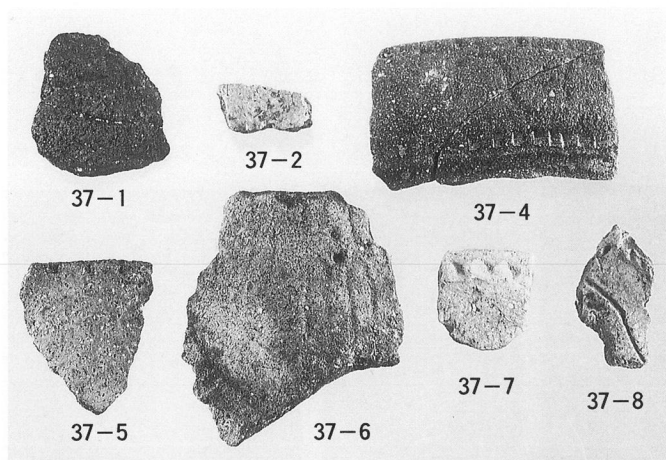
第7・9号住居跡出土遺物



第9・10号住居跡出土遺物

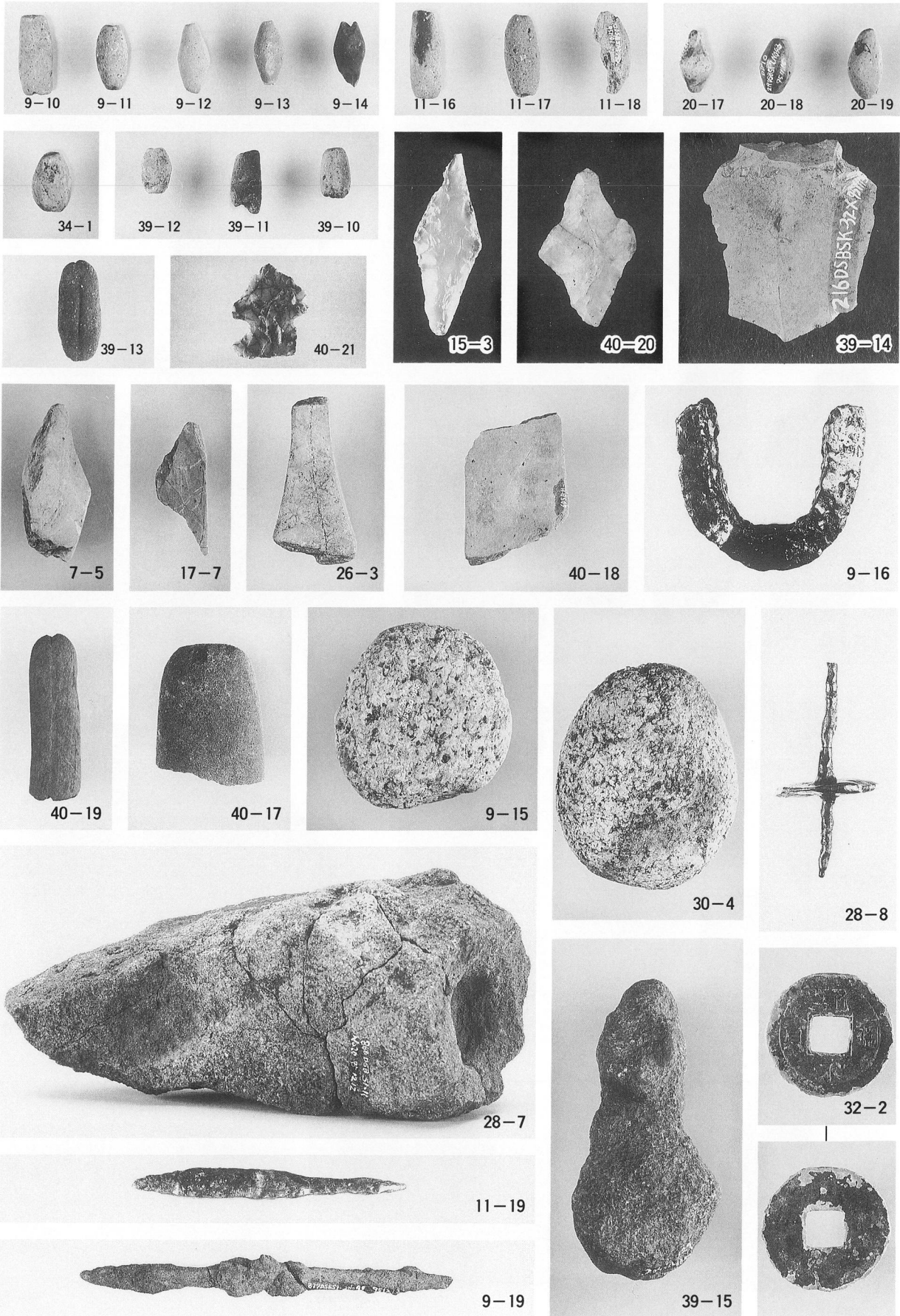


第11・12・13号住居跡出土遺物，第9・23号土坑出土遺物，遺構外出土遺物



第6・9号住居跡出土遺物，遺構外出土遺物（縄文土器・弥生土器・須恵器）

PL 20



各遺構・遺構外出土遺物（土製器，石器，石製品，鉄製品，古銭）

茨城県教育財団文化財調査報告第126集
一般国道118号道路改築事業
地内埋蔵文化財調査報告書

番 城 内 遺 跡

平成9(1997)年6月23日 印刷
平成9(1997)年6月30日 発行

発 行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市見和1丁目356番地の2
T E L 029-225-6 5 8 7
印 刷 (有) ミツギ印刷社
水戸市河和田町4433-33
T E L 029-252-8 4 8 1